
我拳は銃なりて

Caster

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我拳は銃なりて

【Nコード】

N3392V

【作者名】

Caster

【あらすじ】

二次創作好きの男がテンプレ乙のごとく二次創作へ…

神いわくハッピーエンドを目指せらしいけど…そんなの当たり前だろ？

ネギま？…上等だよ。俺だけの物語っていつのを見せてやるぜ！！自慢の拳でどんな敵も貫いてやる！！

といきこんでみたけど、これって俺のキャラじゃないからやめよ…ってな感じで二枚目になりきれない三枚目がお送りする物語。

原作破壊・キャラ崩壊はテンプレってことでどうか一つお願いしま

す
!
!

プロローグ（前書き）

初めましてCasterといいます。

久しぶりにssを書き始めたのでうまくいくか不安ですが頑張って投稿していききたいと思います。

さて最初はプロローグ。

大体こんな感じと言うものを掴んでくれればそれでいいです。

それでは我拳は銃なりて始まります。

プロローグ

暗い

ああ…そうか電気消したっけ。

ってあれ？体が動かない。まさかこれが俗に言う金縛りって奴なのか？

うは…なんか貴重な体験してるな。

「なんじゃ。結構落ちついとるの」

は？

誰か俺の部屋にいるのか？

俺は一人暮らしのはずなんだけど…

「ああその疑問については簡単じゃ」

へ？

「あのな…お主は死んだのじゃ」

は？………はああああ！？

「それでじゃが…」

いやちよつとまてよ。何でそんなに軽いんだよ。ていうか死んだって何？

「ちなみにお主の死因は病死じゃ」

いやいや…そういうことを聞いてるんじゃないやなくてだな…。あーもう訳が分からん。最初から説明してくれ！！

「ふむ。それもそうじゃな…。ごほん。まずお主はすでに死んだ。これは良いかの？」

良くないけどまあ…話が進まないからそれでいい。

「懸命な判断じゃな。…でじゃ死んだお主は今輪廻の狭間に来ておる訳じゃが…大体のものはここを素通りして三途の川に行くのじゃが、お主は少々特別での、じゃからこうしてここにとどまっておると言っわけじゃ。」

ふゝん。ていうか本当に三途の川なんてあるんだ…。

それで…いちお死んだ俺が特別ってどういうこと？

「お主は平行世界と言っ言葉を知っておるかね？」

まあ知ってるよ。簡単に言えば俺がいた場所に良く似た別の場所のことだろ？

「まあその理解で大体あつておる。本来人とは同じ世界でしか生きられんものじゃ。どんな死に方をしても同じ。同じ世界に転生する事になるわけじゃが、数億人に一人と言っ割合で他の世界に行く資格を持ったものが現れる。それがお主と言っわけじゃな」

なんていうか…テンプレ？いや違うな良く似たものを俺はよく知っ
ている気がする。

「まあお主の世界で言っ二次創作、いや外史といった方が分かりや

すいかの？それと同じ運命をたどる必要があるということじゃ。」

必要？

「まあここからはちよつとしたこぼれ話になるわけじゃがな。世界には刺激と言うものが必要での。同じことを同じようにやつてもその世界は変わらない。ループしているのと同じそれではいかんのだよ。」

と言うと？

「変わらない世界など、死んでいるのと同じじゃ。まあ極論かもしれないが。世界も人も一緒日々変わる事で生きている。そのためにお主のように違う世界に転生する事が出来るものを探し、そっちに送り届けるわけじゃ。」

なるほど。極論って言ったけどなんとなく分かるような気がするわ。

「そう言ってもらえて嬉しいの。さて、話を戻すが本来ならその資格があつても記憶を消してそっちに転生するようにすればいいのじゃが…。今回行く場所は少々特殊での。なのでこうして転生する前に話をしとる訳じゃ。」

特殊ねえ…。ただでさえ別の世界に行く事になつてるのにさらに特殊とは…。俺運がいいのか悪いのかわかんねえ。

「まあそう言わんでくれ。で、特殊と言うはじゃな言ってみれば白い世界。つまりこれからつくられる新しい世界に飛ばされる事になつておるのじゃ。」

新しい世界…。つまり自分の思い通りに世界を創れるってことか？

「正確にはちよつと違うがの。新しい世界といつても一から創るわけじゃなくて、元からある世界をベースに新しい未来を創ると言ったところかの。まああれじゃ二次創作みたく原作破壊して自分が望む未来を創れってこのじゃの。」

みたくじゃなくて…まさにそのまんまじゃないか。

「それがそうとも言えんくての。大きく違う所は、規制が厳しいという事と、こちらの言う事を聞いてもらわなければならないということじゃな。」

めんどくさそう…

「そう言わんでくれ。まず規制についてじゃが、能力の制限じゃな。良くある他の世界の技術や技魔術などは原則としてもって行けん。つまり他の世界にFateの法具は持って行けんし、特殊能力とかもなしというわけじゃ。」

なんていうかすでに死亡フラグが立ってる気がするんだけど？

「まあそれなりの事はできるから大丈夫じゃろ。次にこちらの言う事を聞いて欲しいということじゃが…これはいろいろある。まあどんな世界に行ってもやってほしい事の一つは決まっておる。ハッピーエンド。これだけは実行して欲しい。」

それはあたりまえだろ？誰が好んでバッドエンドなんかなるかよ。

「ま、そうじゃろつて。ではあらかた説明が終わった所で…お主が

行く世界を教えよう」

いよいよか…柄にもなく緊張してるな。
出来れば知ってる世界が嬉しいが…

「お主が行く世界はネギま。魔法と科学両方が存在する面白い世界じゃな。」

へーちよつと嬉しいかもしれない。まあこれが本当のことだったら
だけどね。

「なんじゃ。まだうたがつとるのか…まあそれが普通かの。でじゃ
そこでお主はハッピーエンドを目指すわけじゃが、それを達成する
ために幾つかの力を授けようと思う。さてまず最初はお主の力…つ
まり魔力とか気の力のことじゃな。すまんがこれはお主の意見は聞
けん。ベースの強弱を壊されてしまったては意味がないので。」

まあ確かにチートって奴にあこがれはあるけど、チートすぎるのも
どうかと思うから別にいいです。

「良い心がけじゃの。さてまずお主の魔力じゃが、最終的にはナギ
と同じくらいにはなれるが、初期は赤き翼のアルより少し下と言う
程度にしておく。そして気も最終的にはラカンより少し下と言う程
度にはなるが、最初はガトウより下と言うところになる。」

えーそれってすでにかなりのハイスペックじゃないですか。チート
にはしないって言ってたのにどういことですか？

「それは仕方がないんじゃ。お主が飛ばされるのは丁度世界大戦の
真っ只中。それくらいないと一人では生きていけんからの。では次

はお主の能力についてじゃが…何か希望はあるかの？」

希望ねえ…じゃあまず自分でオリジナルな魔法をつくってみたいかな。後はエヴァを人間に戻してやりたいんだけど…それも出来るのか？

「オリジナルについては魔法の才能をつけておく。それで大丈夫じゃろうて。そして…エヴァを人間に戻したいと言うことじゃが…これも大丈夫じゃな。ただそれ単体の力というものはほぼ無意味になつてしまつから、呪いも結界も状態異常も治せる力を授けることにするぞ。他にはあるかの？」

他…他…あ！ちよつと聞きたいんだけど他の世界の技はもっていないってことだけど、あつちで自分で再現するっているのはありなのか？

「ありじゃな。それに技と言つたがそれは特殊な力を用いなければ出来ない技。例を挙げるならNARUTOの血継限界を用いた技のことじゃからな。普通の武術や他の力で代用可能なものならいけると思うぞ？」

なら俺、銃闘技を使つてみたいんだけど…それは大丈夫なのか？

「む！それはなかなかマニアックな…じゃが可能じゃな。グレーゾーンではあるが、あれは特殊な鍛錬を用いる事によってできるようなになる技じゃ。ブラットバーン…セカンドスキルについても才と言うほどのものじゃないから別にかまわん。しかしブラックアウトとかはちゃんと起こるから注意が必要じゃけどな。気を用いれば強力な武になるじゃろうて…。まあその分鍛錬はつらいものになるじゃろうが…そこはお主次第じゃな。それじゃそのために必要な武の才

とついでに知識を授けておこう。鍛錬方法も必要じゃし、原作にも詳しくは書かれてなかったからの。…ああサービスとして他の世界の武術の知識も与えておく。どう使うかはお主しだいじゃ。」

おお！それはうれしい。あゝあと一つだけ欲しいんだけど闇の魔法と感卦法と一緒に使える技みたいなのがほしいな。これってやっぱり無理？

「むゝ。なかなか難解なことをいうな。じゃができない事はない。ただしそれ相応のデメリツトは存在する事になるがかまわんか？」

まあそれが無いともう人じゃなくなるから仕方がないと思う。

「この考え時点ですでに人の道から外れる事になっておるんじゃが…まあ良い。あくまでネギまの世界にのつとつた力じゃからあの世界でももしかしたら実現可能かもしれんからな。さてその力については了解じゃ。詳しくはあちらに着いたときにポケットに紙を入れておくのでそれをみてくれい。あと名前じゃが…然となずけるが良い。これはネギが開発した太陰道よりもっと進んだ技法じゃ。これぐらい大それた名をつけてもよいじゃろ。」

分かった。これで十分。他はいらないよ。

「言われんでももう無理じゃよ。ああこれは必要として授けるのじやが、練金の知識と才もつけておく。銃闘技についても然についてモノにするには時間が必要じゃ。魔法球があれば効率よく出来るし、魔法媒体も自分でつくらんと手に入れるのは苦労するじやろうからな」

それはありがたいね。…ってなんか話進めちゃったけどこれは実は

夢でしたっていうオチはやっぱり無いわけ？

「ないぞ？それじゃ送るから達者でな」

え…いやちよつと…まって…いや…まってくださ…

こうしてこの話の主人公こと伊達武はネギまの世界へと旅たつのであった。

そこに待ち受けるのはどんな物語なのか…

それでは我拳は銃なりて…その物語を始めましょう。

「いったの。ワシはもう見守るしか出来ん。お主の未来が幸あらんことを。」

「あ、最初の課題いい忘れたの。まあ…紙で指令を送ればよいか…さて次の案件は…」

プロローグ（後書き）

今日はもう一話更新予定です。

第一話：親友との出会い。原作介入まであと少し！！（前書き）

と言うことで予告どおり投稿しました。

原作まで飛ばして行くので中身がちよつと薄いかもしれませんがそこは皆様の想像力で一つ補っていただければ嬉しいです。
では物語を始めましょう！

第一話：親友との出会い。原作介入まであと少し！！

ん…ここはどこだ？

確か俺死んで……………！！！！

「あゝ…………俺死んだってやっぱりマジだったのかよ！！……うかあの神、もっとこうなんかあるだろ普通。死んだから他の世界に転生しろ！？そんなんで納得できるか…………！！！！」

「……………といつても今更仕方が無いんだけど。はあ…………とりあえず現状確認だな。確か手紙かなんか俺のポケットに入っているって言うてたよな。……………見てみるか。」

〈神の手紙〉

この手紙を見ておるという事は無事に転生できたという事じゃな。さてもう一度言うがそこはネギまの世界じゃ。時代的には世界大戦真っ只中。赤き翼にラカンが加入する少し前といった所になる。まづお主にはラカンと一緒に紅き翼に入り創造主を倒してもらう事になるわけじゃがそのためには自身を鍛える必要があるため2～3ヶ月前とさせてもらった。

近くに荷物があるがその中には魔法球を作るための材料と魔法媒体を造る為の材料が入っておる。それと魔法球に入っても歳をとらなくする魔導具の材料も入っておるからうまく活用してくれ。少し歩けば町へ行けるし、すぐ近くに洞窟があるからそこで己自身を鍛えるが良い。

3ヶ月たった後、近くの町にラカンと、紅き翼を倒して欲しいという依頼人が現れる。そこから原作に介入して欲しい。町に行けばそのまま自然に介入できる予定となっておる。

ただし！！その時にどうしてもラカンと戦わなくてはいけなくなるため可能な限り力をつけておく事じゃ。――（実戦については心配ない。洞窟には誰も来る事は無いが、近くの森には幻獣など数多くの生物が生息しておる。そこで実戦を経験しなれることじゃ）

ちなみにお主の年齢は14歳となっておる。それとあくまで不老不死ではないから、死なないよう注意するように。

二枚目にはお主が望んだ”然”の詳しい内容とデメリットが書いてある。それと言ってから思い出したのじゃがいくら魔法の才があっても知識がないと意味が無いので、魔法のことも少し記載しておいた。それ以上は誰かに教えてもらうように。手助けしようにももう送ってしまった後だったからそこら辺は納得して欲しい。

そして三枚目は地図と今この世界の情勢が書いてある。あつて損は無いはずじゃから使ってくれと嬉しい。

最後に、この世界では魔法世界がつくられた世界というわけではなく、ちゃんと生きておる。創造主とかは原作と同じ知識しかもっておらぬのでそうとは気付いておらんはずじゃ。なので心配せんでもよろしい。

ではお主の未来が幸福でありますように…

神

〈神の手紙・終〉

「…………ん。ちょっとはいいい人？じゃん。何も分からないままと言うわけでも無さそうだし、いきなり原作介入なんて無茶な事も言わないからちよつとは感謝してもいいかもしれない。さてと…」

俺はそう呟いてあたりを確認すると手紙の通り近くに大きなバックとそのすぐ後ろには洞窟があった。手紙に書いてあった通り俺はバックを持ってまず洞窟へと入り自分を強くするためにまず魔法球の製作に取り掛かるのであった。

……ネギまの世界に着いてから一日が経過した後。やっとの事で魔法球を作り出すことに成功した。知識とかは何が作りたいかを考えればおのずとその答えがうかんで来る様で、たいした苦勞もしなかった。モノ自体はプラモデルでもつくっているような感覚でくみ上げていけるので大して時間が掛からなかったが、魔術式を込めたりするのになれてないせいか、時間が掛かってしまい一日が経過してしまった。

ちなみに飯はバックの中に多少のお金があったので近くの町へ行って買ってきた。

町に行って今更だが本当にネギまの世界に来たんだなと実感したのは仕方がないと思う。

「さてと…魔法球は出来たし、中の時間も一時間を一日計算にしたし後はどうしようか…」

そう言っって少し考える。確かに魔法球は出来たがその中にはまっさら土地があるだけ、建物はおるか森も川も無い。そんな世界に行っただころでよい鍛錬は出来ないし第一生きていける気がしない。なので設定を少しいじり中に森とか川…更には滝まで作ることにした。森ができるまでは時間が掛かるらしくそれまでは中に入ること出来なかった。

「こうして待っているだけってのも時間の無駄だな。どうせラカンと戦うのは必然なわけだから少しでも早く鍛錬を開始するか。とりあえずは銃闘技を習得しないと…」

俺は頭の中にある銃闘技習得の鍛錬を開始し、その鍛錬のきつさに涙するのであった。

そして更に一日がたち……

「いたたた…全身…特に腕の筋肉痛がひどいな。まあ仕方が無いのかもしれないけど。とにかくこれでやっと魔法球に入れる。歳のとらない指輪も出来たし準備万端だな。さて…いっちょ気合入れていきますか。」

これから待ち受けるきつい鍛錬に心が折れないように、明るく振舞って心を奮い立たせる。

そして中に入って最初にやった事といえば……自分が住む場所。つまり建物の建設だった。

以外にもそれが良い鍛錬になり、更に言うなら気の運用の仕方も学べたため良い経験になったと思うようになったのは鍛錬を始めて少したった後だった。

——ここよりは修行のダイジェストとなります。

銃闘技の修行

「120…121…ってなんで腕立てじゃなくて拳立てなんだよ。拳立ては骨に異常を起こすとかどっかの情報で耳にしたことがあるぞ!？」

「…ていうかいい加減拳立て飽きたんだよ。もっと他の鍛錬法とかねーのかー!!!!!!」

銃闘技をマスターするために拳立てをされていてあまりの地味さに発狂しかけている主人公こと武…だからと言って拳立てをやめない所は素直というか真面目と言うか……まあただやる事が他に無いだけだからがもつとも有力である。

魔法の修行

「プラクテ ビギ・ナル”火よ灯れ”！！……………って火ともんねー
ー！！！」

「ああ…いい加減灯りやがれ！！！」

ポオオオオオオオオ……

「ケホッ……………うん。まあ魔法って危険だな。いい加減にやつちやこ
つちの身が持たない。慎重にやっていこう。……………じゃないとこれは
軽く死ねる」

初級の魔法も出来なくてイライラしていた所。魔力が暴発してしま
い漫画でよくある真っ黒になった武。これを気に慎重に魔法を使う
事になる。
ちなみにこの時初めて漫画のおなじみの展開ができてちょっと感動
してしまったのは仕方がないと思う。

初実戦

「なんだ…初めてだから大変だと思ったけどそうでもないかな。ま、
こんな感じならよーだね。」

ポタ…ポタ…

「ん？雨か？なら今日はこれくらいにして……………は？」

「いや…あのね。確かによーとかいって調子のったのはいけない

と思うよ？でもさ…なんでここで竜がでてるのかなあ。……しかも俺の事なんかロックオンしてない？いやいや…あれですよ。俺なんか食っても美味しくないし、第一貴方の大きさじゃ俺を食っても腹膨れないでしょ？だから…その………逃がしてくれませんか？」

グオオオオオオン

「ヤツパムリデスカー…タスケテクレー」

調子に乗って森奥に進んでしまい。竜とエンカウント必死に逃げて何とか逃げ切れたのは良かったけど、それ以降何故かエンカウントしやすくなってしまった。
ある意味主人公の宿命。ちなみにそれ以降しばらく森に入れなかったのは仕方がないと思う。

そして武がネギまの世界に来てから3ヶ月がたった……

「ふう…。いろいろあった3ヶ月とうとう原作へ介入か……思い起こせば………うん。つらかった思い出しかないな。強くなるために籠りつきりだったからなあ…あまりに人と喋らないから幻獣に話しかけてしまった時は……今考えると末期だったんだろうな。」

目を細めてそう呟く。

何故か涙がこぼれ落ちているのはこの際気にしてはいけない事なんだろうと思う。

「まあいいか…そのおかげで幻獣と実はお話ができる事がわかった

し、ほとんどストーカーみたいに俺を追いかけた竜は恋人に振られてやけになってただけらしいし……ってあれ？俺って一歩間違えれば竜の奥さん貰ってたわけ？……考えるのはやめよう。涙がまたあふれそうだよ。」

必死になって考える事をやめ、涙を堪えていると自分のすぐ下から声がかかる。

「どうしたん？タケちゃんそろそろ向かわんと今日までに町につけへんで？」

そう声をかけてきたのは幻獣達が住む森で仲良くなった一匹の虎。変な関西弁と人懐っこい正確から龍牙（りょうが）と名前をつけた。愛称は龍ちゃん。

出会いは最初話しかけてしまったのがこの龍ちゃん、話している中で妙に馬が合いそれから一緒に行動を共にしている。話を聞くと幻獣の中には人に化けれるモノもいるらしいのだが、それには歳を重ねないといけないらしく龍ちゃんには無理とのこと。だけど体自体は小さくなったりするのは可能なので前に一緒に町に行った時はぬいぐるみサイズになって肩に乗っていた。

ちなみに戦闘能力はかなり高く、それなりに強そうな魔法使いや、幻獣なんかは軽々倒してしまう。ケンカの勝敗は50勝49敗と勝ち越しているが、お互いに本気でやりあうとかなりやばい事になるため最初の一回以降やってはいない。

「いやな。ちよつとこれからのことを考えてただけだよ。」

「ふん。でもタケちゃん。そんなちよつとかっこいい事言ってみても二枚目にはなれへんで？」

「なっ…!!おいおい龍ちゃん…俺はどうみても…」

「三枚目やで」

「ムカツ!!てめっ!!今日こそその減らず口閉じさせてやる!..」

「やれるもんならやってみいや〜!!..!!」

——しばらくケンカしておりますのでしばらくお待ちください——

「はぁ…はぁ…龍ちゃん。なんかもうどうでもよくなったからそろそろ行こうか?」

「せやな。暗くなる前にいこか」

ぼろぼろの体を引きずりながら町へと向かう一人と一匹。

これからもつと大変な事が起こるというのにこんな調子で果たして大丈夫なのだろうか?

とにかく話は進みとうとう原作介入へ…

筋肉バカ登場まで後もう少し

く我拳は銃なりてく第一話・終

第一話：親友との出会い。原作介入まであと少し！！（後書き）

今日はこの後設定を投稿して終わります。

主人公・オリキャラ紹介

オリジナル主人公

名前…伊達 武（だてたける）

年齢…14（世界大戦時）

血液型…AB

身長…178

体重…80

見た目…GODAGUNにでてくる大蛇龍牙そのまま。ただし頬に傷は無い。

髪の毛は短髪茶色。

服装は剛打銃の服装に良く似ている。ちなみにジャケットの後ろには”狼”の文字が入っ

ていない。戦闘時は皮の手袋を装着する。（皮の手袋にはリボルバーがついておりこ

れが魔法媒体でもある）

性格…戦争嫌い。二枚目になりきれない三枚目原作で戦争を長引かせていた「完全なる世界」が嫌い。

ただ覚悟をもつて行動にあたる人は嫌いじゃなく、逆を言えば力によって起こりうることから目をそむけている人は「完全なる世界」より嫌い。（簡単に言えば一般的な”立派な魔法使い”とか原作のネギなどが特に嫌い）

普段は温和で人当たりも悪くない。後、主人公にはデフォである鈍感は装備されていない。

きっかけ：二次創作を読んでいる途中で、寝てしまい。そのまま帰らぬ人になった所を、神が漫画の世界に転生する資格を得たとかいって転生させる。（確率的にかなり低いが、どうやらそれに当たったらしい）ちなみに死因は病死。

知識：ネギまの世界のことはほとんどうる覚え。覚えている事といえばキャラの名前と何が起こるかぐらい（時期ははっきりしてなくて確かこんな事が起こるよな〜と言う感じ）

スペック

魔力：最終的にナギ程度になる（初期はアルより少し下ぐらい）

気：最終的にラカンにギリギリ届かないくらい（初期はガトウよりすこし下ぐらい）

魔力と気はほぼ同じであり、どれだけ鍛えてもこの比率は変わらない。い。
限界あり。

魔法で得意なのは火・水・風・闇。そのほかは普通。（使えて中級ぐらいまでだがうまく扱えないため魔力の消費量がかなり高くなってしまう。）

治癒力が高く、普通なら危険な状況でも一日たてば治ってしまう。（真祖の再生能力に比べたいしたことはないが、それでも普通の人から見たらありえない程）

神から貰ったモノ

闇の魔法：自分が思い描く魔法のために貰う。デメリットはなし。最初から闇の素養があり、さらに神 によって上乘せされた力によって、この魔法をつくったエヴァはもちろん。ネギよりも還元率がよく、また消費する魔力も少ない。基本的にはこつちを使う。

感卦法：ご存知の通りそのまんま。ただ闇の魔法も使えるためこつちを使う頻度は少ない。自分が思い描く魔法のために貰った。

武の才能：銃闘技を扱うためにもらった。ほかの漫画の世界の格闘技や剣術などを実際に行う事が出来る。他にも剣術↓拳術など才を駆使して新たな技を作り出すことが出来る。

魔法の才能：オリジナルの魔法を作るために貰った。原則としてネギまの世界の魔法しか使用できないため、ゲームの魔法を作ろうとしてもそれに似た魔法になる。ちなみに才能と適正はまったくの別物であり、いくら才能が有っても適正に見合った魔法しか使用できない。ただし、アイディアやアドバイスは出来る。

錬金術：魔導具をつくるために貰った。実際にはもつといろんなことが出来るはずなのだが本人はあまり使う気がない。

解呪：エヴァを人に戻したいという理由から貰った能力。名前は勝手に決めた。エヴァを人に戻す事が出来るだけではなく、そのほかの状態異常、呪い、結界まで何でも解呪できる力。代償として魔力をかなり使うことになる。発動は相手に触れて意識を集中させる事。それにより頭の中に鍵みたいなのが現れそれをあけることによつ

て解呪完了となる。

戦闘方法

俗に言う魔法拳士といった所。使用する技などは漫画から引用したものやオリジナルである。

技

銃闘技：強いあこがれと武の才能により再現した某漫画の技。これをベースに同じ他の漫画の技も改良して銃闘技に組み込もうと今考
え中。

オリジナル

”然”：名は神がなずけた。これはネギの太陰道をヒントにつくられた技法。闇の魔法と同じく体が魔法と同化し、さらに感卦法と同じく気と魔法を融合させ莫大な力を使う事が出来る。

ネギの太陰導では相手の力を自分の力に変えることが出来るが、自分の気は反発してしまい使用が難しかったため使う事ができなかった。それを改良し、自分の気の流れも闇の魔法を使用している状態で使えるようにしている。

主な効果

すべての値が限界を超える：魔力はエヴァより上に、気はラカンの数倍になる。

すべての属性の上位魔法が使用可能になる。

気の力により身体能力がかなり上がる。（イメージとして、ネギが太陰道を使いラカンの力を自分の力にしたような感じ）実際はそれよりも上。

相手の力を自分の力に変える

膨大な力のおかげで自分の分身を作り出すことができる。（分身の力は自分で変えられる）

相手の魔法・気による攻撃をすべて無効化することが出来るので、この技法を使用している状態ではまず死なない。

デメリット

無制限に使用する事は出来ず、発動時間は30分。

使用後は3時間は気も魔法も一般の魔法使いレベルまで落ち込んでしまう。

次の日は必ずひどい筋肉痛になる。

オリキャラ…1

名前…龍牙

性別…雄

種族…虎

幻獣であり武と話があつてから一緒に行動を共にする。変な関西弁を使いたまに武をからかってケンカしたりしているが、武のことを信頼し共に戦う。

体は本来一人乗れるくらいの大きさなのだが、町に出るときや知らない人間に会うときはぬいぐるみサイズに体を縮めている。

戦闘能力は高く。また幻獣の為魔法も使える。といつても詠唱とかするわけではなく炎を吐いたり体に纏う事によって直接攻撃をする。ちなみに纏う魔法の属性によって毛の色が変わる。

雷↓黄色

氷 ↓ 白
火 ↓ 赤
風 ↓ 緑
闇 ↓ 黒

よく纏うのは雷と火。苦手なのは光だけらしい。（本人いわく光は自分のキャラじゃないらしい）
酒が好物で14歳なのに酒が好きな武と晩酌するのが何よりも幸福な時間らしい。

主人公・オリキャラ紹介（後書き）

今日はここまで次話も出来次第あげていきたいと思います。
それではまた逢いましょう。

第二話：仕事の依頼？ラカン登場！！（前書き）

昨日に続いて連続の投稿ができました。

そして昨日上げたばかりだというのにもう評価してくださる人がいるとは…

ありがとうございます！！！！

もっと皆さんに楽しんでもらえるよう精一杯書いていきたいと思えます。

それでは第二話始まりです！！

第二話：仕事の依頼？ラカン登場！！

神が残してくれた手紙の通り3ヶ月たった後、武とその相棒である龍牙は目的の町へと着いた。

そして二人はまずラカンの情報を得るために酒場へと向かうのであった。

（武side）

酒場について適当にお酒を頼むと俺達は人から少し離れたテーブルに座りお酒を飲んでいた。

ちなみに龍ちゃんは今ぬいぐるみサイズになっているため、テーブルの上に座りお酒をなめている。それがちょっとかわいくみえてしまったのは内緒にしてほしい。

しばらくたつと周りを警戒しながら龍ちゃんが話しかけてきた。

「なあなあタケやん。ここにその…ヤカン？やっけそいつがくるんか？」

「ラカンな。…まあ予定ではそうなってるっぽいんだけど…実際はわからん。」

「そうそうラカンな。…でもわからんとか。いい加減やな。大体なんでそいつにあわなあかんのや？」

「……龍ちゃん。最近帝国と連合が戦争してるのは知ってるよね？」

「まあそれぐらいはな。いくら幻獣のワイでもしつとるで。何時の時代も人間っちゅうもんは争うのが好きな種族やの。いい加減あきへんのかな？」

「耳に痛い話だけど、それは無理だと思うよ。…それでね。ちょっと事情があつてその戦争を起こしている奴を叩き潰さないといけないんだよ。んでそのラカンっていう奴と一緒に行動していけばじきにそいつにぶつかる可能性が高い。だからラカンにあわないといけないのさ」

「ふゝん。正直な話いろいろ納得できへんけど…まあタケヤんがやらなあかん事やったらワイはそれを手伝うだけや。」

「すまん。龍ちゃん」

「ええて。…ただ何時でもええ、タケヤんが秘めとるもん教えてな。一人で抱えてもええことなんてたぶん無いで？」

「ありがと…でも虎に慰められるなんて…人としてどうなんだろ。」

「虎は虎でもタケヤんよりよっぽど歳をとつとる幻獣じゃ！！大体ここでそんな発言がますから二枚目やのうて三枚目やっていうんやで！！」

「んなっ！！今ここでそんな話する必要ないだろうが！！」

「なんやまたやるんか！？さっきので懲りたとおもつとつたんやけどな。」

「フッフ…人の恐ろしさその身におしえこんだるわー！！！！！！」

———ただいまぬいぐるみサイズの虎と本気^{マジ}ケンカ中———

しばらくケンカをしていると、その光景を遠巻きにみていた一人の男性がこちらに向かつていきているのが見えた。龍ちゃんもそれに気付いているようだったが、下手に行動しても怪しまれると思い龍ちゃんと目配せをしてケンカを続けていた。

するとまるでケンカの仲裁をするかのようにその男性が話しかけてきた。

「もし…ちょっとよろしいか？」

「なんや！！ワイらは今取り込み中じゃ後にせんかい！！」

「あほか！！…すいません。このアホ虎が失礼な事を」

「いえ、かまいませんよ。それよりも貴方とその使い魔なかなかのウデとお見受けしました。」

「ほほう…。おっちゃんなかなかええ目もつとるやないか。」

「お…おちゃ…ん。まあそれでなんですが少し仕事を頼まれてもられないでしょうか？」

「仕事？いきなりですね。それも自分で言つのもなんですが身元もさだかでない人ですよ？」

「それは別にかまいません。少しでも仕事成功するようにいろんな人に声をかけておりますので…もし仕事を請けてもらえるなら今日の夜中町の中央にある酒場まで来てくれませんか？仕事か成功したあかつきにはかなりの金額の謝礼を約束します。それでは」

用件だけ伝えるとその男性はこの酒場から出て行った。

その男性が言った言葉が気になり、俺たちはケンカをやめて最初と同じように座り、何事も無かったかのようにまた酒を飲み始める。ケンカしたおかげで酒場のマスターから凄く睨まれてしまい、迷惑料として少し多めにお酒を注文したのは当然の配慮だと思う。

「にしても仕事ね…。なんつうかこうフラグがビンビン感じるんだけど。」

「つまりあの男についてけばタケやんがいつとった、ラカンっちゅう奴にあえるってことか？」

「確証はないけどね。」

「まあ…そういう感的なものは大体あつとるやろうな。」

「…というと？」

「ワイは人より鼻が利くから分かるんやけど、血の匂いがしたわ。少なくともまともな依頼やあらへん。それにタケやんが言ってたラカンは傭兵なんやろ？なら戦いと血の匂いがする場所におるんやないか？」

「龍やん何今更頭良いみたいなキャラつくってんだよ」

「これが普通や！！…まったく。たまに真面目に話したらこれかい」

「すまん、すまん。おもわず…」

「まあええわ。もうケンカする気なくなっただし、それにマスターが怖いからな」

「……それについては同感」

そう小声で話しマスターを見る。

多めに注文したおかげか、先ほどよりは視線に殺気がこもっていなかったが、それでもチラチラこちらを見て様子を伺っている。

多分もう一度ケンカをすればそれこそこの酒場からは追い出されてしまっただろう……それも修理費込みで……

そんな未来を想像してしまい二人して体を震わせると、龍やんが何かを思い出したように話す。

「ああ……それとやなああの男亜人やつたで？それも血の匂いのほかにもいろんな匂いがしたからな結構いい所の出やないかな。おそらくは……」

「……帝国だろ？」

「なんやタケヤンも気づいっとったんかい」

「まあ亜人ってことくらいはね。それに龍ちゃんが言った匂いから考えてそう思ったただだよ。」

「ふーんそか。……それでどうするん？」

「もちろん行くよ。ラカンに逢うためにもね」

「そやるな。……じゃ、まだ時間もあるし」

「ああ……とりあえずは頼んだお酒全部飲み干そうか。」

そうやって俺達は多めに頼む事になったお酒の片付けに入るのだ

もちろんこれからの事についても相談はしていたのだが……最後の方はお酒によつてしまいべろんべろんになって何を話していたか忘れてしまった。

お酒は適量にしないといけない。

この言葉が俺達の心に深く刻まれた日になった。

[illegible]

しばらくして、約束の時間になった俺と龍ちゃんはある男が言っていたように中央へ向かいその酒場を探した。

というよりも中央についたらすぐ目立つ所に酒場があり、しかも先ほど声をかけた男が入り口に立っていたのでたいした苦勞もせず目的の場所へついた。

「おお…。お待ちしておりました。きつと貴方様方なら着てください。と思っています。」

「まあ俺達もお金欲しいからね。お金は大事だよ」

「それは結構。それではご案内します…他の皆様はもうこちらにいますので…」

そう言って店の中に入っていくと、そこにはあきらかに普通の客じ

やない人達であふれていた。

「ふん。確かにいろいろあつまっとるなあ。でも皆なんか弱そうやで？」

「こら龍ちゃん。そんなほんとの……げふん。そんな失礼な事言ったらいかんだろうが。」

「だってやなゝタケヤン」

そんな事を小声で話していると後ろから声がかかった。

「その虎の言う通りだな。こんな足手まとい達と一緒に仕事なんてしたくねーぜ。」

『は！？』

「兄ちゃんもそう思ってたんだろ？」

そう言つて会話に入ってきたのは……俺が探していた人物。

「千の刃」「死なない男」「伝説の傭兵剣士」といわれる事となるジャック・ラカンその人だった。

「それよりも兄ちゃん。俺様といっちゃ戦ってみないかい？」

俺達が驚いていると、それをまるで無視するかのように話を進めるラカン。

しかもはたから見たら笑っているのに、目が笑ってない。それどころか俺達にぶつけてくるかのように闘気をだしてきた。

「いやいや。俺なんてあんたには敵わないし、弱いからやめてお
よ。」

「H A H A H A！下手な謙遜はよくねーぜ？弱い？よくそんな事が
言えるな。俺様の闘気を難なく受け止めていやがるくせによ。」

「これぐらいなら誰でもできるだろ？」

「誰でもねえ…ならお前の後ろの連中はどう説明するんだ？」

そうラカンが指摘し、俺も後ろを振り返って見るとさっきまで騒い
でいた連中全員が机に突っ伏して眠っていた。仕事を依頼してきた
男も同様だった。

するとラカンが依頼人の男に近づいて何かを確かめる

「あゝこりやダメだな。明日の昼ぐらいまではおきねーわ（笑）っ
てことは…だ。これからは暇になったってことだろ？」

そう言ってこちらに向かって笑いかけてくる。
ていうか、絶対にわざとだろ。そうなんだろうラカン！！

「はあ…強引だな。そんなに戦いたいのか？」（まあここでなんや
かんや言っても戦うのは決まってるんだろうけどね…にしても展開
が強引すぎるけど…）

「おほっ！やる気になってくれたのか？いいねえ。俺様は戦いが
いのある奴と戦うのが大好きなんだよ。」

「でも一つだけ聞かせてくれ。何で俺なんだ？」

「そりゃ俺様がすげーからだよ。」

「は？」

「俺様ぐらいつえー奴になるとな、そいつがいくら隠していようと
その強さが大体分かっちゃうもんだよ。兄ちゃんの肩に乗って
いる虎もかなりつえーだろうがな、それよりも気になるのはお前だ。
まだ大して歳いってねーくせにその身からにじみ出ているのは、ま
るで何年も修行したかのような力そしてさっき威嚇のつもりで闘気
をだしたっていうのにそれをまるで何も無かったかのように受け止
める胆力。気になるなって言う方がおかしいと思うぜ？」

「なるほど」(あれ？なんかイメージと違うな。ラカンってもっと
バカっぽくなかったけ？)

「ま、それでも俺様の方がつえーけどな。H A H A H A H A…」

「そうですか」(あ…いや、やっぱりバカだわ)

「なーなータケやんが戦わんのやったらワイがやってもええで？」

「お！？それも面白そうだな。」

「龍やんお前いつの間にそんなバトルマニアみたいなことを…」

「いやいや…そんなわけないやん。でもな？こんな正面きつて戦え
なんて言ってくる奴そうはおらへん。なら正々堂々戦ってみるのも
ええんとちがうんか？」

「龍やん……一人で男振り上げてるようだけどそれは許さんぞ？」

「だ・か・ら・！なんでタケやんはこういう所でそんな発言がでるねん！ワザとか？ワザとなんやな！？それともワイにケンカうつとんのかい！！」

「いやそんなつもりはねーけどさ…なんか気になって。」

「だからタケやんは三枚目やいうんや。ほんまこのバカは…」

「なんだって！？バカとかいうな！！そっちこそケンカうつてんだろ！？」

「なんや、このにーちゃんとやる前にのしたつてもええんやで？」

「上等だコラ！やってやんよ。」

おたがいにガンを飛ばしあつてるとつけていると、ラカン笑い声がまた響く。

「H A H A H A！本当にお前らおもしろいな。ただケンカするなら俺様もまぜろや。」

「じゃ町の外に出ようか。そこで決着つけてやる。」

「望む所や！！土下座してごめんなさいっていわしたる！」

「どこでもいいぜ？どうせ俺様が勝つんだからよ」

そうお互い言い合って町の外へと向かっていくのであった。

ちなみに酒場で突っ伏していた人達は、俺達のケンカが終わるまでずっとそのまんまだったらしい。

後から聞いてちよつと申し訳なくなつてしまった。

まあ龍ちゃんとラカン^{ラカン}は笑つてたけど…

く我拳は

銃なりてく第二話・終

第二話：仕事の依頼？ラカン登場！！（後書き）

今日はもしかしたら後もう一話更新できるかもです。

感想なんかございましたらもらえるとうれしいです。

ラカンのキャラこんな感じで多分あってると思うけど…どうなんだろう？

第三話：男達の語らい（前書き）

はい。と言うことで何とか今日中にUPできました。
今回は戦闘シーンもあってか長めとなっております。

自分が思っ限り精一杯戦闘シーン書いてみたのでうまく皆さんが想像できれば嬉しいです。

それでは第三話どうぞ！！

第三話：男達の語らい

（ラカン side）

俺様の名前はジャック・ラカン無敵の傭兵だ。

最近俺様が強くなりすぎちゃったせいか戦えるやつがいなくて暇してた頃に、男から声が掛かった。昔っからいろんな仕事をしてきたせいかこの仕事のやばさがすぐ分かった。

だけど、それこそ俺様が求めていたことじゃねーか。

つえー奴と戦える。そしていっぱい謝礼がもらえる。

まさに良いこと尽くめだぜ。だからこうして言われた場所に足を運んでみたんだが…正直落胆した。仕事のやばさから言って少しでも確率を上げるために人を集めるのは分かる。だがこいつらじゃいみがねえ…多分俺様の邪魔までしてくるだろう。

そう思うとこの仕事を受ける気がなくなっていた。

「…帰るか」

そう思い席を立った所で俺様は思わず立ち止まってしまった。

依頼人の人につれられてやってきたのはガキと小さい虎。

だが実際はそうじゃねえ…俺様だから分かるんだろうが、なんて力もってやがる。

一目みただけで分かる。あの存在感。しかも肩に乗ってる虎まで強そうじゃねえか…。

クククツ…さすが俺様ついてるな。こんな大物引けるなんてよ。

あーもう我慢できねえ。戦いてえ…

そう思っていたらいつの間にか体が動いてそいつに喋りかけていた。

さて、どうやって俺様と戦うように仕向けようか…。
久しぶりにマジケン力できるかもしれねーな。
とにかく楽しみだぜ

＼ラカン side 終＼

＼武 side＼

予定通りにラカンと出会い、なんかいつの間にかケン力することになつていた俺達は町の外に出ていた。

そして町からずいぶん離れた所につくと、龍ちゃんが俺の肩から降りる。

そして元の姿に戻っていた。

「お？お前さん幻獣だったのか？通りで…小さい虎のくせに存在感がハンパじゃねーわけだぜ。」

「まあな。普通ならワイのこの姿を見せるんは人ではタケヤンだけで、それ以外見せる気なかつたんやけど、にーちゃんならええかとおもつてな。」

「ははは！そう言ってくれるのはうれしいぜ。俺様の名前はジャック・ラカンって言っんだ。ジャックでもラカンでも好きに呼んでくれ。」

「わかったでラカン。ワイの名前は龍牙やそっちも好きによんでええで？」（なるほどコイツがタケヤンが言ってたラカンか…たしかにコイツと行動してけば目的を果たせるかもしれへんな。）

「さて。ケン力するんだろ？どうすんだ？俺様は二人がやりあつた

後でもかまわねーよ？」

「いや、それにはおよばねーさ。さっきは龍ちゃんとケンカごしになっちまったけど俺達はいつでもできる。それに……せっかくの客をもてなさない訳にはいかねーだろ？」

「そやな。……タケやん今さらキャラ変えてもしよせんは三枚目やあきらめ」

「おまつ……いいかげんにしろよ？少しは俺にも決めさせろって。」

「H A H A H A……本当にお前ら仲いいな。」

「まあな。」

「たぶんほめられてへんで？」

「……まあいいやともかくケンカしようか？」

そう言う俺は気持ちを戦闘状態に持っていく。

殺し合いとかは正直好きになれないけどケンカなら別。

俺も龍ちゃんとケンカしてるうちにいつの間にかバトルマニア見なくなっちまったな。

「お！なるほどそれがお前の本性か。いいねえ……さすが俺様だ。目に狂いはねえな。だけどいいのか？二人してかかってきてもいいんだぜ？」

「はっ！それはねえよ。相手が一人っていうならこっちも一人でやるのが普通だろうが。ケンカっていうのは対等な立場にあって始め

て同じ土俵にたてるんだからな。それに……ケンカはタイマンが一番おもしろい!!」

「ま、そういうことや。心配せんでもワイも後で戦うで。」

「いつてくれるじゃねえか。俺様ほどじゃなくても兄ちゃんかっこいいぜ?もう一度言うぜ俺の名前はジャック・ラカン兄ちゃん名前おしえてくれねえか?」

「ふっ俺の名前は伊達武。こっちの言い方ならタケル・ダテって所か」

「ハッ!タケルか…じゃそろそろ始めるかタケル!!」

「おう。戦闘開始だ!!」
オープンコンバット

「武side終」

「全体視点」

最初に仕掛けたのは武だった。

まるで狙撃するかのような姿勢をしてラカンに標準をあわせ、拳を打ち出して行く

「うお!何だこれ。拳が飛んできやがった。気弾ってやつか?」

「似てるけど違うよ。」

これは銃闘技の遠距離姿勢、そこから撃ち出されるのは通称ガンブレットという技である。

血液を用いた技で簡単に言うなら気を使っていない気弾である。

「だけどこんな攻撃へでもねえぜ!!」

そう言つてラカン^{アサルトポジション}は武から打ち出させるガンブレットと次々と討ち落としていく。

「そんなもん。最初から分かつてるよ。」

そう言つてまた姿勢を変えると今度は前傾姿勢となりラカンに向かつて飛び込んでいく。

銃闘技『突撃戦闘型』そこから繰り出されるのは、ガン・ダイヴァー^{アサルトポジション}。

強く踏み切り相手に向かつて突進を仕掛け、そのまま攻撃する技である。

この技はこのまま攻撃してもいいし、相手の距離を詰めたり接近戦に持ち込んだり、追撃をしかけたり、いろいろな用途があり攻撃をつなげる大切な技でもある。

「おーいいねえこつちに突っ込んでくるか。いいぜ派手な肉弾戦といこうじゃねえか」

武がこつちに突っ込んでくるのを見るとラカンも同じように突っ込む。そしてお互いに拳を振り上げて相手の顔面に殴りかかる。

ドカアッ!!!

「いってーラカンわざわざ顔狙うなよ。あとで飯食う時困るんだからよ。」

「へっタケルも同じだろうが！おらどんどん行くぜえええ」

そう言つてラカンが武に向かって連打を浴びせてくる。

「オラオラオラオラ！！！！どうしたまさかインファイトできないわけじゃないんだろ？」

「なめんな！！」

少し被弾しながらも、かわしタケルは姿勢を変える。

その姿はまるで西部劇に出てきそうなガンマンの構え。

それこそが銃闘技の接近姿勢…通称”迎撃防御射撃”そこから打ち出されるのはまるでマシンガンのような拳の嵐だった。

「はははっ！！まさか俺とインファイトでやりあえるなんてな。何時振りだよ。」

「何言つてやがるまだまだこれからだぜ！！」

武はそう言つと連打のスピードを更に上げる

「ちょ。まて！！へブブブッ…」

想像以上の連打にさすがのラカンもたえきれず連打をもろに受けてしまう。

しかもそれでも止まない拳の嵐に、かなりの巨体であるラカンの体がしだいに宙に浮かんでいく。

そのチャンスを逃す武ではなく、その隙に右腕をまるで撃鉄をおこすかのような感じで振り上げる。

すると振り上げた右腕の色がどんどん変わっていき鉛色になってい

く。

「げ！それはちょっとやばくね？」

その右腕の脅威を感じたのか、すこしあせった感じでそう呟くラカンをよそに武はその拳をラカンに向かって放った。

「くらえ！44マグナム！！」

ドコオオオン

その拳を受けたラカンは遠くへ弾き飛ばされた。

そして放った武の右腕は白煙が立ち上りまるで拳銃を撃った後をイメージさせるのであった。

これこそが銃闘技の奥義であり、代表的な技『絶対破壊44マグナム』である。
アフショリユートブレイク

腕を振り上げ（ハンマーコック）、血液を止めて力をためる。するとその腕は鉛色に変色し、筋肉がスプリングのように収縮する。そしてそれを解放した時、心臓から送られる爆発的な血液によって筋組織を一瞬にして活性化させる。その時に起こる爆発『血液爆発』
ブラットバーンのエネルギーを使い攻撃する。

これが『44マグナム』のメカニズムなのだ。
ちなみに先ほど使ったガンブレットやガン・ダイヴァーもその副産物である。

すなわち銃闘技とは、血液の力をかりた圧倒的なスピードと攻撃力を持つ武術なのである。

これは余談だが、武はこの『44マグナム』が好きで神に銃闘技を

覚えたいといったのである。

「あれ？綺麗に決まっちゃった。あゝこれで終りか？」

右腕から立ち上る白煙を腕を振りながらけしてそう喋る武。

武の言葉に龍牙が答える。

「タケやんのマグナムまともに食らったらワイでも沈むで？人やつたらあたりまえちゃうんか？」

「いや…そんなはずねえだろ。龍ちゃんだって分かってるだろ？ラカン俺達よりも強い。そんな奴が何もせずまともに食らったんだ。なんかあるだろ」

二人がそう喋っていると、いきなり体中に今まで感じた事の無い殺気がぶつけられる。

すぐさま殺気が発せられている方をみるとそこには倒れたラカンがいた。

「クククツ…アーハツハハハ…」

狂ったように笑い出すラカン。そしてゆっくりと体を起こしてこちらを睨みつけてくる。

その目は先ほどまでの楽しそうな目ではなく、まるで獲物を見つけたような猛獣の目をしていた。

「いいぜ。武…まさかこの俺様が本当に本気でやれるなんて…誇つていいぞ。」

「……………うわゝやべーなんか変なもんおこしちゃったかも…。」

「ていうかマグナムまともにくらって立つなんてホントに人か？」

ラカンから感じる先ほどとは比べ物にならない威圧感に思わず冷や汗が出る武。

そしてマグナムをまともにくらって立ち上がった事に驚いている龍牙。

確かに自分達より実力が上なのは知っていた。しかしそれでもこうしてまともに攻撃をくらって何事も無く立ち上がるラカンに二人は恐怖すら感じていた。

「いやー確かにタケルの最後の一撃…マグナムだったか。かなり効いたぜ。珍しいよな衝撃が突き抜けるなんて。こんな風に体に突き抜けた後まで残る。…なるほどこれは初体験だぜ。」

そう言って自分の体から煙が出ているのを見て嬉しそうに笑う。

「だがな俺様も無敵と言われている男だ。これぐらいじゃ倒れねえよ。それに…喜びの方が勝って倒れる気なんてまるでおきねえよ。」

「喜び？」

「ああ。俺様がマジで本気出しちまうと、すぐ相手をつぶしちまうからな。それじゃ面白くねえんだよ。だけど…タケルここからはマジだぜ？気も全開でやってやる。だからオメーも全力だぜ。それこそ俺を殺す気でな！！」

そう言って力を込めるラカン。そこから感じられる威圧感、そして気の強さはさすがバクキヤラと呼ばれる男。そこにいるだけで心が折れそうだった。

「……………気付いていたのか？」

「ったりめーだ。さっき気弾っぱいのだって気弾じゃないって言うてただろ？なら純粋な体術で戦ってたって言う事だ。だがタケルから感じた力はそんなもんじゃねえ！！オラだせよ。じゃないとすぐおわっちまうぜ？」

「分かったよ。」

そう言つと、さっきよりも鋭い目でラカンを睨みつける武。

それを見ていた龍牙は巻き込まれるのを恐れその場から更に外れる。

プライムファイヤード
「闘火薬点火」

「プライムファイヤード？なんだそれは？」

「…俺の心の火薬に火がついたって事さ。後はもう爆発するしかないんだよ。」

そう武が言つと、先ほどまで感じられなかった魔力が武から漏れ出し突風を巻き起こす。

それを見てラカンは更に獰猛な笑みを浮かべる。

「はーはっははは…。なるほどそれは言いえて妙だな。俺様も火つちまってるからな。同じように爆発するしかねえ…いいぜ見せてみるよ。タケルの本気つてやつをよ！！！！」

そう叫ぶとタケルに向かって突進してくるラカン。
それを見てタケルも本気を出すために呪文を唱える。

「オン・フイスト・ガン・ペンスリット
” 契約に従い我に従え炎の霸王” 来れ浄化の炎” 燃え盛る大剣”
” ほとばしれよ” ソドムを焼きし火と硫黄” 罪ありし物を死の塵に”
” 燃える天空” ！！” 固定” 掌握” 術式兵装” …… ” 炎帝”
！！」

呪文を唱え終えると武の周りを炎が包みこむ。

それを見てラカンが距離をとるためにバックステップをした。

「おいおい…。闇の魔法かよ。まさかそんなもん使えるなんて、さすがの俺様でも夢にも思わなかったぜ。しかもこの威圧感さっきとダンチじゃねえか。ククク…面白くなってきたぜ。」

炎に包まれている武をみて思わずそう呟くラカン。

声とは裏腹に視線はずっと武からそらさない。

一度逸らしてしまえばこちらが負ける。そんな雰囲気が漂ってきたからだ。

しばらくすると、いきなり炎が割れて中から武が出てくる。
その姿はさっきとは別人だった。

茶色だった髪の毛は燃えるような赤。

目の色も赤

体のあちらこちらから炎が上がっており、武の周りは陽炎が出来ていた。

それだけでもかなりの熱量をもっていることが分かる。

まさにその姿は炎の霸王…” 炎帝” の名に相応しかった。

「ラカンこれが俺の本気だ。さあ燃やされる覚悟はできたか？」

「はっ言ってくれるじゃねえか。そっちこそ吹き飛ばされる覚悟は出来てんだろぅな!？」

そう言い合つと二人はお互いに飛び出し、そして激突した。

そこからはもう誰も立ち入る事を許さない。まさに二人だけの世界であつた。

ラカンが気を込めた拳を繰り出せば、地面が大きくへこみ

武が拳を撃ち出せば地面が真っ黒に染まる。

二人が同時に拳を繰り出せばその衝撃波で地面が割れた。

そんな光景がずっと続く。

その光景の中心にいるのが武とラカン。

二人とも獰猛な笑みをうかべているのだが、それは何処か楽しそうで、子供が新しいおもちゃを貰った時のように無邪気な笑みに何処か似ていた。

もしかしたら二人はこの時間が何時までも続いて欲しいと思つているのかもしれない。

だがその願いは叶うことは無いだろう。
なぜなら始まりがあれば終りがある。

そしてとうとうこのケンカにも終りが訪れるのであつた。

「はあはあはあ…ぺっ…へへまったくたのしいぜ。」

口に溜まった血を吐き笑みを浮かべるラカン。

「ゴホ…ゴホ…俺はいい加減疲れたんだけど」

咳き込んで血を吐きながら答える武

「けっ。そう言う割には楽しそうな顔してんじゃねーか。もっと素直に生きようぜ?」

「素直だから嫌だっていつてんだよ!!」

「つれねえな」

「いっとけ」

そう言つて二人で笑い合う。

お互い軽口を言い合つてはいるが、すでに限界を超えており立っているのもやつの状況。

それでもこうして軽口を言い合えるのは負けたくないという強い意志が、それともただの強がりか…

そしてその時は訪れる。

「なあラカン」

「なんだよ」

「お互い限界も近いことだし、最後の大勝負をしないか?」

「いいなそれ… おもしれえ… もちろん乗るぜ。」

「決まりだな」

そう言う二人は少し距離をとり、お互い右腕に残っている力を集める。

さっきまであれだけ騒がしかったのに、いつの間にか音は無くなり、静かな時間が訪れる。

二人ともじつとして動かず、その時を待っていた。

ズサッ

それはきつと龍牙が動いた音だろう。普段なら気にならないその音が二人にはとても大きく聞こえた。

そしてそれはこのケンカを終わらせる合図であった。

二人とも図ったように同じタイミングで動き出す。そして先ほどまでためていた力を拳に乗せて自身が出来る最高の攻撃を繰り出した。

「オラア！！ラカンインパクト！！！！」

「いけえええ！！ナパームキャノン！！」

ドゴオオオオオオン！！！！！！！！

二人が放った拳によって辺りにすさまじい熱風と、爆煙が広がる。

その音を聞いて勝負がついたと思い、龍牙は二人がいるであろう場所へと走る。

そしてその場に着いたとき龍牙が見たものは……………

倒れている武と何とか踏ん張りながら立っているラカンであった。

「えらい派手にやったなあ。二人とも生きとるか？」

「H A H A H A …あたりまえ…グハアアア…」

多分大笑いして余裕ぶりをアピールしようとしたんだろうが、下手に大声を出したせいで盛大に血を吐いて倒れこむラカン。息があるので生きているだろう。

倒れている武の方といえば、体が動かないのだろう倒れたまま視線だけこちらを向けて答えた。

「はははっ…なんとかね。……………龍ちゃん」

「なんや？」

「……………やっぱり負けたよ。」

「そか」

そつ。そっけなく返す龍牙。だが心の中はまったく別であった。

力の差はあった。
しかも相手は傭兵。

戦闘経験ではどうあっても敵うわけがない。
つまり最初から負けることは分かっていた。
だけど…それでも……

タケヤンはきつと勝ちたかったのだろう。

そして負けたことがいつとうに悔しいのだろう。

ワイだつて”よくやったやん”の一言ぐらいかけてやりたい。

でもそんな言葉かけた所で余計悲しくなるだけや。

だからこそ今ワイができる事はそばにいてやる事。

そしていじけてしもうたらケツひっぱたいて前に進まず事ぐらいや。

でも…

そんなもなあ…

これだけは心の中で言わせてくれんか？

”ほんまええ勝負やった。……お疲れさん”

こうしてラカンと武の勝負はラカンが勝者となり幕を下ろした。

武がネギまの世界に来て3ヶ月…

初めて本気で勝ちたいと思い

そして初めて負けて悔しいと思った日であった。

なりてゝ第二話・終

ゝ我拳は銃

第三話：男達の語らい（後書き）

オリジナル技解説

始動キー『オン・フイスト・ガン・ペンスリット』

銃闘技と関係ありそうなものを探してくつつけてつくりました。

”ペンスリット”とは火薬の一種で、プラスチック爆弾の材料です。

”オン”についてはなんとなく音の響きが良かったからつけました。なんとなくそれっぽく聞こえると思います。

『炎帝』

”燃える天空”を闇の魔法で取り込んでみたら名前はやっぱりこれだと思っています。

いちお炎系最強呪文らしいので武が今できる最強の呪文ではないでしょうか？

ちなみに攻撃力特化設定です。

やっぱ火といえば攻撃力でしょう！！

『ナパームキャノン』

”炎帝”状態で”44マグナム”を撃つ時の技名となります。

敵に当たった場合、衝撃が貫通するのはもちろん、炎をまとっての攻撃なので相手を火達磨にする技です。ラカンはこれに打ち勝つ事が出来ましたが、普通の人ではまず打ち勝てないと思っていいだけばいいです。

ただし、ある人物だけにはこれを実つ向から斬る事が出来ます。名前の由来はそのまんまナパーム弾からとっています。

またある程度まとまったら設定に書いていきたいと思います。それではまた次の話でお会いしましょう。

第四話：帰ってきた依頼人（前書き）

お疲れ様です。

今回は依頼人が再登場します。…っていうか登場しないと話が進み
ませんので…
では第四話どうぞ！

第四話：帰ってきた依頼人

〔武side〕

ラカンとの勝負から一夜明けて、俺と龍ちゃんはとりあえずおなが
がすいたので近くの定食屋へ行き、少し遅めの朝ご飯を食べていた。
……なぜか昨日殺し合いまで発展したラカンと一緒に。

「……なんでラカンと一緒に飯食べてんだろ。」

「ワイもそう思うわ。しかもさも当然のようにいるから今の今まで
気付かんかったけどな。」

そう言つて二人でため息をつく

「がっははは。気にするなよ。」

「いや…俺たちじゃなくてお前が少しは気にしろよ。」

ラカンの言葉に更に深いため息をついたのであった。

「いや実際な話だな。俺様はタケルたちのことかなり気に入ってん
だよ。それに…勝負はまだついてねえからな。」

「は？勝負は俺の負けでついただろ？」

「負け…負けねえ…。ありゃーどっちかつつと引き分けた。」

「引き分け？」

「ああ。確かにあの時最後までたっていたのは俺様だがな。それはタケルの技のおかげでもあるんだよ。あの時俺は地面に叩きつけるように殴ったが、逆にタケルは掬い上げるように拳を放った。しかもタケルの拳は衝撃が貫通するからな。だから立ってたというよりも立たされていた。の方が正確なんだよ。…ま、これでも納得できねーなら。勝ちも貰っておいでやるよ。」

そう話していたラカンの顔はとても真剣で、俺が知識として知っていたラカンとはまるで別人のような感じがした。いつもこんな感じだったらバカとか言われないんだろうな…

「そうしておいてくれ。負けるのは悔しいが、おかげで自分の未熟さが分かったしな。」

「俺様ももっと強くなるために新必殺技を開発しないと。H A H A H A ! ! !」

「なんやワイだけ取り残された感じが…。さみしい…さみしいで…ほんま。」

「……龍ちゃん」

「……タケちゃん」

「龍ちゃんは幻獣なんだから取り残される以前の問題だよ？」

「（ブチッ）…お…己は…ええ加減にせいよほんま！…ちよと感動しかけたワイの気持ち返せ！！この三枚目のポケナスがあ！！！」

「なっ！！…だれが三枚目のポケナスの空気読めないだー！！」

「そこまで言うてへんけど、間違つてへんやろーがー！！」

「表出る！！ナパームくらわしたる」

「昨日の怪我まだ完全には回復できておらんやろ？……安心しいや。もう一度ワイが寝たきりにさしたるわ！！」

「おっ！ケンカまたすんの？俺様も混ぜろ。って言うか昨日龍牙と戦つてねーからまず、龍牙！俺様と戦え！！」

「ええ度胸や。筋肉戦闘バカ！！後悔しなや！！」

そう言つて三人とも定食屋を出てケンカを始めようとする。するとそこへ昨日俺たちに仕事を依頼してきた。男が額に大粒の汗をつけながらやってきた。

「はあはあ…さ…探しましたよ。」

「ん？……ああ昨日の…」

「そうです。あなた方に仕事の依頼をしたものです。…すいません。昨日はいきなり寝てしまつて。たぶん疲れが溜まつていたんでしょ。うが…今日はちゃんとお話させてもらいますので、一緒に来てもらえますか？」

（なあなあ…もしかして昨日のこと気付いていないのかな？）

（たぶんそうやろ。……なんかちよつと気の毒や）

（いやーこれはチャンスだ。下手に気を悪くさせるのはよくねーぜ）

《やったのはお前だけどな（やけどな）》

「あの……何か？」

「！！い……いえ。分かりました。」

「ほ……ほないこか？」

「H A H A H A。ほらいこーぜ」

そう言って男の人をせかす。

小聲で喋っている事を聞かなくて本当によかったと胸を下ろすのであった。

[illegible]

男につれられて来たのは昨日と同じ酒場であつた。

ただ昨日と違うのは俺達以外の人がいなかった。

「あれ？俺達だけですか？」

「ええ。昨日いた人達は気付いたらもういなくなってしまうていて……探そうにも時間が足りないのです、こうして最初に見つけた貴方方に頼みたいのです。」

「おう。任せときな。俺様たちにかかりやどんな依頼も成功したも

同然だぜ。」

「おお！それは心強い。それでは依頼の説明をさせてもらいます。」

そう言うのと姿勢を正してあたりを警戒しながら喋り始めた。

「私は今回の依頼ですが、この人物達を倒して欲しいのです。」

そう言うて内ポケットの中から四枚の写真を取り出し、俺たちに見せた。

「何だ。ガキ二人にひょろい兄ちゃんが二人だけじゃねえか」

「見た目は確かにそうですが、甘く見ないほうがいいと思います。こやつ等は先の戦い…オスティア回復作戦の帝国側の敗因すべてです。帝国側も精鋭で組織された討伐隊を送ったらしいのだが悉く返り討ちにあつたそうです。そこで私の方に依頼がありこうして仲介させてもらっているのです。」

「…ねえ依頼人さん。下手な芝居はやめなよ。俺達にはもうばれてるぜ?」

「!?!?…いったいどういうことでしょうか?」

「あんまワイらをなめんといてほしいな。…あんた帝国の人間やる?」

「ま!そういうことだな。…さあ腹を割って話そうぜ?」

俺たちがそう依頼人を追及すると、ビクツと体を震わせながら視線をそらす。

まあ目をそらす気持ちはわからんでもない。自分よりはるかに強い人…それも三人から睨まれているのだから…俺だったらこの場から逃げ出すと思う……多分だけど。

でもこの依頼人は逃げることをせず、目をそらせ小刻みに震えながらも硬く口を閉ざしていた。

そこは素直に感心するが、実際は帝国側も切羽詰ってこうして俺達みたいなやつらに依頼しに来ているんだから引くに引けないのだろう。

まあ…でもこのまま時間がたっても無駄なのでそろそろ助け舟でも出してやるかな。

「ま、たとえ帝国側の人間だとしても関係ないな。」

「確かにそやな。」

「もらえるもん。ちゃんともらえるなら別にいいぜ？」

そう俺達が答えるとあからさまにほっとしたような顔をしてこちらを見てくる。

「それはもちろん。ちゃんと謝礼は払わせていただきます。…ではお引き受けしてくださると思っていいんですね。」

「オウ。俺達に任せときな」

そうラカンがしめてこの場は解散となった。

依頼人がこの場から立ち去った後これからどうするか話し合っていた。

「さてと…依頼を引き受けたはいいけど、これからどうすればいいんだ？」

「そうやな。ワイとタケやんは依頼受けんのこれがはじめてや。何をどうすればいいかわからへん。」

「ああん？そうなのか？あんだけつえーんだから依頼の一つや二つやっているもんだと思っていたぜ。まあ、それならしかたがねえ…俺様が一から教えてやるぜ。」

『よろしくたのむ（わ）』

「10万」

「……龍ちゃん多分俺達だけでも何とかなと思うからいいか」

「せやな。いこか」

「まてまてまて！冗談だって。…そうだなまずこいつらのこと調べることから始めようや。」

「へえ…ラカンのことだから今すぐ倒しにいかうとか言つと思つた。」

「あくまで依頼だからな。それなりに準備つていうのは必要だぜ？」

「なつとくやな。まあ情報ならすぐに集まるんやないか？さっきの話聞いとる限りじゃかなり有名なやつらみたいやしの」

「だな。じゃまずは情報集めてやつか。」

「そういうこつた。…じゃやるか。」

『おう』

こうして俺達は依頼された自分の情報を集めるために動き出した。ぶっちゃけて言えば、俺は大方の所はわかっているのだが、それでも用心に越したことはないと思う。

なんていったって相手は”紅き翼”

どうせ俺の想像を超えてくるのだから…

とりあえず今は情報を集めながら力をつけないと。

最低限ラカンと同じところまで鍛えないとあの創造主には勝てないだろうからな。

とりあえず今は…”目指せラカン!!”そして”打倒紅き翼”がんばりますか!

第四話：帰ってきた依頼人（後書き）

結構すいすいってかけると思ってたんだけど、ここ原作じゃさらっ
としか書いてないもんだから苦労しました。

今手元に原作ないからな…漫喫でも行っ読んどこないと。

それではまた次回！！

第五話：邂逅（前書き）

さてさてとうとう”紅き翼”とご対面です。
少々どころか、いろいろ変わっています。これがこの作品の話なんだって思っていただけなら幸いです。
それでは第五話どうぞ！！

第五話：邂逅

依頼を受けてから数日が経過した。依頼人も出来るだけ早く実行して欲しいとは言ったが、明確には期限を決められていなかった。慎重に情報を選んでいたのだが……さすが英雄と呼ばれるであろう人達。最初から俺達の度肝を抜いてくれた。

「……なあタケヤン、ラカン。こいつら調べる必要があるんか？」

「……それは思っけていても言わないでよ龍ちゃん。」

「コイツは驚いたぜ。俺も傭兵を始めて結構立つが、こんな奴らは初めてだ。」

ラカンがそういうのだから本当にありえないことなんだろうと思う。

曰く、奴らにはどんな攻撃も効かない……無敵なんだよ。

曰く、あいつらには誰もかなわねえ……無敵さ。

曰く、あ、あ、あ、あいつらの話はしないでくれ。今こうして生きていられるだけでも幸運なんだよ。帝国にとっちゃあいつらは不死身の悪魔なんだ……！！

などなど、ほとんど同じ様なことしか聞けなかったのだ。唯一有力な情報と言えば刀を使う詠春が女に弱いと言うことぐらいである。

「……で、どうしようか。これ以上はめんどく……調べても何にも出てこないような気がするんだけど？」

「今めんどくさいとかいったやろ？…でもまあ同感や。意味ないきがすわ」

「だな。まあ今どのあたりにいるかは聞けたし、そろそろヤツラの面でも拝みに行くか！」

贊成

そう言う俺達はラカンが持ってきた情報を元に”紅き翼”がいるであろう場所へと向かうのであった。

•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
	•	•
		•
		•
		•
		•
		•

依頼を果たすために町を出てから数日がたった。

その間、ラカンや龍ちゃんと手合わせを何度もし、お互いに力をつけていった。

ちなみに先送りになっていた龍ちゃんもラカンのケンカだが、まあ結果を言うならラカンの勝ちだがどうしても納得できない事があった。

それは、龍ちゃんが口から氷のレーザーみたいなものを出した時、ラカンはそのをまともに受けて氷漬けになったのだが、なぜか何事も無かったかのように中から氷を割り戦っていた。

普通なら悪くて死に、良くても体のどこから異常をきたして動きが鈍くなると思うのだが…なんか氷漬けされた前よりも動きが良くなっていた。

まあ……存在がバグとか言われてる人だからなあ……と言う言葉で何とか自分をごまかしていた。

ともかくそんな時間をすごしながら目的の場所へと移動していった。
そしてついに”紅き翼”の姿を確認したのであった。

「やっと見つけたぜ。んー今は飯中か」

「……なんやむっちゃうまそうな匂いがするんやけど。ええなあ」

「あーあれなら俺も作れると思うぞ？鍋って言う料理だけど……まさには日本が生み出した最高傑作のひとつだね。」

「日本？どこやそこ」

「えっ！ーいや…あはは。気にすんな。」

「なんや、なんではぐらかすん？」

「だから気にすんなって！…気にしすぎるとはげるぞ？」

「なんやて！？ハゲるってなんや！どこがハゲるいうんや！ー！」

「H A H A H A。相変わらず緊張感ねえな。…疑問なんだが、幻獣もハゲるのか？」

「ハゲるわけあるかい！…たぶん。」

「たぶんって…。それに緊張感ないなんてラカンには言われたくねーな」

「ちげーねーな。」

そう言つて三人で笑い合う。

さて、いよいよ”紅き翼”と対決。自分が英雄相手にどこまで出来るのか。ためさせてもらう！！

＼紅の翼・ナギside＼

オスティア防衛戦のあと何故か俺達は戦争の前線ではなく辺境の地へと送られた。

理由は分らないが、別にいい。俺達は気に入らないやつらをぶっ飛ばせばいい。それならどこに行こうとかんけーねーからな。

そんな訳で、俺達は今辺境の地で詠春が作っている料理、鍋？ができるのをまっていた。

「お！？これが旧世界の『鍋料理』つてやつか！それじゃ早速肉を投入〜」

「トカゲの肉でもうまいのかのう？」

「ちょ、ナギ！おまつ！！何いきなり肉を入れようとしている！！」

「いいだろ？詠春。うまいんだからさ〜」

「バ、バカ！火の通る時間差というものがあつてだな。まずは野菜を入れてから〜」

詠春がなんかごちゃごちゃ言ってるけどかんけねーとりあえず肉が食いたいんだよ。

「フッフ…知ってますよ詠春。日本では貴方のような人を『鍋將軍』と呼ぶのでしょうか？」

『な…鍋將軍!~!』

なんだそれは…最強だと思っている俺様でも敵いそうにねえ名前は。

「つ…強そうじゃな」

「まいったよ。まさか詠春がそこまで偉いなんて知らなかったぜ…」

「うむ…。料理はすべてお主に任せる。好きにするがよい…」

「ん?なんかいろいろ疑問を感じるんだが…まあいいか」

なんか詠春が首を捻って考えてるけど、気にする必要はねえな。

とりあえず今は詠春が作ってくれる鍋を楽しみにするか。

「……よし!そろそろ食べてもいい頃かな?」

「マジか!~!よっしゃーいただきます!~!」

「うまそうじゃのう」

「私もいただきます」

鍋將軍?詠春のお墨付きを貰ったからようやく食べられた。

んで口に入れた瞬間。今まで食べた事の無いそのうまさに思わず叫び出したくなった。

「んめーーーーー!~!」

「このしょうゆ？とか言ったかこれかなかなかええのう」

「それにこの大根おろしもですね。」

「ハハハッそう言ってもらえると嬉しいよ！！」

詠春は俺たちが旨そうに食べているのが嬉しいのか笑っている。

こんな時間がすごせるならわざわざ辺境の地に來たのも悪くなかったと思うぜ。

そう思っていると突然空から大きな剣が降ってきた。

それも丁度鍋の近くに…あ、もったいねえから肉の確保、確保っと。

そしたら次に來たのはさっきの剣を投げた奴だろう。

大男がやってきた。

「食事中にしつれい。俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

…コイツはかなりつええ…俺がやるか？

そう思っていると、その大男はいきなり横にぶっ飛び、さっきまで大男がいた場所には肩に虎を乗せた男だった。そして大男に向かって叫んでいた。

「このバカンが！！せつかくの鍋を…もとい、食べ物を粗末にするなんて何考えてやがるんだー！！！！」

何いきなり来て言ってるんだ…？

く紅の翼・ナギside終く

武side

「さてと…さすがに食事中は戦うのは気が引けるな…終わるまで待つか」

チヨイチヨイ

「ん？どうしたんだ龍ちゃん？」

「……ラカンが飛び出していったんやけど」

「えゝ！！」

龍ちゃんに言われて、そっちの方に視線を移してみるとさっきまで鍋があつた所にラカンの大剣が刺さっていて、大剣を投げたラカンと言えばそのままその場所へ降りていつていた。

「あの…バカンが！！飯を無駄にするなんて！！！！！！！！」

「は？いやいや突っ込む所そこなんか？」

「あゝ ああん？」

「い…いやなんでもないで」

「とにかく俺たちも行くぞ？あのバカンと少しOHANASSIをしないといけないみたいだからなあ！！」

「さーいえつさー」

そう言つて俺達もその場所へ向かう。

なんか龍ちゃんがプルプル震えていつもと違っていたけど今はそんな事気にしている場合じゃない!!

あのやるう!! ご飯は大切にしないとイケないって親に教えてもらわなかったのか!?

しかも鍋!!!

まだまだいろいろ出来たのに…終わったあとの雑炊が格別なんだぞ!?

それを…それを…あのバカン!!!!!!

コノウラミハラサデオクベキカ…

「あれ? タケヤんってこんなに食べ物にうるさかったっけ? なんやワイでも見たことが無いくらいいかつとるんやけど…ワイはご飯を粗末にあつこうた事無いから大丈夫やと思うけど、気をつけなあかんな。…まあラカンはご愁傷様やな。」

とりあえずぶっ飛ばす!

マグナムでぶっ飛ばす!!

ターゲットロック!!

くらえバカン!!!!

ドコオオオン!!!!

「このバカンが!!! せつかくの鍋を…もとい、食べ物を粗末にするなんて何考えてやがるんだー!!!!」

「グハア…タケル何しやがるんだ!!!」

「それはこっちの台詞だ馬鹿野郎!!! 食べ物は粗末にしたらいけないって小さい頃に教わらなかったのか!!!!」

「いや…それは…」

「聞く耳もたん!!」

「聞いたんだからいわせろや!!」

「とにかくだな。お前がやった事でこの鍋はもう食えなくなったんだ!!謝れ!この人達に…そして鍋に!!」

「はあ?なんで…」

「あゝああん?テメーマグナム全弾急所にくらいてーか?」

「すいませんでしたー!!!」

さすがにマグナム全弾は食らいたくないのか、土下座して謝ってる。皆呆けた顔しているけど関係ない。

こういうのは謝る事がまず大切だからな。

一人鍋かぶっている人もいるけど…それも気にしない。

「あ、ああ。別にいいぜ?」

「そ、そうじゃの誰にだって間違いはあるしの?」

「フフフ…直接被害を受けたのは詠春だけですしね。」

やっと再起動をしたのか”紅き翼”の人達が返事を返す。鍋をかぶった人も最初プルプル震えていたけど、ラカンが素直に謝ったら少しは怒りが収まったみたいで、顔を拭いていた。まだラカンは睨んでいるみたいだけど。

「それでじゃが…お主等は一体何しにきたのじゃ？」

しばらくすると、爺言葉を喋る少年が俺達に聞いてきた。

「ん？ああ実はさっきラカンが言ったかも知れないけど、俺達は傭兵でね。”紅き翼”を潰してほしいって依頼があったからこうしてきたんだよ。」

「へーそうなのか。」

「バカ！！何普通に返してんだナギ！こいつらは俺達を倒しに来たって言ってるんだぞ？」

「何！？」

（なんか思っていた以上にナギがバカだな。）

「ま、そんなわけでさっきも言ったがいっちょやろーぜ？」

「へっ！おもしれえ。やってやるぜ！！」

そう言つてラカンとナギはこの場を離れていった。

そしてそのすぐ後大きな爆発音が聞こえてきたから、かなり派手にやっっているらしい。

「バカはバカの相手をすればよかろう。…それでお主等もやるのか？」

「ん？ああまあ依頼だし？それに巷で有名なあんた達に俺がどこま

で出来るか試してみたいって言うのもある。」

「そういうこっちゃな。なんやお互いバトルマニアぽくなくなってもうたな。」

「多分バカンのせいだろ？龍ちゃん」

「あーそうやるなタケヤン」

そう言いながら二人で笑い合っていると、何故か他の人がビククリしていた。

「ん？どうしたんだ？」

「ど…どうしたって虎が喋ったんだぞ？」

「む…もしか幻獣か？」

「なかなか興味深いですね。幻獣が人と一緒に行動しているなんて。」

あーなるほど。確かに珍しいかもしれない。あまりにラカンが普通にしてたから大丈夫だと思っていたけど、これが一般的な反応か。

「まあ、龍ちゃんとは気があってね。そっからは一緒に行動しているんだよ。」

「気があったからって…」

「気にしないでよ。えーと…」

「詠春だ。近衛詠春」

「ワシはゼクトじゃ」

「アルビレオ・イマといいます。アルと呼んで下さい」

「俺の名前はタケル・ダテ。んでこっちが…」

「龍牙や。よろしゅうな」

『よろしく』

そう言つて自己紹介を済ませる。

自己紹介を済ませてなんか和やかな空気になつてしまったけど、依頼は依頼。そろそろ実行しますか。

「つて訳で、俺達も手合わせお願いします。」

「ふむ。仕方が無いの」

「それでなんですが、俺と相手は詠春さんお願いできますか？」

「え？私かい？」

少々ビックリした感じでそう返す詠春。

「ええ。理由としては、私は武術家です。無論魔法とかも使えますが、今回は一武術家として戦いたいと思っています。それに私の武術は銃火器を模してつくられた武術。銃と剣どちらが上か確かめる

のも一興と思いませんか？」

「素手と剣で戦うのかい？それはちょっと…」

「心配しなくても結構です。私の拳は剣よりも強いですから…それとも私に負けるのが怖いですか？」

「！！！！いいだろう。その勝負受けよう」

「ありがとうございます。では少し離れた場所へ移動しましょう。」

「分かった。」

そう言つて俺たちも移動をした。

銃闘技の天敵は原作では剣術だった。実際は剣を模した拳術だったけど、それでも戦つてみたい。サムライ・マスター近衛詠春。俺の拳で打ち砕いてやる！！！！

（武side終）

「なんや。いつもの違うな〜タケやん。なんかあつたんか？」

「いつもはあんな感じじゃないのか？」

「ちゃうな。いつもは好戦的じゃないし、それにあんな挑発せーへんもん。」

「なるほど。何か事情があるのかもしれないね。」

「かもな…。まあええ。それよりワイの相手なんやけど…ゼクトは

ん頼めまつか？」

「ワシか？かまわんが理由を知りたいのう」

「ワイの真骨頂は攻撃や、ならあんたらの中で一番防御に優れとるゼクトはんと戦ってみたいと思うねん。それにアルはんはなんや相性が悪い気がする。主に性格的な意味でな」

「それは少しひどくありませんか？」

「ふむ。わからんでもないのう」

「ゼクトまで…」

「あーなんや。別にあんたの事は嫌いやあらへんよ？まあ好きでもないけどな…」

「それはとどめをさしてますよね。」

「あ！？そんなつもりやあらへんねん。…とにかくや。やろやゼクトはん」

「そうじゃな。じゃワシらも場所を移すとするかの」

「りょーかいや」

こうして龍牙達も移動していった。
そしてのっこったのはアル一人。

「ふう…私って嫌われているんですかね」

その眩くアルの背中はとても寂しそうだった。

ゝ我拳は銃なりて・終ゝ

第五話：邂逅（後書き）

次回ですが、話は進まず、詠春VS武を書きたいと思います。

その後は、ゼクトVS龍牙です。

ナギVSラカンについては今の所書く気はありません。

と言うのも、原作で13時間も戦っていたとか…それだけの内容を詰められないのですね。

と言うことでバトルシーン二回目頑張って書きますので、楽しみにしててください。

それでは

第六話：銃と剣（前書き）

今回は本当に悩みました。

戦闘シーンを多く入れて行きたいと思っている手前、いろいろ試行錯誤しながら書いているのですが、やっぱり難しい！！

今回も悩みに悩んで書きました。

うまく伝わってくれば嬉しいです。

それではどうぞ！

第六話：銃と剣

詠春さんと俺は皆がいた場所から十分に離れた場所で足を止めた。遠くからは爆発音などが聞こえてくるが、これだけ離れていればこちらに影響は来ないだろう。

そして詠春さんから少し離れて、すぐにでも戦闘が開始できるようにグローブを装着する。

詠春さんもさつきとはまるで別人のような顔つきになり、静かにそこでたたずんでいた。

「詠春さん。先ほどは申し訳ありませんでした。」

「何のことだい？」

「いえ先ほどの挑発で怒らせてしまったかと思ひまして……」

「ああ、その事が気にしなくていいよ。むしろこちらこそ武君の決意を不意にしそうになって申し訳なかったね。」

「いえ……」

「しかしなんだな……。君は見た所ずいぶん若いようだが、落ち着いているね。」

「そんな事無いですよ？さっきの挑発にしても心臓がバクバク言っていましたから」

「ハハハッそんな緊張しなくてもいいのに。」

「緊張もしますよ。先ほどは剣と銃のどちらが上か確かめたいと言いましたけど、いつもはそんな事言うキャラじゃないですし、それにこうして剣の達人と戦うのは初めてですから…」

「そう言ってもらえるのはうれしいね。でもだったら何故戦うといったんだい？」

「…そうですね。しいてあげるなら”憧れ”でしょうか？」

「憧れ？」

「はい。小さな頃からの憧れです。話で聞いていた”侍”それに強い憧れを持っているんです。正義でもなく悪でもなく…ただ自分が正しいと思うことを”刀”に乗せて戦う。そんな生き様に俺は憧れたんです。」

「…君は日本人なのか？」

「ええ。どういう訳かこうして魔法の世界で生きてますけど、生粋の日本人です。だからこそ貴方と戦いたい。今こうして憧れの侍が目の前にいる。俺も刀は使いませんけど志は同じ、ならそれが本物かどうか貴方と戦う事で確かめてみたいと思っています」

実際は理由も知ってるし、もう今更なんだけど、それでもこの気持ちには本当だ。

TVや小説、演劇で見ていた侍。俺はそれに強い憧れを持っている。もちろん刀に憧れた事もあったけど、歳を重ねるにつれて刀よりもその生き方に強い憧れを持っていた。

元いた世界ではそんな生き方で生きていなかったけど、この世界ではその生き方を貫いていきたい。この鍛えた拳と共に…

そんな事を考えていると、詠春さんは目を大きく見開いてこちらを見た後、急に真剣な顔つきをして頭を下げてきた。

「……………失礼した。」

「えっ？いきなりなんですか？」

「武…いや武殿がそこまでの思いをもっていたとは正直見抜けなかった。だからこそもう一度あの言葉を放った事謝罪したいと思う。」

「そ、そんな…。頭を上げてください。下げられてもこちらが困りますよ」

「ハハハッ君は本当に面白い子だな。…だがその気持ちは本物だ。そしてその実力も…。改めてなのらせてもらおう。神鳴流免許皆伝近衛詠春。貴殿の思いに答えるためにも全力で相手しよう！！」

そう名乗りを上げた瞬間、そこには小さい頃から憧れた侍がそこにいた。

気付くと体が震えていた。

恐怖…？いや違う。これはきつと武者震いなんだろう。

日本人特有とは聞いていたが…まさか自分がこうしてなるなんて思いもしなかった。

やっぱり俺は生粋の日本人なんだな。

「銃闘技タケル・ダテ…いや伊達武。お願いします。」

一歩間違えば死んでしまうかもしれないというのに…嬉しさが止まらない。

さあいこうか拳《相棒》

〈全体視点〉

お互いに名乗りを上げたあと少し距離をとったまま二人は動かない。詠春は刀を抜いてだらんと下げ、武の方も肩幅に足を開いて拳を下に下げていた。お互い構えもしない…いや。これがきつと構えなんだろう。自然体。

つまりこれからどんな風にも動けるし、攻撃できるというわけだ。

「詠春さん。峰を返しているのは俺相手では本気になる必要はないということでしょうか？」

「いや違うよ。これはあくまで仕合い。殺し合いじゃない。だから刃を向ける必要が無いだけさ…。それに神鳴流は獲物を選ぶ…。峰を返していても斬ろうと思えば人は切れるし、気を込めればそんなに…。そのらの真剣よりも切れるよ。それよりも君は何もしなくていいのかい？まさか気を纏わないで刀と戦うなんて思っていないよね。」

「…そうですね。では失礼して…」右手に気、左手に魔力…合成」

そう呟いて胸の所で手を合わせると武の体の気が爆発的に上がる。

「…気の増加？いや…それにしても感覚が違うな。」

「感卦法ってやつです。今の俺じゃ詠春さんの気の量、質には敵いませんから」

「なるほど…。これは面白くなりそうだね。」

「…それでは行きます!!」

そう言い放つと自然体から射撃姿勢に変え、ガンブレットと撃つ。

スナイパーポジション

「む!」

いきなりのガンブレットに少々驚いたような顔をするが、すぐさま刀をふりガンブレットを斬る。

「なるほど銃を模した武術…その名に偽りなしか。しかし神鳴流には飛び道具など無意味だ!!」

「そうかも知れませんが…一発ではなく複数ならどうでしょうか？」

そう言うとガンブレットを乱れ撃つ。

感卦法のように自分自身を強化しないと使う事が出来ない技。それがこのガンブレットの乱れ撃ち。名を”クレイジー・ホース”という狙撃のような射程の長さで連射力を突き詰めた武オリジナルである。

「クツ…確かにこれは骨が折れるが、そんなものでは私に当てる事などできん」

量の多さにさすがに顔をしかめるが、さも当然と言った感じでガンブレットを切り落としていく。

その光景に武は驚いたが、休む事無くどんどん打ち込んでいく。

「うわぁ…これはさすがにショックを隠せないんですけど。せめて一発ぐらい当たってもいいじゃないですか」

「フツ…。確かにこれの速度と量はたいした者だが、速度については私が追いつける範囲だし、量で言えばナギなどが撃ってくる”魔法の矢”に比べればたいしたことは無い。…まあ威力はまったく別物だな。」

律儀に武の呟きに答える詠春。その顔はまったく疲れを見せていなかった。

武自身も口ではそう言っていたが、実際は当たると思っただけはなかった。しかし、少しでもいいから体力などを削れるだろう…とは思っていたためこの結果は予想外だった。

「さて、なかなか面白いものを見せてくれたんだ。こちらこそそれ相應の技をお見せしよう。行くぞ？」

詠春はそう言うと言の弾幕から抜け出し武へと迫る。そして自分の射程範囲に入ったところで剣を振り上げた。

「斬岩剣!!」

新鳴流の基本的な奥義にして、もっとも使う頻度が多いとされる”斬岩剣”。

その名の通り岩をも切り裂く剛剣。

それを見た武は、最初迎え撃とうと考えたが、その技の威力を感じ取り受け止めようとせず、その場から引く。

ドコオオン!!

大きな音と共に武がいた場所は土煙に覆われる。

土煙が消えるとそこには、大きなクレーターが出来ており、更にはクレーターの中心から真っ直ぐ大地に切れ込みができていた。

それを見た武は背筋に嫌な汗をかく。

「いい判断だね。もし受け止めようとしていたらその体は今頃真つ二つだと思つよ?」

「…みたいです。良かったです。勘が働いて…」

「でも何時までよけられるかな?」

「…いいえ。もう避けませんよ?」

武がそう言つと、詠春の顔に少々落胆の色が見える。
だが、次の言葉を武が発すると楽しそうに笑みを浮かべる。

「詠春さんがその技を出せる暇を与えないほど圧倒的に撃ちぬかせてもらいます。」

「……おもしろい。出来るものならやって見せてもらおうか!!!」

そう二人は叫び激突する。

武は前と同じようにガンマン・ポジションを取り連撃を浴びせる。
詠春も武の連撃を受け流しながら刀を振るっていく。

ガガガガガガガガ!!

「クッ…さすがにつらくなってきたな。なるほどこちらが本来の速さか…」

「甘いですよ詠春さん。」

「なんだと？」

「ここからが俺の本気のスピードです。さあ…耐えられますか？すべてを飲み込む拳の弾幕に…」ダブルガトリングショット！！！」

武がそう叫ぶと先ほどの2倍、3倍に膨れ上がった拳の弾幕が詠春に向かって放たれる。

抗う事を許さない。移動する事も許さない。まさに拳の大津波であった。

”ダブルガトリングショット”

これは武自身が望み作り上げた。オリジナルである。

”ガトリングガン”それがこの技の元である。圧倒的な連射速度と量。

それのみを突き詰めた技。

無論普段ならここまでの量は放つ事など出来ないが、今は感卦法によつて強化をしている。だからここまでの量が出るのである。ちなみに一発一発はそこまでの威力はもっていない。だが、塵も積もれば…ということわざがあるように、数を当てればいくらタフな相手でも倒れるしか…いやこの連打では倒れる事も許しはしないので、相手が動かなくなるなることだろう。

ラカンにもこれはもう二度と食らいたくないと言わしめた技でもある。

「クッ……」

さすがの詠春でもこの量は捌ききれないのか次々と被弾していき、顔が苦痛にゆがむ。

そしてある一発の拳が詠春に当たる。

いい所に当たったのか、その一発で詠春の体が浮き上がり一瞬だけ無防備になる。

その瞬間、先ほどまでの拳の大津波は止む。

詠春がどうしたのか？と思った瞬間、詠春の体に一斉に鳥肌が立つ。

「コイツで止めだ！！44マグナム！！」

「なっ、間に合え！！真・雷鳴剣！！」

ズカアアアン！！！！

武の44マグナムと詠春の真・雷鳴剣。

互いの技の中でも最高の威力を持つであろう技が激突した瞬間あたりは真つ白に包まれ、その後爆発音といていい音が響き渡る。

あまりにもすさまじい威力によって、地面に生えていた草花は一瞬にして消え去り荒野のようになってしまっていた。

そしてその荒野に佇む二人の姿。

もちろん、武と詠春であるが、二人は互いに位置が変わり背中合わせで立っている。

すると一人が膝を付く。

それは詠春だった。

だが、詠春が膝を付くのとほぼ同じぐらいに武の体から血が噴出す。

ブシュウウウ

「ぐっ…完全に撃ち勝ったと思ったんだけどな」

そう言つて、右肩を左手で抑える。そこには詠春の刀によつて斬られた傷があつた。

「くっ…何とか急所からは外せたが、それでもこの威力か。」

無論詠春の方も無傷と言うわけではなく、体の中心から少し外れた所に、打ち抜いた後が出来ておりそこを手で押さえていた。

「詠春さん。さすがですね。まさか俺のマグナムを逸らし、さらに斬り付けるなんて普通できませんよ。」

「そういう武君だつて、急所から外れているはずなのにこの威力なんて…まさに銃弾の拳だな。」

二人とも傷口を手で押さえながら、互いの強さを褒め合う。その顔は苦痛でゆがんでいながらも真剣で、どこか楽しそうだった。もし、龍牙がこの場に居たらこう言つただろう…ラカンとのケンカをもう一度見ているかのようにと…

「さっきの技、ガトリングだったか？あれはかなり効いたよ。…だが弱点も分かつてしまったがね。」

（ピクッ）

「銃と一緒に玉数制限があると言つた所か。…実際は拳を撃っているだけだから、拳を繰り出すための体力だろう。まあ普通ならあの速度と量を打ち出すこと自体無理な事なのだが、それを武君は修練によつて可能にした。それだけでも尊敬に値する。しかし、そのためには膨大な体力を必要とし、感卦法によつて強化されてもそれは変わらない。違うかな？」

詠春の問いかけに黙ってしまう武。

なぜなら詠春が言った事は事実であり、弱点のすべてを見透かされただけではないが、見事看破しているからである。

ダブルガトリングショット

その弱点とは、体力消費、酸欠、筋肉の酷使、そして心臓の負担が大きいことである。

体力についてはそのままの意味であの連射をおこなうために膨大な体力が消費される。

そして酸欠については、速度が問題となってくる。速度を極めるにあたり、行き着いたのが無呼吸運動である。実際は持たないため呼吸をしているが、ほぼ無呼吸運動なため、撃ち続ければ酸欠になってしまう。

筋肉の酷使についても同様で、あの連射と速度を保ち続けるために相当筋肉を酷使している。

そのため、技を限界まで続ければその後はしばらく腕が上がらなくなってしまう。

そして最後の弱点。心臓の負担である。

銃闘技のキモである血液の流れ、それをコントロールしているのが心臓であるが、激しい運動に加え酸素不足によってマグナムよりも数倍の不可がかり、最悪心臓が止まってしまう場合もあるのだ。

無論その事は武も重々承知でこの技を使っており、ギリギリの所を見極めている。

「どこで気がつきましたか？」

「強烈な一撃を放とうとした所からかな？あのまま続けていれば私は何も出来ないまま負けていただろう。だけど君はこのまま行けば勝てるのに、それをやめたとどめをさそうとした。そこで気がつい

たのさ」

「さすがですね。まさかこうも簡単に気付かれるとは思いませんでした。」

「簡単じゃないさ。おかげでかなりギリギリの所まで追い詰められているからね。でも武君もその傷じゃ同じ事は出来ないだろうし、やれる事も限られてくるだろう？」

「お見通しですか…。やりにくいなあもう。」

「ハハハッ君よりは長く生きてるからね。それぐらいは見抜けないと。」

「それでどうします？このままじゃお互いに収まりつかないと思いますけど？」

「そうだね…。武君も分かっているだろうけどもうお互いできることは限られているからね。ここはやっぱりお互いすべてを込めた一撃を放つって言うのが常道だろう。」

詠春がそう言うと、武は思わず笑ってしまった。

「どうしたんだい？何かおかしいことでも言っただかな？」

「クククツ…いえ。実はラカン…あの今ナギさんと戦っている男とマジケンカしたことがあるんですが、その時もお互いギリギリの勝負になって最後は同じ展開になったものですから…これも同じだと何故か笑えてきてしまっただけ…」

武がそう言つてまだ笑っていると、納得がいったのか詠春も同じように笑い出す。

「あつはつはつは。なるほど。武君が笑つてしまふ気持ち分かる気がするよ。えてして強者との戦いというものは、こうなるようになっていゝのかもしれないね。私も覚えがあるからね。」

そう言つて笑い合う。

そしてお互いにある程度笑い合つたところで、二人は真剣な顔つきになり、構える。

詠春は刀を正眼に構え、武は右肩が斬られて右腕が使えないので、左腕を構えハンマーコックする。

「利き腕じゃなくてもさっきのような強烈な一撃を撃てるのかな？」

「ご心配なく。確かにマグナムは撃てませんが、それに変わる必殺の技が左には備わっていますから。」

「そうか…それは安心した。」

「詠春さん。貴方と戦えて本当に良かった。貴方はやっぱり俺が憧れた侍そのものでした。」

「武君。君と戦えて本当に良かったよ。久しぶりにいい勝負が出来た。それだけでも嬉しいよ。」

「でも」「だが」

「撃ち抜き勝つのは俺だ!!」「この仕合いに勝つのは私だ!!」

お互い照らし合わせたように喋り、それが喋り終わると同時にお互い地面を蹴って飛び出す。

詠春の刀に気が集まり光出せば、武のハンマーコックした左腕が、鉛色から青銅色ガンブルに変わる。

そして今できる最高の一撃の技を叫ぶ

「これが俺のラストショット！インビジブル・デリンジャー」

「神鳴流最終奥義！神鳴！！」

その瞬間、大きな雷が轟音を響かせてあたりを包み、銃声と聞き間違えるほどの低く鈍い音が突き抜ける。

そして辺りが静けさを取り戻したと思ったら、そこには寝そべっている二人の姿があった。

「ハハハッ…まいったよ。初めてあんな事をされたよ。私も修行が足りないな。」

そう言った詠春の心臓とみぞおちの辺りに撃ちぬかれた証の銃痕が残っており、そのおかげで体が動けずにいた。

「かなりの賭けでしたよ。でも詠春さんの技の威力がでかすぎて俺もまったく動けないんですけどね。」

そついうのは武。体のあちこちから黒い煙が漂っていて、少し焦げたにおいがする。

ただどこも斬られていない所を見ると、刀に纏わせた気によってダメージを受けたただけだった。

あの瞬間、武は詠春から放たれた刀の側面に動かない右拳を撃ちつけ斬撃を逸らし、そのまま懐にもぐりこんだ後左腕を解放、急所に向かつて超高速の二連撃を食らわせたのだ。

ただ、逸らしたと言ってもほんの少しだけであり斬られてはいないと言っても気によって攻撃範囲が増えていたため、気の攻撃はまともに食らっていた。

「この勝負私の負けかな？」

「いえ、引き分けでしょう。俺も動けませんから」

「そうか。にしても私は剣をそれなりに極めたつもりだったんだが、まだまだだなあ……ありがとう。己の未熟さを思い知ったよ」

「まさかお礼を言われるとは思わなかったです。」

「ハハハッ。そうだ！またしばらくたったら仕合いしてくれるかな？」

「えーと……出来れば拒否したいかな……って」

「それは出来ない相談だね。私を武術で引き分ける相手なんてまずいないからね。互いによきライバルでいようじゃないか。」

「いや、それは嬉しいんですけど基本的に戦うのは好きじゃないので……」

「それはうそじゃないかな。戦っている時はあんなに楽しそうだったじゃないか。大丈夫、無理にでも戦ってもらうからね」

「何が大丈夫か分かりません！！だから俺は…」

「鍋料理を食べさせてあげるとしても？」

「……………考えさせてください。」

「ふむ。日本料理でつればいいのか。良く分かったよ」

「……………そんな簡単に籠絡できると思わないでくださいね。…でも鍋は食べさせてください。」

「わかったよ。でも今は…」

「そうですね。どうやってあつちに帰りましょうか？」

そう言っただけで二人であった。

剣と銃どちらが強いのか？

その答えはこの戦いで出ることは無かった。

もしかしたらその答えは永久に出ないのかもしれない。

なぜなら互いに高めあつて限界を無くしていくのだから。

武がこの世界に来て約4ヶ月。

ようやく英雄の力に追いついた瞬間であった。

ゝ我拳は銃なりて・終ゝ

第六話：銃と剣（後書き）

オリジナル技紹介

”ダブルガトリングショット”

欠点が多い技となりましたが、作者一番のお気に入り技です。ドリルもいいですが、ガトリングも男のロマンだと思います！！

”インビジブル・デリンジャー”

左腕の必殺技です。射程、威力はマグナムには敵いませんが、初速と貫通力はマグナムより上となります。これを使用する場合、ボクシングでいうフックが当たるぐらいまで接近しないとけません。攻撃方法としてはフックのように攻撃を当てた後更に拳を伸ばし押し込むことでマグナム以上の貫通力を生み出します。しかし威力はマグナムより低いので相手を倒すには急所を必ず狙い打つ必要があります。

攻撃回数は二回。

”神鳴流最終奥義神鳴”

詠春がつくった神鳴流の奥義です。

いろいろ考えていたんですが、詠春ほどの剣の腕があるならオリジナルの技の一つや二つつくっていてもおかしくないかな？と思って書いて見ました。

真・雷鳴剣と同じく剣に雷を纏わせてる技ですが、違う所は突きの攻撃と言う所。速さ、威力を含めまさに雷の如し。詠春が使う技の中で最強・最速の技となります。

んー今回は詠春のキャラがいろいろ違うかも知れませんが、そこはラカンの時と同じくこの話の設定と置いていただければうれしいで

す。

今回は龍牙VSゼクトとなります。

今どうやって戦わせるか考え中なので、楽しみにしてください。楽しみはもう少し待っていてください。これが書き終わればトントんと進んでいけると思いますので、ではまた次回お会いしましょう。

第七話：矛と盾（前書き）

お疲れ様です。

えーと気がつくユニークが5000を超えていると言っビックリな展開。

まさかこんなに早くそうなるとは思ってもみませんでした。

ありがとうございます!!!

皆様にもっと楽しんでもらえるようにがんばります。

今回は前回言っていたようにゼクトVS龍牙となります。

うまく戦闘シーンがかけられているかいつも不安ですが、頑張って書きました。

それではどうぞ!!

第七話：矛と盾

詠春と武が戦いを始めた頃、ゼクトと龍牙もまた先ほどいた場所から離れ少し距離をとってにらみ合う。

「のう…龍牙。お主そのままで戦うつもりか？」

「なんやゼクトはんきづいとったんかい。」

「まあ伊達に歳はとっておらんのでな。それに幻獣中でそんな体の小さいものなどフェアリー族以外見たことが無かったの。」

「へー見た目そんなんやけど、結構…いやかなり歳とつとるみたいやな。ほんま人間か？」

「そうじゃの限りなく人から離れた人間と言う所じゃの。魔法の研究のせいで不老になってもうただけじゃ。」

「だけって済ますには大きすぎると思うんやけど…まあええか。それじゃお言葉に甘えて…」

そう龍牙が言うとき、よつ”と声を上げて飛び上がると、先ほどまでぬいぐるみぐらいのサイズだったのが、一瞬にして大人の身長よりも大きな虎の姿となる。

「ほう…本来の姿はそんなんじゃったか。思ったより大きい訳じゃないんじゃない。」

「何と比べとるんか分からんけど、これぐらいが普通やで？まあワ

イは種族の中でも若い方やからまだ小さい方かもしれんけど、それでももうそう大きくなりませえへん。せいぜいこの体が二倍になるくらいやな。」

「それはかなり大きくなるというんじゃないかの？…ワシも成長薬でも作ってみるかの」

「なんやゼクトはんもいろいろ大変なんやな。」

「まあの。…さておしゃべりもこれくらいにしてそろそろ始めるとするかの？」

「せやな。時間がたらへんというわけでもないやろうけど、せつかくの戦いや変な邪魔入って欲しくないしな。」

そう喋り終わると二人はお互いの目を見て気をうかがう。
ジリッジリッ…と間合いを詰めながら近づいていく龍牙。

反対にその場からあまり動かず、じつと龍牙を見つめるゼクト。
そこには真剣勝負特有の緊張感と重たい空気が流れていた。

「ワイからいかせてもらうでえ！！」

その重たい空気を吹っ飛ばしたのは龍牙からだった。

考えてみれば当然だろう。龍牙は攻める事を主としており、逆にゼクトはもちろん攻める事も出来るがどちらかといえば、冷静に相手を見定め、攻撃する迎撃タイプの人間だからだ。

だからこそこの行動は当然といえよう。

「くらいや！空牙！！」

そう言つて爪を出した前足をふる龍牙。

するとその腕から空気の刃が出てゼクトに襲い掛かる。

ちなみになぜ親は武で、やっぱり技名つけたほうがカッコよくない？と言われてつけてもらっている。

「ほつと。危ないのう。空気の刃といった所か幻獣はもつと肉弾戦を好むと思っていたのだが。ほれお返しじゃ。光の矢100本」

軽く空牙をよけたゼクトは返す刀で光の矢を放つ。

その数100本。普通の魔法使いならまず簡単に出せる量じゃ無い。

「うはーけっこう量多いな。やけどこんなもんよける必要あらへんわ。それとゼクトはん。その考えはまちごうてないで？普通の幻獣はだいたいそうや。でもな、ワイの相棒はタケヤンやで？武術家の相棒やつたらこんな芸の一つや二つ使えんとな。」

そう軽口をたたきながら迫り来る魔法の矢を前足で払いのけていく。

「そうか。それはすまんかったの。にしても大体分かつてはおつたのじゃが龍牙やるのう」

「あんまなめんといてや。でもゼクトはんもさすがやと思うで？今まで見てきたどの魔法使いよりも強いやん。」

「あたりまえじゃ。年季がちがう」

「そやな」

そう和やかに話しているが、お互いに攻撃をしあいすであたりはひどい事になっていた。

地面は空牙によって裂け、魔法の矢によって大小の穴が開く。その中を二人はなんてことの無いように動き回り攻撃していく。しばらくそんな状況が続いた後二人はお互いに距離をとって止まりまた最初のように見つめあう。

「さて準備運動はこれくらいにしてそろそろ本気でいこか？」

「じゃの。」

今までは本気じゃなかったのか？と言いたい所だが二人が言うなら本当の事なのだろう。

それを証拠に龍牙とゼクトの周りにはあふれ出した魔力によって突風がまきをこり、ゼクトと龍牙の中心ではお互いにあふれだした魔力の風がせめぎあっていた。

「いくでえ……」我名において助けを請わん。その友の名は火の精霊クウ。我魔力を糧に我に力をしめせ」

そう龍牙が唱えると、龍牙の体を炎が包み、そしてその中から紅く色を変えた龍牙が出てくる。その姿を見てゼクトは驚く。

「なんと龍牙は”闇の魔法”を使えるのか？」

「”闇の魔法”……ああタケやんが使っ魔法の事か？ちやうちやう。これは幻獣特有の魔法って奴や。」

「そうなのか？初めて聞くのう」

「そやるな。これはワイら虎型の幻獣特有って言ってもええとおも

うで？そもそも幻獣に人間が使うような魔法は存在せんのか。つこうとするのは人に良く似た奴らだけやろ？他は使わん。やけど、幻獣は精霊の力を人よりも強く感じれるからこうして魔力を糧にして力を貸してもらえるわけや。竜とかはそれをプレスとかに活用してるようやけど、虎型のワイらはこの身に宿して戦う。それがこの”赤王”や」

「なるほどの。長く生きてきたがそんな話初めて聞いたわ。にしても…”赤王”とはなかなかカッコイイ名前じゃの」

「そう言ってもらえとうれしいわ。名前付けたのはタケヤンやけどな、ワイ自身結構気に入ってるんや」

ゼクトに名前をほめられて嬉しそうな顔をする龍牙。それをみたゼクトは”こつもん人間らしい虎がいるとは…おもしろいのう”と心の中で思ったとか。

「さて、勝負を中断して悪かった。続きを始めるのか？」

「望む所や！！！」

そう言つて龍牙はゼクトに向かって駆け出す。その姿を見たゼクトは詠唱を始める。

「　　ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト”…”母なる水より生まれし小さな子供達よ”我に集い形成せ”その小さき姿は互いに寄り添い”列なる事で荘厳なる姿となし”すべてを呑み込む海となれ”大海嘯”」

ゼクトの詠唱によって大きな津波が龍牙に襲い掛かる。

「甘いでえ…そんな水なんかでワイの炎消せるとおもつか？オラ
ア！！かき消えんかい！！炎爆波！！」

ゼクトの魔法に対し、龍牙は右前足に火の魔力を集中させアップー
気味に振り上げ、前方の水に対して一気に爆炎を放出した。
すると前の水は一気に蒸発してぽっかり穴があく。その穴に龍牙は
飛び込み一気にゼクトに迫る。

それをみたゼクトは驚いた顔をしながら、気を取り直し次の魔法を
撃つ。

「あの水の量を蒸発させるじゃと…これは驚きじゃ。じゃがおかげ
ででてくる場所が丸見えじゃの。ほれ、”雷の暴風”」

龍牙はその魔法を確認するが、ときすでに遅しもろに食らってしま
う。

…が、次の瞬間龍牙の体は煙のように消える。

「むっ…上か？」

ゼクトはそれに気付くと上空に気配を感じ上を見上げる。
すると上には大きな火の玉がゼクトに向かって落ちてくる。

「くっ！！」

それを何とかよけてその場を離れると、地面に落ちた火の玉は周囲
を燃やしつくし、一瞬にして炎が広範囲に舞い上がる。その中心に
はもちろん龍牙がいた。

「あれ？今のは決まっただと思っただんやけどな…」

「正直危ない所じゃったわ。あの身代わりに気付かんかったらあたってたの。」

「うわ！！」陽炎” 見破ったん？そらあかんわ。」

「ほう。」陽炎” と言うのか先ほどの技は、いい技じゃの。」

「ま、あそこまで出来たんは半分ゼクトはんのおかげや。ゼクトはんが水だしてくれたもんで、ええ感じにつくれたんや。ありがとはん」

「そのお礼は嬉しくないのう。しかしこれではらちが明かん。どうするかの」

「その意見には賛成や。お互いにまだ手の内はすべて曝してないとは言え、同じ事の繰り返しやろ」

「まあやりようはあるか…」ヴシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト”…”母なる水より生まれし小さな子供達よ”我に集い形成せ”その小さき姿は互いに寄り添い”列なる事で荘厳なる姿となし”すべてを呑み込む海となれ”大海嘯”」

ゼクトは何かを考え付いたのか、先ほどと同じ魔法をまた唱える。

「なんや？また消されたいんか？爆炎波！！」

龍牙も先ほどと同じように自分の近くだけ水を消すとゼクトを睨みつける。だがそこにはもうゼクトはおらず、龍牙は気配をたどる。すると後ろの方から詠唱の声が聞こえる。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」…「契約により
我に従え」" 大空を統べる王" " 来れ" " 天上を貫く荒ぶる槍よ"
" 天へと誘う道となれ" " 深緑の柱"」

その瞬間、龍牙を中心に風が巻き起こり竜巻となつて中心にいる龍
牙を押しつぶそうとする。

しかもまわりには先ほど放った水があり、竜巻によって舞い上がり
重みの無い風に重量を与える。

「しもうた!!」

竜巻の中心に閉じ込められてしまった龍牙は中心で火の刃を放つが
まるで効果が無くそのまま飲み込まれてしまう。しかし、ゼクトの
魔法はまだ終わらない。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」…「契約に従い
我に従え」" 氷の女王" " 来れ" " とこしえのやみ" " えいえんひ
ようが"」(さすがにきつい…。じゃがここで決めねばワシは勝
てん!!)」

すると、水を伴った竜巻は一瞬にして氷漬けになり、大きな氷の柱
が出来る。もちろんその中には龍牙の姿があり、ゼクトはそれを確
認するととどめの一撃を放つ。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」…「契約により
我に従え」" 炎の霸王" " 来れ" " 浄化の炎燃え盛る大剣" " ほと
ばしれよソドムを焼きし火と硫黄" " 罪ありし者を死の塵に" " 燃
える天空"!!」

残り少ない魔力をかき集めて最後の一撃とばかりに炎系最強呪文を放つゼクト。”勝った！！”そう思ったゼクトだったが、すぐさまその顔は驚愕の顔となる。なぜなら氷の中にいた龍牙が赤く光り、ゼクトが作り上げた氷の柱に輝が入っていたからだ。

「ワイをなめるんやないでえええ！！！！」

そう言っただけ氷の柱を突き破る龍牙。その体は炎に包まれ、あまりの熱量に龍牙の周りの景色は歪んで見える。そしてそのまま”燃える天空”へと突っ込んでいく。

そこでゼクトは自分の失敗に気付く。それは最後の呪文を炎系にしてしまった事だった。しかし、攻撃力と残りの魔力を考えれば、それしか撃てるものが無かったのも事実であり呪文を連発しなければ追い詰める事など出来なかったため、仕方がないといえば仕方がないのであろう…。

そしてゼクトの予感当たる。

”燃える天空”に突っ込んだ龍牙はその炎を自分に取り込み更に突っ込んでくる。

取り込んだおかげか、龍牙の体はすべて炎に包まれ、包んでいる炎が虎の形を形成する。その大きさは自身の体の二倍はあり、その威風堂々とした姿は、”赤王”…炎を統べる虎王に相応しい姿であった。

「これがワイの最高の技じゃ！！！！火迦具槌！！」

「間に合え！！障壁最大！！」

そう叫ぶと虎の形をした炎が大きく口を開けてゼクトを飲み込もう

としてきた。

対するゼクトもほとんど残っていない魔力を搾り出し自身が出来る最大の防御魔法を唱えて堪えようとする。

ゴガオオオオン

ぶつかりあった瞬間、鈍い音と燃え盛る炎の音が混じって大きな音が響き渡る。まるでそれは虎が雄叫びを上げているようにも聞こえた。音の中心では爆炎に包まれ、まるで炎の棺のように見える。

しばらくすると、炎の棺は姿を消し、二人の姿が見えてくる。

いつの間にか二人は地面に降りており二人とも倒れている事は無かった。

「ハア：ハア：最後の最後でワシは失敗してもうたの」

そう言うのはゼクト、おなかを押さえ肩で息をしていた。体中に焦げた後や、火傷があり、しかも口からは血を流していた。

「その失敗のおかげでワイはたすかったんやで？…ほんま怖いわ」

そう軽口を叩いている龍牙であったが、いつの間にか紅から白へ戻っており、体中は傷だらけで血を流していた。息も荒くよくみると足が震えていた。

二人はそう言った後ほぼ同時に倒れこむ。

聞こえるのは遠くから大きな爆発音と、近くにいる人の息遣いだけ…しばらく何も喋らずそのままだった。

しばらくたった後、龍牙が独り言のように呟く。

「今日はワイが負けといたる。…やけど次はギリギリやない。誰が

見ても分かるように勝つたわ」

「ワシの負けじゃないのかの？…じゃがそういうならそういうことにしておこう。…もう二度と戦いたくないわい」

こうして龍牙とゼクトの戦いは終りを告げた。

この勝負には勝者はきつと存在しない。

二人とも負けたと認め敗者となってしまったからだ。

だが、それでいいのかもしれない。

敗者だからこそ強くなるうという強力な”意志”が生まれるのだから。

きっと二人の明日は今日よりも強くなっている事だろう…

なぜなら…

目指す頂が出来たのだから。

く我拳

は銃なりて・終く

第七話：矛と盾（後書き）

オリジナル技・魔法

空牙

特にこれと言って説明が無いんですが、まあ真空の刃を飛ばすと思っただければ…名前はふっと思いついたものを使いました。同じような技でこんな名前あった気がするけど…そこは勘弁してください。

大海嘯

この世界での水の最大魔法

イメージとしてはFFのダイダルウェブとかがイメージしやすいかと。

詠唱についてはそれっぽく、そしていい感じにを目標に書きました。どうでしょう？違和感とかないとうれしいです。

爆炎波

元ネタ…というかGODAGUNの聖さんの技そのまんまです。所々違う所はありますが、まあ魔法が使えるのでこんな感じになるのではないかと…。

感想でGODAGUNの他の技は出てこないのか？と言う質問を受けてそれで思いつきました。正直龍牙の技迷っていたのでありがたかったです。

不知火

ゼクトに空から突っ込んで炎を撒き散らした技の名前です。

話の中では奇襲っぽくしたかったので、技名を言わせませんでした。

陽炎

分身の術 or 変わり身の術です。炎を使い自分を作り出します。主に陽動に使用する予定です。作中で水を利用したとありましたが、あれは水を蒸発させて視界を悪くしたおかげで、相手から普通よりも本物っぽく見えるようになったという事です。

深緑の柱

サイクロン・竜巻そんな感じの魔法です。風系の最大魔法として登場させました。普通なら中心は安全なのですが、この魔法では中心に向かってどんどん風の壁が迫ってくるようにしました。名前を最後まで悩んでいた魔法です。

火迦具槌
ひがぐち

これも結構技名で出てくる名前だと思います。

龍牙最大の技で、火を全体に纏い炎の虎の形になって相手に突撃します。まず火の虎が相手を丸呑みにして逃げ場を失わせ炎による攻撃をし、本隊である龍牙はその相手に対して体当たりをする。といった技です。この技の特徴として、食らった相手爆炎に包まれるということです。今回は障壁最大がかかっていたため、ぶっ飛ぶ事はありませんでしたが、通常はぶっとびます。

いかがだったでしょうか？

今回はかなりの量のオリジナルが入っていましたが、なるべくネギまの世界を壊さずつくったつもりです。あと幻獣の魔法については作者の想像となります。

これを書き終わって思ったことは、”オリジナル魔法はつくるのがかなりめんどい”です。…まあたぶんこれからもつくっていくと思うんですが、何時心が折れるか今から不安でいっぱいです。

それでは次回またあいましよう

第八話：グレートブリッジ奪還作戦（前書き）

お疲れさまです。最近暑くて溶けそうです。暑いのが苦手なのに節電
って…出来るかー！！！！！！

ふう…。さて今回は本来なら一話で終わる予定だったんですがいろいろ詰め込んだら長くなったので二つに分けました。他の人ここはさらっと終わってるけど、自分だけ長く書いてつまらないとかいわれるいか心配ですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。
それではどうぞ！

第八話：グレートブリッジ奪還作戦

詠春との仕合いが終わったあと、その場で少し休み、何とか動けるようになったら俺達はアルがいるであろう場所に帰ってきた。その時にアルがとても嬉しそうにこちらに向かってきたのだが…何でこうなったのか分らない。…というか正直アルのキャラでそれをやられるといういろいろダメな感じがした。

ともかく、アルからすこし距離をとりながら話をしていると、龍ちゃん達も勝負が終わったのかこっちに向かって来た。勝敗については尋ねる事はなかったが、龍ちゃんの顔を見る限り何かとてもいいことがあったんだと思う。それぐらいいい目をしていた。

もちろん龍ちゃんもこっちの勝敗を聞くことは無く、しばらく俺の目を見て納得したように”うんうん”と頷いていた。

そうしてラカン達以外が集まった後、しばらく雑談をしていたのだが一向に勝負の決着がつかないので、詠春さんに頼んで日本食をつくって貰いそれを食べながら待つことになった。

それから半日以上が過ぎた所で、爆発音も無くなり様子を見に全員でその場所へ行くと、二人して寝転がって口ゲンカをしていた。見ていて見苦しかったので、引き離して連れて帰ろうとするとなんというか、子供のような捨て台詞を二人して言っていた。

「今日は調子が悪かったただけだ。今度会うときは覚えとけよ!!」

「へっ俺様だっておなががいっぱいでうまく動けなかったんだよ!! 次あったらボコボコにしてやるぜ!!」

うん。

もう好きにすればいいと思う。

きつとここにいた全員同じ事を考えていたんじゃないかと俺は思う。それから約2ヶ月俺達は”紅き翼”とケンカをしていた。実際はラカンとナギだけがケンカをしているのであって、他は思い思いに過ごしていた。

俺は詠春さんと一緒に修行したり、ゼクトやアルに魔法を教えるもらったりしていた。

龍ちゃんもほぼ一緒に詠春さんと戦ってみたいといって仕合いしたり、興味があるのか俺と一緒に魔法の授業を受けていた。

そんな日が続いたある日、いつものようにラカン達がケンカから戻ってくると何故か肩を組んで仲よさそうに帰ってきた。皆して打ち所が悪かったのか？と心配したが、どうやら互いに強さを認め合っていて仲良くなったらしい。そして気がついたら俺達は”紅の翼”に入っていた。

ちなみにナギからの勧誘の言葉はこうだった。

「ラカンから聞いたけど、オメエ達もかなりつえーんだって？だったら俺達と一緒にこねえか？一緒に大暴れしようぜ！！それと後で戦ってみねえか？どれくらいつえーかためしてみてえ……」

なんていうか言葉は微妙なのにどうしてか着いて行きたくなるのは、主人公体質なのかそれともカリスマをもっているのか分からないが、これで当初の目的通りに話が進めそうだった。他のメンバーも快く受け入れてくれたのでこれから騒がしくなるとは思っけど楽しくやっっていけそうだと思った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

それから何日かたった後俺達”紅き翼”はある戦場へと向かった。

…そう原作で”紅き翼”が有名となるグレートブリッジへと

「なあワイの記憶が正しければグレートブリッジって連合のもんやなかったんか？」

「いえ、龍牙の言う通りですよ。でも帝国側が大規模転移魔法を使って奇襲をし、難攻不落とまでいわれたグレートブリッジを陥落させたんです。」

「それからは連合は後手後手に回ってしもつての、今形勢は帝国側有利になってしまったんじゃ。」

「それでその状況を打開するために私達が呼ばれ、今回の作戦が決まったということだな。」

「今回の作戦…グレートブリッジ奪還作戦か。だけどこれは作戦っていうのか？周りで陽動をかけてその隙に俺達が奪還するだけだろ？」

作戦を伝えられたが正直納得できなかった。ただでさえ難攻不落といわれている要塞の防御力もあるのに、それに加え兵力は相手のほうがかなり上ということらしい。いくら陽動をかけるといつてもそれでどれだけの兵力がそちらにいくか分かったもんじゃない。これでは俺達に死ねといっているもんだ。

「そうですね。私達のことを信頼していると言われれば聞こえはいですが、私としてもどうかと思っています。戦況が見えていないのか、それとも…」

「あーそんな難しく考える必要なんてねーよ。ようは俺達が敵を

ぶつ飛ばせばいいことだろ？簡単じゃねーか。俺達は無敵の”紅き翼”だぜ？負けるわけがねー」

「H A H A H A！その通りだぜ。むしろ他のヤツラがいない方が余計な気を使わなくてすむってものだ。むしろやりやすいぜ。」

二人はそう言って大笑いをしている。

これだからバカと言われるんだけど…まあいい所でもあるのか。それにナギ達が言っていることも間違っていない。

どんな作戦だろうと、ようは俺達が成功させればそれでいい事なんだし、難しく考えて体が動かなくなってしまうのもバカらしい。

そう思っていると、他の皆も同じ気持ちなのか仕方が無いなあといった感じで笑う。

でもその目は真剣味を帯びており、これからやる事の覚悟が出来た目をしていた。

「はあ…バカは気楽でいいな。」

『誰がバカだ！！コイツと一緒にするな！！』

俺がそう呟くと二人してこっちに叫んでくる。まるで息を合わせたように同じ事を言うので思わず吹き出しそうだった。すると、さっきの言葉に引っかけたのかまた二人が言い争いを始める。

「おい。ラカン俺様が何だって？お前と違ってバカじゃねーんだよ。この筋肉バカ」

「はあ？何言つてやがんだ？てめーこそ未だに魔法ほとんど使えないくせに。このバカガキが！！」

『……ぶつとばす!!』

そう言ってお互いに胸倉をつかみ合う。また始まったみたいだ。

「はぁ…だから二人はバカなんだって…」

「そういつたかで、いまさらやん。それに……タケやんもあんま変わらんで？」

「オイオイ…。それを言うなら龍ちゃんだろ？俺はいつも冷静だ。」

「冷静って言葉の意味しつとるか？…それとワイのどこがあいつ等といっしょや!!」

「ほう…龍ちゃんケンカ売ってんの？」

「そっちこそワイにケンカ売つとるやろ？」

『……表に出やがれ!!』

「戦争する前に龍ちゃんを亡くすなんて、残念だよ。」

「そのキャラは無理やといつとるやんけ。いい加減あきらめや！それとそつくりそのままの言葉返したるわ。…覚悟せいよ。ワイの半分も生きてないクソ餓鬼が!!」

「やめんか!!! 状況を考えてケンカしろ!!」

詠春さんがケンカを止めようと叫ぶが、そんな事関係無い!! 今日こそは俺が二枚目になれることを証明しなくちゃいけないんだ! だから…

『『黙れ！！邪魔すんな！老け顔詠春！！』』

「老け……！！フフフッ………斬る！！」

「ふう…あやつらは。これから戦争しにくって本当にわかつてるのかのう」

「忘れていると思いますよ？ですが…フフフッ」

「なんじゃ？」

「いえ。この方が私達らしいと思ひましてね。」

「わっはっはっは。なるほど。その通りじゃ」

そうして指定された場所へ行くまで俺達はずっとケンカをしていた。皆この後戦争すると分かっていたのか、ただのじゃれあい程度だったが、それでも場所についた時にそこにいた兵達に怪我の心配をされてしまった。

俺達にとってはこんなもの日常茶飯事だったのだが、どうやらそれは普通から見たらありえない域だったらしい。どうやら俺もかなり毒されてしまったようだ。

「もともとやないんか？」

龍ちゃん心を読まないで欲しいな。

.....

.....

「ナギ！そろそろ作戦開始時刻ですよ。」

アルがそう言うで一瞬にして皆真剣な顔つきになる。

正直俺は戦争をするのが始めてだから怖い気持ちが無いわけじゃない。

するとそんな気持ちを感じ取ったのかそばにいる龍ちゃんが声をかけてくれる。

「タケやん。怖いのは全員いつしよやで？大丈夫やてうち等は強い。んでうちらは誰も死なへん。安心しいや」

どうやら龍ちゃんは俺の心が分かるらしい。

確かに殺し合いをするのは怖い。

だけどそれ以上に怖いのは心を許しあっている仲間が死ぬのが怖い。だから戦争は嫌いだ。

「そついうことじゃ。安心せい。」

「ですね。」

「私の背中を任せられるのは武しかない。お互い助け合えば大丈夫だ。」

「らしくねーなタケル。いつもみたいなクソ度胸どこいったんだ？オメーが負ける？ハッ！こんな奴らにやられるわけがねーだろ？俺様達是最強なんだよ。やられるわけがねー」

「ラカンの言う通りだぜ！俺様達は無敵の”紅き翼”様だ！この世

界で俺達に敵うやつらないんかいやしねーぜ。この”サウザンド・マスター”のナギ様が保証してやる。タケルは負けねえし、俺達も死なねえよ！」

やば！不覚にも泣きそうになった。

ホントこいつ等とダチになってよかった。

こいつ等とこれからもバカやっていく為にこんな所で負けちゃいられない。

「んー？なんだあ？タケルオメー泣いてやがんのか？おい見ろよタケルの奴泣いてるぜ？」

「……ラカン後で急所にマグナム全弾な。しかも下の方の」

「H A H A H A。やっといつものタケルに戻りやがったな。……マグナムは嘘だろ？」

「ふう。わりいな。おかげでようやく負けねえ”覚悟”って奴ができたよ。」

「気にする必要なねーよ。」

「なあタケル嘘だといってくれ！！頼む謝るから！！」

「……ラカン。」

「おお！！龍牙。俺様を助けてくれるのか？」

「よく言うやん。諦めが肝心やって」

「ノオオオオオオオ……！！！」

なんかラカンが叫んでいるけど気にしない。

自業自得だし、まあ無事に生きていたら全弾じゃなくて一発ですましてやるさ。

「んじゃま。そろそろ行くか…オメーラ準備はいいか？」

おっ？ナギまでラカンを見視か？こりゃー敵さんがちょっとかわいそうになってきた。

『『オウ！！！！』』「……オウ」

「よっしゃ！じゃ行くぞお前ら！！！」

ナギの掛け声と共に俺達は戦場へと突っ込んでいくのだった。

「最初は俺様からいかせてもらっぜ！オラア『千の雷』！！！」

ナギ得意の広域殲滅魔法によって前方にいた戦艦や兵達がいなくなる。

その光景に帝国、連合両方の兵達が驚き一瞬動きを止める。

「どうせ後が無いんだ……派手に暴れさせてもらっぜえええ！！！！
”アデアット”『千の顔を持つ英雄』オラオラオラ！！H A H A H
A！！！！どんきやがれえええ！！！！」

続いてラカンがナギとのパクティオーによってでてきたアーティファクトを使って剣を次々だし相手に向かって投げる。そしてそのまま出した剣を手に持って敵陣に突っ込んでいく。

ラカンの奴飛ばしてるな。あれが鬼気迫るって言うんだろっな…。

「こっちも忘れてもらっては困るのうホレ『雷の暴風』」

「そうですね。」

ラカンの反対側ではゼクトとアルが魔法を放ち次々と相手を倒して行く。

こう見ると魔法ってやっぱりひどいチートだと思う。

「武！余所見をしていると危ないぞ？『真・雷鳴剣』！！」

俺の横では詠春さんが技を放っていた。

ナギの”千の雷”よりは範囲は狭いけど、これも大概だよな。

神鳴流はダテじゃないって所か…。

俺も負けてられないな。

「おっしや。龍ちゃんオープンコンバット戦闘開始だ！」

「任せとき！」

「オン・フイスト・ガン・ペンスリット

”契約に従い我に従え炎の霸王””来れ浄化の炎””燃え盛る大剣”

”ほとばしれよ””ソドムを焼きし火と硫黄””罪ありし物を死の塵に”

”燃える天空”！！”固定””掌握””術式兵装”……………”炎帝”

！！」

「”我名において助けを請わん””その友の名は火の精霊クウ””
我魔力を糧に我に力を示せ”……………”赤王”」

俺達がそう詠唱すると、皆さっきナギが魔法をぶつ放した時と同じように啞然としていた。

まあ仕方が無いか。

俺と龍ちゃんは炎を纏ってそこに佇んでるし、ラカン達曰く威圧感がハンパないらしいからね。

「行くぜ！」クレイジー・ホース” モデル・サラマンダー” ！！
」

俺はそう言っただけで敵に向かって炎を纏ったガン・ブレットを乱れ撃つ。ガン・ブレットが敵か地面に当たった瞬間大きな爆発がした。

これは”炎帝”時に起こる付加価値だった。直接殴りつければ相手は炎に包まれ、ガン・ブレットなど間接攻撃に当たると爆発するようになっていた。

詠春さん達と修行し、ゼクト達に魔法を見てもらったせいか、威力が前よりも上がったし何より効率が良くなった。

ゼクト達が言うには、魔力とかを気にせず打ち続けるのはラカンとナギぐらいな物で、普通は自分の限界を知ってから、効率化をはかるそうだ。

俺の場合は特に”感卦法”や”闇の魔法”を使用し、銃闘技を使うと常時消費しているだけではなく、攻撃する際魔法をぶつ放しているのと同じ事らしいのでとても燃費が悪かった。

更に問題なのが、銃闘技の強みである圧倒的な手数のおかげで消費が激しくまた体に負担もかかりやすいそうだ。

なので効率化することで、負担を軽くしようとした結果……何故かすべて一段階力をあげる事に成功した。

まあそれを見た詠春さん達は”理解ができる分バクでは無いが、それでも武装した武はすでに人のレベルではない”と人外の称号をもらった。

”そうは言っただけで詠春さん達も大して変わらない”と言っただけで自覚

しているようだった。

…とても嫌そうだったけど。

「タケやんとばすなあ。ワイも行くでえ！！爆炎波！！」

隣では龍ちゃんが同じように炎を飛ばして攻撃をしている。

こっちもこっちでかなり強くなったみたいだ。

もともと幻獣は魔法の効率化なんて考えた事も無かったらしく、俺と同じく効率化を試みたら格段に動きが良くなり、そして技の威力も上がった。

なんでもうまく魔力を込めれるようになったそうだ。

そうやって俺達はほぼ無双状態でどんどん敵陣に突っ込みとうとう難攻不落の要塞の前まで来ていた。

「ふむ。……やっかいじゃなコレは」

「……そうですね。」

要塞の真正面についたとたんゼクトとアルが難しい顔をして悩む。

「どうしたんだお師匠。何がやっかいなんだ？」

「ふむ。簡単に言えば魔法障壁がこれでもかって言うくらい張り巡らされておる。」

「なら詠春に斬ってもらえばいいじゃねーか。」

「それが出来ればいいんですが…ここまで巨大な障壁を斬ったことがないでしょう？これ一枚で多分私達が使う障壁最大の二倍は硬い

と思いますよ。それが幾重にも張り巡らされているとすると…詠春はどう思いますか？」

「そうだな…。斬れないことはないと思う。だがそれにはかなり時間がかかるな。もちろん全力でやるがそれでも…大して変わらないと思う。だがそれじゃ駄目なんだろう？」

「その通りじゃ。コレに手間取っている時間は無い。時間を掛け過ぎると敵の増援が来てしまう。そうなったらワシらは良くても他がもたん。まだコレは城門じゃ、その後には制圧作業が待っており。そうなるともうほとんど時間が無いと言ってもいいじゃろ」

「つまりほぼ一発でこれを撃ち破る必要があるわけか。俺達が一斉に攻撃して、攻撃を集中させるのは？」

「それでもたぶん威力がたりないですね。まったく厄介なものです。」

いつものようにかるい感じでアルがそうため息を吐くが、その顔はとても真剣でそれだけで今自分達がやばい状況に陥っている事が分かる。

すると後ろの方で敵と戦っていたラカンが戻ってくる。

「オイ！いよいよやべーぜ？連合が押され始めやがった。このままだともたねえ。」

ラカンがそう状況を皆に伝える。それでもまだ皆の顔は暗いままだった。

どうにかしたいが力が足りないのだ。

必死に頭を回転させて打開策を考えるが一向に思いつかない。

どうしたら…そう皆が思っていた時に武がボソリと呟く。

「……アル？後どれくらいの威力が必要なんだ？」

「え！？…そうですね。ナギ一人分の威力でしょうか。それだけあれば大丈夫かと。…でもそれがどうしたんですか？」

「…方法が一つだけある」

『『何だつて！？』』

そう言う武の目は何かを覚悟した目をしており、そして相棒である龍牙はその目に何処か不安を感じ始めるのであった。

〈我拳は銃なりて・終〉

第八話：グレートブリッジ奪還作戦（後書き）

んーもつともっぱい所で引いてみましたけどどうでしょうか？

あとグレートブリッジを難攻不落にしてみました。

原作見てもそこはかなり重要な場所みたいだからコレくらいはやらないとって思ったらこんな事に……なぜ俺は途中で自重をしなかったんだ。

紅き翼無双の予定だったのに……んーコレは批判が怖いです。

ただ英雄を名乗るのならコレくらいは苦労して欲しいかなっていうのがほんとの気持ちです。

英雄は一日にしてならず！ですね。

さて次回……と言うかこの話の後半はただいま執筆中で明日には出来るかな？って所です。

それでは次回また会いましょう。

第九話・その拳はすべてを貫く（前書き）

お疲れ様です。

遅くなりましてもうしわけありません。次の日に投稿できるとかいって今日になってしまいました。

まあ言い訳はあとがきで…

それではどうぞー！！

第九話・その拳はすべてを貫く

帝国の兵達の攻撃をかわし、反撃をしながら皆武の方を見る。

この追い詰められる状況で、それを打開する方法があるというのだ。当然の反応だろう。

皆が期待を込めた表情で武を見ている中、一人だけ冷静に武を見つめる者がいた。

龍牙。

武の相棒にして、誰よりも長く武のそばにいた虎。

だからこそ気付いた。…いや気付いてしまったのだ。

武が何かとてつもない事をやろうとしているのを…

そしてそれには自分を投げ出すぐらいの覚悟が必要だということを…

龍牙は必死になって武が何をしようとしているのか考える。

……そしてある結論に達すると、一瞬にして血の気が引き武へと詰め寄った。

「まさか…あかんで。タケヤンそれだけはやったらあかん。アレはまだ完成しとらんやんけ。前つこうた時どうなったか覚えとるやろ！？」

龍牙が今まで見たこともないくらいに取り乱しているのを見て他の面々は驚く。

いつも飄々としているあの龍牙がここまで必死になって止めるのだ。それはつまり…常道な方法ではない。

”紅き翼”の間にえもいえぬ緊張感が漂い始めた。

「でも龍ちゃんもう時間もなし、アレを使うしか方法が無いじゃないか。」

「せやけど…」

「龍ちゃん大丈夫。俺は不可能を可能にする男だぜ？」

「……こんな時までアホいうよるんやから。わった。でもタケヤン死ぬんや無いで？」

武の意思が固いのを知って止められないと分かった龍牙は、そう言
って武のそばから離れる。

それを見ながら笑い、真剣な顔になって皆の方へ顔を向ける。

「皆聞いて欲しい。これから俺はある魔法を使う。それがうまくい
けばナギ一人分の威力は確保できると思う。だけど…」

「だけどなんだよ」

「コレはまだ完成もしてないし、もちろん使いこなせるわけでもな
い。実際に前使おうとしたら扱いきれず結果ひどい重症をおった。」

『！！！！』

「しかもコレを使った後は俺はしばらく戦闘不能になる。だけどこ
の状況を打開するためにはもうコレしか手がないと思う。だから俺
を信じてみてくれないか？」

そう武が言って頭を下げる。

すると皆近くに寄ってきて肩に手を置いた。

「何いってやがる。オメーが信じろって言うなら俺様は信じるぜ？
そんなもん頭下げて言われる必要なかねーよ。」

「私もだ。今から何をやるか想像はつかんが、それでも武ならできる！そう信じている！だから思いっきりやれ」

「お主とおると本当に退屈せんのう。分かった。その代わり絶対に成功させるんじゃないぞ？その後のことは任せておけ」

「そうですね。私も信じますよ。後のことは任せてください。貴方は成功させる事だけを考えてくれればいいですよ。」

「何言つてやがる。ダチの言う事しんじねーで何を信じるってんだ。それにうまくいかなくても俺様がケツを拭いてやるぜ。…それが嫌ならせつかくの見せ場だ！絶対に成功させるよ！！」

「お前ら……よっしゃ。いつちよやってやるぜ！！」

皆からの信頼に答えるためにも武は不安でいっぱい心を吹き飛ばすかのように大声を上げて気合を入れる。そして気合を入れ直した所で皆の目を見てこれからのことを説明する。

「それでなんだけど…まずこの魔法はちよつと時間が掛かるんだ。それまで俺を守って欲しい。それから俺が合図したら一斉に要塞に向かつて攻撃して欲しい。」

『まかせろ！！』

「たのむな。…さあ俺の一世一代の見せ場だ！派手にいくぜえ！！」
ブライムファイアード
「！！闘火火薬点火！！」

そう武が言つと、武の周りに今まで感じた事の無いような力が充満

し始めた。

「龍牙 side」

タケやんがあ魔法を使う。

タケやんが考えて、そしてきっとタケやんしか使えない究極の魔法を…

「龍牙？貴方はタケルが今から使うアレの事を知っているんですか？」

「……しつとる。アレはな、ワイらがまだラカンとあってない頃、タケやんが試してみたい魔法がある言うたのが始まりやった。その時はワイもどんな魔法やるってワクワクしながら見とったんやけどな？すぐさまそのワクワク感はなくのーで、次に感じたのはとてつもない恐怖やった。」

「何をしようとしたんじゃ？」

「……”感卦法”と”闇の魔法”の融合や」

『……………』

驚いとるな。

そらそうやる。普通そんな事考えへん。二つともそれぞれ最上位にある魔法や。それをあわせるなんて出来ると思うほうがおかしいねん。でもタケやんにはそれが出来るんや。

「あ…ありません。そんな事できるわけが無い！！」

「そうじゃ。そもそも”感卦法”自体が”気”と”魔力”の融合じゃ。それに更に”闇の魔法”を融合させるじゃと…そんな事…出来るのは神…いや神でも無理じゃ！！！」

いつも冷静なアルはんやゼクトはんが取り乱すのも当然や。
でも今からそれをやる。だからワイはタケやんを止めたんや。

「ワイもそう思った。けどな…タケやんはそれを形にする事が出来た。やけど…」

「なんと…」

「バグ…と言う言葉ではすまんぞ」

「やけど…その力は大きすぎた。タケやんが言うにはうまく行き過ぎてまったとか言ってたけどな。だからその力が暴走して何時もなら怪我しても次の日にはピンピンしとるタケやんでも一週間寝たきりになってもうた。」

「……………」

ああ、皆黙ってもうた。

しゃあないけどな。でも皆忘れとらんか？タケやんはなんて言った？そしてうち等はなんて答えたんや？

「やけどワイはタケやんなら制御できると信じとる！あのアホは確かに変な所で決めきれへんアホンダラやけど、ワイらの信用を裏切る真似は絶対せいへんからな！！！」

「…そ、そうだな。タケルはぜってー成功させる」

「俺様は最初から疑ってねーぜ。」

「…そうだな。武はやる男だ」

「フフフツ…楽しみになってきましたよ。そんな魔法が拝めるなんてね。」

「長く生きたワシでも考えた事なかったわ。…ワシもまだまだじゃないの」

皆ええやつや。

さて…ワイの相棒が命かけてがんばっとる。

ならワイは？……もちろんやる事はきまっとる。

「おうお前ら！誰に断ってこっちに攻撃しようとしとんねん。タケやんの邪魔はさせへんで？どうしても邪魔したいんやったらな……ワイを倒してからにせんかい！！」

信じとるでタケやん

「ワイは”炎帝”を守る”赤王”じゃ！！命捨てる覚悟が出来たやつらからかかってこんかい！！！」

〔龍牙side終〕

〔武side〕

ふう…さて始めるか。

” オン・フリスト・ガン・ペンスリット ”

” 我詠うは精霊の詩 ” ” 我奏でるは命の炎 ”

俺の足元に大きな魔方陣が浮かび上がる。

よし、前までならすでにここできつかったけどゼクト達のおかげでスムーズにいった。

本当に感謝しないとな。

” 二つは交わりすべてを照らす光となる ” ” 固定 ”

これで感卦法の準備は出来た。次は…

” 我願うは終焉の炎 ” ” 我掴むは精霊の理 ”

ぐぐぐぐ… きっつー魔力の効率化はかっててもこの重さかよ。体の中で魔力が暴れてやがる。

ちよっとはおとなしくしてくれよ。

” 二つは重なりすべてを飲み込む闇となる ” ” 固定 ”

ハア… ハア… よし。さて最後の仕上げだ。

前回はこちらで俺駄目だった。

今なら分かる。

あの時は” 感卦法 ” と同じように自分を無にすればいいと勝手に思っていた。

でもそれは間違いなんだ。

” 受け入れる ” じゃなくて ” 受け止める ”

その為には自分の意思を強く持たないといけない。

自分が空っぽだったら、受け止める事なんて出来るわけが無いよな。

でも今は違う。

俺を心配してくれる相棒がいる。

俺を信じてくれる仲間がいる。

そんないいやつらのためにも俺は”力”が欲しい

すべてを守り、すべてを撃ち貫く”力”が…

だから”力”を怖がるな！

すべてを受け止める！！

俺ならできる！！

”光と闇すべてはわが身に宿り””すべてを撃ち貫く力となれ！！”

俺の気持ちを最後に詠い右手と左手を合わせて合掌の形をとる。

コレですべての詠唱は終わった。

前やった時はこの後力が暴れて制御できなかったのだが、今はまるで何も感じない。

失敗したのか…？

そう思った瞬間、丹田の辺りからすごい力が巻き起こり俺を優しく包み込んでくれる。

その力を感じて俺は成功したことを確認し、そして納得した。

なるほど…。神が”然”と名づけた理由がわかった気がする。

”然”とは”自然”…自然はすべての源であり、すべてを表す言葉。つまりはそういう”力”なんだろう…

自分で考えといてなんだけど…俺やばい魔法考えちゃったわけだ。

……まあとにかく今は目の前のことに集中！

時間も限られてるし、行動しないとね！

武side終

武が”然”を成功させた瞬間”紅き翼”のメンバーは思わず手を止めてしまった。

”紅き翼”でコレなのだから他の人達は動けるはずも無い。

武の姿は先ほどとあまり変わっていない、ただ炎の色が違っていた。先ほどまであんなに真っ赤に燃え上がっていた炎はオレンジ色の澄んだ色をしてた。

それは何処か頼りないように見えるのに、何故かとても心強く感じる。

そして何より違ったのはその圧倒的な存在感と武から発せられる力

”炎帝”：それはだれが呟いた言葉だっただろうか。

その呟きは全員に響き渡る。

今までも”炎帝”の名に相応しかったが、この姿こそ本当の”炎帝”火を制し、火を従え、火とともに存在する。

炎の支配者に相応しい姿だった。

「皆！頼む！！」

そう武が叫んだ瞬間、”紅き翼”はすぐさま詠唱を始めたり気を溜めたりした。

その顔は皆笑顔で笑っていた。

「クククツ：あーおもしれえおもしれえ！！こんなの魅せられたらいやでも力が入っちまうぜ！！なんだよそれ！俺様と戦う前からあっただあ？なら今度はその状態で戦おうぜ！なあタケルよお！！」

「あーはっはっはっは！！タケル何で今までそんなおもしれえもん

隠してたんだよ！今オメーと凄くケンカがしてえ！！だからもうこんな戦いは止めだ！一気に終わらせてやるぜ！！」

「はははっやってくれる。私は今すばらしいものを見てるよ。そのお礼といっではなんだけど最高の技を魅せてあげるよ」

「フフフツ…私も柄にも無く興奮してますよ。さて早くこんな障壁なんか壊してその魔法についていろいろ教えてもらいましょう！」

「あー笑みがとまらん。もうこんな戦場なんか興味が失せたわ。早く終わらせてしまおう。時間は有限じゃ。効率よく使わねばの」

「あははは！やった！やったやん！さすがワイの相棒や！！それにしても注目浴びすぎやん。…あかんな。タケやんのボロがでる前にさっさと決めな。ってことですまんけど覚悟してや？」

敵側がやっとの事で意識を取り戻し、阻止しようと動こうとしたがもう遅い。

「ぶつとべ！！『ラカンインパクト』！！」

「くらええ！！『千の雷』！！」

「神鳴流究極奥義！『滅殺斬空斬魔閃』！！」

「潰れなさい！！」

「『千の雷』！！」

「いくでえ！！『火迦具槌』！！」

ナギとアル、ゼクトの魔法で大爆発を起こし障壁を何枚か破る。
その後にはラカン、詠春、龍牙が突っ込み更に追い討ちを掛けると更に障壁が破れた。

だが、さすが難攻不落といわれた要塞。

それでもまだ数枚の障壁が張られていた。

しかしそれは”紅き翼”も分かっていた事。

でも誰一人悲観してなかった。

なぜならまだオオトリがいる。

銃弾の拳を持ち、真に”炎帝”名に相応しい姿となった男：伊達武
彼が力を溜めて待っていたのだから。

「さあ仕上げだ!!」

そう言つて武は右腕をハンマーコックする。

するといつものように腕は鉛色に変色していくが、その腕の周りには炎がまるで吸い寄せられるかのように集まり螺旋を描いていく。

更に鉛色から青銅色に色が変わってくる頃には炎も同じようにオレンジ色から青色へと変化をしていき、右腕の周りを高速に回転していく。

「いくぜ!!!」

そう言つてその場から飛び出しナギ達が壊した障壁の所へ突っ込んでいく。

その間に皆はその場から離れ様子をうかがい、これから来るであろう衝撃に準備をする。

「撃ち破れ！！『メガフレア・バレット』！！」

武と障壁がぶつかった瞬間辺りにはすさまじい衝撃波と熱風がまきをこり、近くにいた敵、見方問わず巻き込んでいく。

ナギ達は衝撃に備えていたため飛ばされずにすんでいたが、そのあまりにもすさまじい威力に目を見開いていた。

「すっげーな。アレがタケルの本気ってやつか…。」

「ええ…。しかも見てくださいアレを」

アルがそう言つて空を指差すと、そこには二本の火の線が武の突っ込んでいった所まで伸びており、空に火の道が出来ているようになっていた。

「アレを見ただけでもすさまじい力だったという事が分かるの。」

「そっやな…。ってそんな事よりタケヤんは？」

ゼクトに同意しながらも龍牙は武の事が心配になり、爆炎の中に居るであろう武を目を凝らして探す。しばらくすると爆炎が晴れてきて人影が見えた。

それを見て”紅き翼”の面々は成功した喜びと、武が無事な事にはっと胸をなげ下ろす。

すると武が急にぐらつき方膝を付いた。

それを見た”紅き翼”は一斉に武の下へと移動する。

そして心配しながら武の顔を覗き込むと、武は笑っていた。

「ははは…。皆何とかやったよ。でも…さすがに頑張りすぎたわ。」

「あほ…。当たり前や。それより大丈夫なんか？」

「龍ちゃん…。なんとか大丈夫みたいだけど。さすがに今日はもう動けない…。かな？」

「お疲れ武。後は私達にまかせておけ」

「そうだぜ。あとはパッパッと俺達が片付けてやるよ。」

「そうじゃ。」

その言葉を聞いて武はフツツと笑いそのまま目をつぶる。

「タケヤン！？」

「……心配しなくていいですよ龍牙。疲れて眠ってるだけです。」

「そ…そっか…。このアホは人に心配ばかりかけよってからに…」

「そうじゃな。じゃがそのおかげでワシらの勝ちが決まったようなものじゃ。…本当にたいした男じゃよ。」

「……よし。師匠、アル、それから龍牙はここにいて武の様子を見ていてくれ。詠春、ラカン、俺達はさっさと制圧しちまおうぜ？」

「おう。」

「わかった。」

こうしてグレート＝ブリッジ奪還作戦は、“紅き翼”の活躍により

連合の勝利で幕を閉じた。

この戦いのおかげで、“紅き翼”の名は大陸中に知れ渡り、一躍有名になる。

そしてそのあまりにもでたらめな強さに、畏怖と親愛を込めて二つ名をつけられる事となった。

もちろん武も同様で、それ以降こう呼ばれる事となる

『銃神』・『炎帝』・『空を紅く染め上げる者』と

この事実を武が知り、頭を抱える事になるのは、戦いからしばらくたった後だった。

く我拳は銃なりて・終く

第九話・その拳はすべてを貫く（後書き）

オリジナル技

『メガフレア・バレット』

今回遅くなった最大の原因です。イメージは『ギャリックマグナム』ですね。

ただ、この名前のせいで凄く悩みました。”ギャリック”って人名なんで使えないんですね。しかもマグナムっていうのもなんか違った感じがして…

そこで散々悩んだあげく、この名前になりました。炎の最高峰と考えた時に”バハムート”さんを思い浮かべまして、そこから後は”バレットM82”通称対戦車ライフルのバレットを組み合わせた。直接殴りつけるのですが、射程が長いのと威力がありえないほど強い設定なのでコレを使わせていただきました。

あと、作者はこのバレットは形が大好きです。

えーこれにてグレートブリッジは終りとなります。

この後ですが、ちよつと小話的なものを入れたいなーと思っっています。

内容はガトウ・タカミチ介入とガトウと武の語り合い？です。

お互い拳を使うので絡ませていきたいのですが、対戦させたほうがいいんですかね？そこは今迷い中です。

あとちよつと皆様に意見を聞きたい事がありました…

タカミチ君なんですが、どうでしょう？

実は今二つアイデアがうかんでおります…

- 1．原作通りガトウがタカミチを鍛える（ガトウのみ師匠となる）
- 2．ガトウと一緒に武もタカミチを鍛える（銃闘技のノウハウをタカミチに伝授。タカミチ強化フラグ）

以上です。

詠春もオリ技だしたので、タカミチも出したいなと思ってたらこんな事思いつきました。

皆様の意見をお待ちしております。

感想もいただけるとうれしいです

それではまた次回お会いしましょう。

小話1：音速の拳とその弟子。（前書き）

お疲れ様です。

遅くなつてすみませんでした。実家に帰ってたんですが、そこでは執筆活動できない上に、データも無いので…

やっと自宅に帰って何とか書き上げて見ました。

今回は前予告したように小話です。

それではどうぞ

小話1：音速の拳とその弟子。

「……ん。……ここは……」

このフカフカした感触は多分ベットだと思っけど、ここはどこだ？
確か”然”を成功させて要塞の障壁をぶっこわした事までは覚えて
いるんだけど……。

……まあ考えても分からないか。
とりあえずは……

「……知らないてん」

「いわせるかい……！！！！」

ドスン！！

「んげっ……！！」

「いって……。何するんだよ龍ちゃん」

「何するやあらへんわ！お前今危険な事言おうとしたやろ！」

「いやでも、これは言わないと……」

「ダメや！」

「……龍ちゃんめ……。大体俺が何言おうとしたか知ってるのかよ？」

「知らん」

「だったらなんで!？」

「知らんけど、なんやどうしてもそれは言わしたらあかんって変な使命感を感じてな」

「どうやら、コレはこの世界の規則に反するらしい。」

「皆絶対言ってたから俺も言いたかったのに…」

「まあ仕方が無い……と今は割り切って、機会があったら今度は絶対に言い切ろう。」

「なんや変なこと考えてへんか？」

「!!キ…キノセイダヨ」

「……まあええ。それよりも今自分の状況わかつとるか？」

「いや。説明してくれるとありがたい。」

「わった。んじゃな…」

龍ちゃんの話によると、あの戦いから一週間はたっているらしい。

その間俺はずっと眠り続けていて、おこそうとしてもまるで無反応だったそうだ。

ゼクトやアルが言うには、【”然”を成功させるために神経にかなりの負担がかかり、なおかつあの状況下の中でのプレッシャーが一気に俺に襲い、それに加えて体を酷使した疲労が重なり一種の冬眠状態になっているのだろう】のこと。

「なんかかつこわるなあ…」

「それは贅沢やと思うで？前は体中傷だらけになって死ぬ一步前やったんやから。それに比べれば全然ましやろ？」

「まあそうだね。」

神様がくれた手紙にはひどい筋肉痛ぐらいと書いてあったんだけど……それは多分まだ俺がうまく扱えてないせいなんだろうな。

それから龍ちゃんが今俺がいる場所の事についてを教えてください。龍ちゃんの話によるとここは連合の本拠地がある町の宿屋らしい。

俺が倒れた後、無事に作戦は成功して戦いは終わったらいいのだが、その後連合のお偉いさんが来て俺達を本拠地に呼んだらしい。

皆も疲弊してて、早く休みたかったらしく二つ返事で了承してここに来たそうだ。

もちろん宿代はタダ。

俺達は連合では英雄扱いになっており、メシとかも頼めば用意してくれるらしい。

まさに居たせりつくせり状況なのだそうだ。

「……なるほど。大体今俺達が置かれている状況は把握した。それで？他のやつらはどうしたんだ？」

「ナギとアル、詠春はお偉いさんの所にいっとる。ラカンが酒飲みに出かけてゼクトはんは町をぶらぶらしてるんや無いかな？」

「なるほど。じゃあ俺も……」

「アホか！……！」

バシーン……！

「いてえ!! お前さっきまで寝込んでた奴になんて仕打ちを……」

「さつきまで寝込んでたんやから皆が返つて来るまでおとなしゆせ
い！」

「えー」

「えーやない。タダでさえ寝たきりで体力落ちとるんや。無理すなや」

「分かったよ。」

龍ちゃんに言われて素直にベットに寝転がる。

さすがに今回はかなり心配をかけたからこんな状況の時くらいは言う事を聞いておこう。

それから皆が帰ってくるまで龍ちゃんと一緒にゴロゴロしながらこれからどうするかを考えていた。

[illegible]

「お！？ やつと起きたか」

「体の方はもう大丈夫なのかい？」

「……どこも異常はなさそうですね。」

「まったく。年寄りに心配をかけさすんじゃないぞ。」

「H A H A H A。起きたなら一緒に酒のみにいこうぜ？さつき良い店見つけたんだよ」

皆が帰ってきて俺が起きているのを見ると皆一斉に声を掛けてくれる。

その顔はどこかほっとしているような表情をしていて、それだけでも申し訳なく思う。

「なんか心配かけたみたいでごめん。でももう大丈夫だから」

そう俺が言つと皆笑顔になって、【気にすんな】って返事を返してくれた。

そのせいでちょっとウルツツときて、必死になってそれをごまかしていた。

たぶん皆にはばれてると思うけどね。

「あ、そういえばさつきから気になってただけど、ナギ達の後ろにいる人達は誰？」

「あ、そやそやワイもそれ思ってたんや。誰や？」

俺と龍ちゃんがそう疑問を投げかけると、ナギはその二人を俺達の前に出して紹介する。

「ああこいつらか。こいつらは…」

「まで。自己紹介ぐらいは俺から言おう。俺の名前はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。訳あって今日から”紅き翼”に入ることになった。よろしく頼む」

「その弟子の高畑・Ｔ・タカミチです。タカミチって呼んで下さい」

これがあのガトウか。そういえばこの時期から一緒に行動するようになるんだっけ。それにしても…んーナイスダンディ。俺も歳とったらこんなふうになりたい。

それとタカミチか…。この時はまだ子供なんだよな。それにしても…こんな純情そうな子が原作開始時にはあれだけ老け顔になるんだから…。よし。タカミチにも魔法球で歳をとらない指輪作ってやろう。なんかすごいかわいそうになってきた。

「ふーん。そうなんか。…それで訳ってなんや？」

「それについては私から説明しましょう。簡単に言うなら私達と連合を結ぶパイプ役ですね。先の戦いで私達の力の大きさにやつと気付いて直接連絡が取れるようにしたいそうです。まあこちらとしてもいろいろ情報を流してもらって予定なので損は無いですよ。」

なるほど…と俺と龍ちゃんは頷く。

まあ他にも監視とかいろいろ理由はあるんだろうけど、まあそれはそれ。

とりあえず今は新しい仲間を歓迎しよう。

「タケル・ダテだ。よろしく」

そう言って右手を差し出すと、あっちも同じように手を出して握手をする。

「よろしくたのむ。」

「タカミチもな」

「は…はい！よ…よろしくお願いします。」

なぜか声が震えてたんだけど、大丈夫なのか？

「ああ。タカミチはお前さんを尊敬しててな。緊張してしまっているのさ」

「し…師匠！！」

「はっはっは。そんな緊張しなくても。俺は別にすごい人なんかじゃないぞ？」

「そんな事ありません！！あ…いや。大きい声を上げてすみません」
「別にいいさ。ま、慕ってくれるのはうれしい。これからよろしくな？」

「はい！」

そう言つてタカミチに笑いかけるとタカミチも嬉しそうに笑っていた。

「んじゃ。タケルが目覚めた祝いと、”紅き翼”に新しい仲間が入った祝いもかねてパーっとさわごうぜ！！」

そうナギがしめて俺達はさっきラカンが言った酒場へ移動するのだった。

[illegible]

酒場に移動して、早速乾杯をする。ラカンオスメの酒場だけあってお酒も美味しく皆それぞれ思い思いに飲んでいく。そんな中俺は適当にラカン達から逃れると、アルとゼクトが飲んでいる場所へと移動する。理由は簡単。これからのことについてだ。

「ゼクト。アル。」

「ん？なんじゃラカン達はいいのか？」

「ええ…。貴方もお酒好きでしょうに。」

「まあそうんだけど、本格的に酔っちまう前にちよつと相談ごとがあつてな。」

「ふむ。では聞こう」

そう言つて飲もうとしていた酒をテーブルに置くと聞く体勢をとつてくれた。

「それで相談とは一体なんですか？」

「うん。二人に相談つて言うかお願いごとなんだが、今度”然”の修行付き合ってくれないかな。」

「ほっ。」

「これはこれは、なんと面白そうですね。」

俺がそう言つと、二人は興味津々といった感じで俺の顔を見てくる。

「じゃが”然”はワシらも初めて見る魔法じゃ。うまくアドバイスなんかできんぞ？」

「それなんだけど、”然”を成功させてからいろいろわかった事があるんだ。アレは確かに俺しか出来ない魔法だと思うけど、でも魔法は魔法なんだよ。根本的なことは何一つ変わってない」

「ふむ。つまりは私達に魔法を教えて欲しいと？」

「そうだね。まあ今までもちよくちよく教えてもらつたけど今度は詠唱とかじゃなくてもつと根本的で基本的な事を教えて欲しいんだ。」

「根本的で基本的となると…魔法とは何かとかそういう話になるのかの？」

「んー哲学的なものじゃないんだよな。なんていうかどうやって魔法を発動させているのかとか的確なイメージの仕方とかかな。そこから俺曖昧なんだよね。」

「ああ。言いたいことは大体分かりましたよ。タケルは今まで感覚的にやっていた魔法に明確な芯みたいなのがほしいという事ですね？」

「そうなんだよね。今のままだと”然”をうまく扱えない。感覚的にやっているとどうしても曖昧な部分が出来て制御しきれないんだ。」

「なるほどのう。それならワシらでもアドバイスできるの。分かった明日からでも修行に付き合おう」

「ええ。ただ対価と言ってはなんなんですけど”然”についていろいろ話が聞きたいですね。」

「別にかまわないけど話せる事なんて少ないぞ？」

「別にいいですよ。」

「分かった。それじゃよろしくたのむ」

こうして俺はゼクトとアルに魔法を教えてもらえる事になった。

使ってみてわかった事だけど、”然”はかなりインテリな魔法だと思う。すべての割合を均等にしないと発動できないし、発動できても効率よく使わないと戦闘では危なっかしくて使う事なんか出来ない。更にはその反動が大きすぎるからそれも何とかしないといけない。

こう考えるとこの魔法はデメリットが多すぎるな。まあそれを超えるくらいのメリットがあるのも事実。

早く使いこなせるようにならないとな。

「お？タケルなにそっちで難しそうな話をしてんだよ。ちょっとこっちに来てくれ。」

いつの間にか近くにナギが来ており無理やりラカン達がいる所に連れて行こうとする。

「ちよっ！まだ俺アル達と話してんだけど？」

そう言うては見たけど、ナギはそれをまるで聞いていないかのよう
に無視をして腕を掴んでラカン達の方へ引きずっていった。

ナギに引きずられてラカン達の所に言ってみるとそこには酒を飲んで
テンションが高かったはずなのに静かになっていて皆こっちを見
てくる。

「…で？一体なんのようなの？」

「すまないな武。実は今日から入ることになったガトウの力試しを
しようって話しになったんだよ。」

「はっ？一体どうやったらそんな話に…いやいやまあそれはいいと
しても、何でそれで俺が呼ばれるわけ？」

「いやな。どうせなら俺様が戦いたかったんだけどよ。なんかタカ
ミチの奴がタケルが戦っている所を生で見たいとか言い出してな。
それならタケルにやってもらおうって話になったわけだ。」

タカミチ…なんて事を言ってくれたんだ。俺を慕ってくれるのはう
れしいんだが、そんな事言ってくれるなよ。おかげで”然”の修行
に集中できねーじゃねーか。しかもまだ俺完全に直ったわけじゃな
いんだけど？

「いーやーそれは無理じゃないかな？第一まだ俺はまだ完全に治っ
てないし、それに時間ないだろ？これからもっと俺達コキ使われる
事決定しているだろうし。俺も修行したいし」

こう言つとけば大丈夫だろ。ただでさえ修行に集中しないといけな
いし、何より戦いたくない。ガトウが使う技は知ってる。アレは正
直相性が悪いんだよ。銃闘技は全距離対応型だけど、それでもやっ

ぱり得意な距離は決まってる。近・中距離だ。だけどガトウが使う”居合い拳”は中・遠距離を得意としてて、しかも呼び動作無し、気配も感じにくい。おまけに連射が出来る。こんな相手とどう戦えと？どう考えても俺が被弾覚悟で突っ込むしか方法の無い未来しか見えない。

だから嫌だ。

そんな事を考えていると、今度はナギが会話に入ってくる。

「そう言っなよ。さっき龍牙から聞いたけど、お前魔法球持ってるんだって？だったらそこに入ってやればいいじゃねーか。」

龍牙キサマなんてことを！！

俺は龍牙を睨みつけると、器用に前足を重ねて俺に謝ってくる。
はあ…つまり俺に逃げ場はなくなっただって事なのかな？

「う…確かにもってるけど。………わかったよ。ガトウと戦うそれでいいんだろ？はあ…」

「そこまで嫌がられると俺としてもあまりいい気分じゃないんだがな。」

「いや…。ガトウは悪くないし、別に本気で嫌がつてる訳でもないんだよ。ただちよっと集中したい事があってね。正直魔法球で修行するのは反則だと思ってるし、なにより…」

そう言ってラカンとナギの方をチラッと見る。

「しかし、まさかタケルが魔法球持ってたなんてな。でもこれですべてもお前たちと本気でケンカができるぜ！」

「ホントだよな。俺様達がマジでケンカするとなると場所が限られるし、今の状況じゃ怪我なんてできねーからな。タケルの魔法球があれば場所も時間も確保できたも当然だぜ。」

ああ、やっぱりそのつもりなのね。

そうなるだろうと分かってたけど、それでも泣きそうだ。

誰がその後を修復すると思ってたんだ。

そう思ってたため息を吐くと、ガトウが何かを察してくれたようで、凄く申し訳無さそうな目をして肩を叩いてくれる。

「…悪かった。修復の手伝いは出来ないが、いつでも相談や愚痴に付き合ってやる。…タバコ吸うか？」

更に詠春さんまでこっちに来てガトウと同じく肩に手を置いて同情するような目で見てくる。

「私も付き合うよ。あのバカ達が無茶しないように私が見張っておく。だから…その……すまない。」

ガトウと詠春さんの優しさが今は痛いです。

こうして俺はガトウと戦う事になり、しかもナギとラカンに魔法球のことが知られてしまい、疲れているのに後処理することが決定した。

ああ…これが背中がすすけている感じなのか。それとも真っ白に燃え尽きた状況か？

とにかくそんな気持ちを始めて味わったけど……これ絶望って奴なんじゃね？

「あ…あの？龍牙さん。僕何か悪い事いましたか？」

「そうやな…悪いっちゃ悪いこと言ったかも知れんけど、多分一番はワイやろうな。」

「そうですか…」

「まあそんな気にせんでええで？なんだかんだ言ってもタケやんは優しいから許してくれるわ。だけど…」

「だけど？」

「タケやんの機嫌取りしよか？タケやんの未来を労わる意味も込めて」

「そんなんでいいんですか？」

「わからん。でもしんよりましやろ？」

「そうですね…」

く我拳は銃なりて・終く

小話1：音速の拳とその弟子。（後書き）

今回はいかがだったでしょうか？

書くことが多くてうまくまとめられていたか心配です。

あと一話小話が続くと思います。

次回はガトウVSタケルとなります。

居合い拳との差別化。大変ですが頑張ります。

それと以前皆様にアンケートをとりましたが、それももう少しだけ延長します。

期限は明後日までです。

それではまた次回お会いしましょう。

小話2：戦い…そして決意（前書き）

遅くなりました。

やっと自分の花粉症の季節が終り体調が戻ってきました。
ともかく小話2。楽しんでもらえればうれしいです。

小話2：戦い…そして決意

あの飲み会より一日がたち、俺は影にしまっておいた魔法球を取り出し皆を招待した。

俺が影魔法を使えることを知らなかったらしく驚いてはいたが、ゼクトやアルなんかは何処か納得していた。

「闇の魔法を扱える。つまりは闇の素養を持っているということじゃ。ならばコレくらいは出来て不思議ではない、むしろ当然じゃろ」

「ええ。それにこの魔法は便利ですからね。もっと修練すれば影を自由に行き来できますし、そうじゃなくてもモノを保管するには最適。せつかく素養があるのですから覚えられない方が損というものですよ。」

だそうだ。

実際荷物の保管場所にいろいろ考えなくてすむのでこの魔法は重宝している。

他にも錬金の素材とかも入れてあり一度整理しないといけないだろう。

さてそんな感じで皆魔法球の中に入ったのだが、まず誰よりもはしやいだのが意外な事に詠春さんだった。

「これはいいなあ。すごい癒されるよ。日本の風景そのままだ。別に魔法世界が嫌いなわけじゃないけど、やっぱり生まれ育った景色が一番落ち着く。ここにはちよくちよく邪魔させてもらいたいね。」

そう言ってそこら辺を散策し始めた。

俺の魔法球の中は純和風の世界となっており、少し大きな武家屋敷に竹林。近くには滝と川が流れている。遠くには山や海があるのだが、かなりの距離があるため家の近くに作った魔方陣を利用して移動できる。

魔方陣は全部で3つ。

一つ目は険しい山と崖がある場所。

二つ目は海の砂浜。

三つ目は年中雪が積もっている山の中腹。

どれも修行と癒しを目的として俺の想像で作ったものだ。

時間が出来たらもう一つぐらい増やそうかなとも考えてる。

あくまで時間が出来たらの話なのだが…。

それはともかくまず皆を武家屋敷に呼んでお茶をだす。

そしてこれからのことについて話した。

「さて招待したけどまずこれからどうしようか？」

「そんなの決まってるじゃねーかタケルとガトウが戦うんだろ？」

「はあ…ナギよ。タケルはまだ完全に調子はもどっておらん。そんな状態で戦わせるのか？」

「う…じゃあどうすればいいんだよ。」

「そうですね…。ここは魔法球の中ですからそこまで時間を気にする必要は無いでしょう。まずは全員日ごろの疲れをとったり各々好きな事をして潰してタケルの体調が完全に戻ったら勝負をしたらどうですか？」

「俺はそれがかまわんよ。正直最近働きづめでまともに休んでも無かったし、それにタカミチの修行を見てやりたいしな」

「師匠…ありがとうございます。」

「私もそれが良いと思う。これからどんどん戦争が激しくなってくるだろうし、まともに休めるのも今のうちだけだ。」

「そりゃそうかもしれないな。だが詠春よ。休みたければタケルに魔法球出してもらえればいいんじゃないか？」

「それは難しいだろ。今は外にある魔法球の周りに強力な結界や障壁。更には認識障害の魔法をかけて隠している状態だ。今は比較的安全な場所でもコレだけ警戒してるんだ。他の場所だとコレだけではすまないだろう。戦争中には使えないよ。」

「そうやでラカン。コレは無いものとして考えた方がええ。それにこの中は外の世界より時間が早く進む。つまりや…外の世界より何倍も歳をとることになるんじゃないか？ワイはかまわんけど、嫌やろ？」

「さすがに歳はとりたくねーな。」

まあ歳については魔法具をつくれれば心配は無いんだけど、それは言わないでおこう。今の状態で魔法具なんか渡したら絶対にここに入り浸るだろうから。

「じゃさっきアルが言ったようにしよう。それでタケルは何時ごろ全快するんだ？」

「んー正直俺にもわかんないけど、そこまで時間掛からないと思うよ？」

「ふむ。ワシもその意見に同感じゃ。もう肉体的には問題ない。後は魔力と気が戻ればいいだけじゃ。そうじゃのう……あと2、3日といった所か」

「うし！じゃ3日後ガトウとタケルが戦ってその時に出来た傷次第で外に帰る時期を決めることにするか。」

「ええ。ちなみに時間差はどれくらいなのですか？」

「今はあつちの一時間がこっちの二日だね。コレは設定をいろいろ変えることができるよ」

「わかりました。やっぱり便利なものですね。魔法球とは……」

「じゃ。皆解散！！」

最後にナギがそうしめて解散する事になった。

早速ナギとラカンは探検してくるとか言って別の場所へ行き、ガトウとタカミチは竹林の中で修行をするらしい。

詠春はしばらくはここでボーっとして、その後滝に打たれてくるらしい。

そして俺はと言うと、アルとゼクトに早速魔法について教えてもらうことにした。

龍ちゃんもどうやら一緒に聞けらしい。

さすがに魔法は使わないけど座学だって立派な修行。

久しぶりに学生時代に戻った感じがして何処か懐かしい感じがした。

.....

・

そして約束の日がやってきた。

武家屋敷から少し歩いて、滝がある所で武とガトウは対峙していた。ここは少し場が開けていて仕合したり、鍛錬するのには丁度よく、武もよくここを利用していた。

そして武達から少し離れた所ではおなじみのメンバーがそろっており試合が始まるのを今か、今かと心待ちにしていた。

「待たせてごめん。」

「いやいや。こっちこそ無理をいってすまない。それに疲れた体も休めだし、タカミチの修行も見れたからとても有意義な時間だったよ。」

「それならよかった。……じゃはじめようか」

「ああ」

そう言つて二人はお互いに構えあう。

くしくもその構えは似ており、唯一違う所といえばポケットに手を入れているかいはいかぐらいである。

「なあ詠春。ガトウの構え……っていうかポケットに手を入れてて大丈夫なのか？」

「私に聞かれても困るぞナギ。だが……ふむ。わざわざポケットに手を入れているのだからそれなりに理由があるのだろうが……ちよつと予想がつかないな。」

ガトウの独特の構えに皆困惑しているが、弟子であるタカミチは当

然その理由をしっており内心ほくそえむ。皆がどんな反応をするのか楽しみで仕方が無いといった感じだった。

「……こないんですか？」

「君こそ向かってこないのかい？」

「まあ…攻めても良いんだけど。ここはガトウさんの為の戦いだろ？だから先手は譲りますよ」

「俺より歳は低いくせにいうねえ…。でもお言葉に甘えさせてもらうか。」

ガトウがそう言った瞬間、武とガトウの間の空間から”パンッ”という音が聞こえ空気が弾ける。

「……これはすげえぜ。…タケルに譲るんじゃないかな。」

「ラカンは見えたんか！？ワイにはガトウの手がブレたようにしか見えなかったんやけど？」

「ワシもじゃ。」

「魔力を感じなかったので魔法じゃないと思いますが…なんででしょうか？」

「ガトウはポケットから高速で手を出しただけだ。まあ多分気かなんかで強化してるんだろうが、俺様でもかなり神経を使っていと視覚できない速度とは驚いたぜ。」

「なるほど。居合いか…」

「へっ…なるほどあの構えはダテじゃねーって事か。」

そう言つて”紅き翼”は口々にガトウをほめる。そんな中タカミチ一人が今の出来事に啞然としており、そして我に返ると慌てて叫ぶ。

「いや…いやいやいや。確かに師匠はすごいのは知ってますけど。何で皆タケルさんには驚かないんですか！？あの師匠の居合い拳をを初見で防いだんですよ？」

それを聞いて皆タカミチに”何言ってるんだ？”って顔をしながら顔を向ける。

「へえ…居合い拳って言うのか。まあ確かに驚いた事は驚いたけどよ。タケルが防いだ事については別に驚くほどでもないぜ？」

「ええそうですね。なにせ彼もまたやり方は違いますが同じ様な事ができますから。なら防げるのも納得できますよ。」

そう言つて再び戦っている二人に顔を向ける。

それを聞いてタカミチは自分の常識が崩れる音が聞こえるような気がした。

そしてとにかく二人の戦いを見ようと必死になって目を凝らし始める。

高速の戦いを少しでもこの目で追える様に。

「…これは驚いたな。まさか初めてで反応できるなんてね。」

「まあ俺も同じ様なことが出来ますし。でもまだ本気じゃないんで

しょ？」

「…なるほど。やはりあの噂は嘘じゃないってことか。…これは俺も様子見とは言ってられないな。」

そうガトウが言うと気を引き締めなおす。

一方タケルの方といえば、口ではあんな軽口を言っては見たものの内心では心臓をドキドキ鳴らしまくっていた。

（は〜なんとか反応できてよかったよ。にしてもなんて速さなんだよ。クイック・ドロウでできなかったら絶対あたってたよ。しかもやつぱり分かりづらい。今は様子見で速さ抑えてたんだろっし、今度はもつと隙なんてなくなるんだろっな。となると…やっぱりアレしかないか。）

「フツ!!」

ガトウが息を短く吐くと、今度は様子見なんかじゃなく本気の居合い拳が武に向かって放たれる。

しかも複数。

それに対しタケルがとった行動は両方でクイック・ドロウをし弾幕をはる事だった。

”下手な鉄砲数うちやあたる”

ということわざもある通り、見えないのなら自分の前に弾幕を張ることで防げばいい。

しかしコレは銃闘技を使える武だからこそ出来る防ぎ方であり、しかも重大な欠点があった。

「攻撃ができない……ですか？」

「ああ。タケやんのあの攻撃はあくまで迎撃専用。言ってみれば近距離でしか攻撃できへんのや、でもガトウの居合い拳は中・遠距離の攻撃や。このままやったらジリ貧になるやろうな。」

「たしかにな。…だがタケルもそれ分かってるだろうし、なによりこんなんで終わるわけがねーだろうがな。」

ラカンがそうやって話をしめると、またジツとタケル達を見る。

タカミチもそれに習ってジツと見つめる。タカミチにはもう殆ど攻撃など見えていないのだが、それでも一生懸命に見続ける。どうすればあそこまで強くなれるのかを考えながら…

パパパパパパッ！

乾いた音が響きわたる。

お互いに大して移動しておらず、はたから見ればそこに立っているだけに見えるだろう。

しかし熟練者から見ればその光景は息をもつかせぬ攻防戦である。そんな中タケルはこれからどうするか考えていた。

（このままじゃダメだな。何かきつかけがほしい所だけど…相手のミスをまってもたぶん無理だしな。ここはやっぱり突っ込むしかないのか。…でもなあ、痛そうだよな。はあ…仕方が無い。）

「ガトウさんそろそろ疲れてきたんじゃない？」

「フツまだまだ大丈夫さ。それよりもタケルこそどうなんだ？ いい加減腕が上がらなくなってきただろ？」

「まさか。まだいけますよ。」

「そうかい。ならそろそろ噂の実力をみせてほしいな？こんなもんじゃないんだろ？」

「あらら。同じ事言われたか…。ならしょうがない。ビックリしないでください…。ね！！」

そう言った瞬間タケルの姿がぶれてそしてその場からいなくなる。ナギ達はそれを見てニヤリとわらいタケルの行方を追う。

タカミチはすでに見失ってしまった。

タケルの目の前のガトウといえば、一瞬目を見開いたがすぐさま姿勢を整え何もない空間に居合い拳を放つ。

二三発放ったところで、ガトウはハツとした顔になったかと思うと、急いでその場から下がる。

するとその場に大きなクレーターが出来、その中心にはタケルの姿があった。

「アレ？結構うまくいったと思ったんだけど…はずしたか。」

そう言つて首を捻る。

「その歳でたいしたものだ。まさかここまで完成度の高い瞬動を見れるなんて思わなかった。」

「よく言うよ。すぐに俺の姿見つけられたくせに。しかも攻撃まで当ててくるしさ…」

「まあそれくらいはやらないとな。だが…それ以上に驚いたのはその拳の威力さ。まさか当てに来た拳がここまですごいなんて…。自信が無くなる。」

「それなら奥の手見せればいいじゃないですか。まだあるんじゃない？」

「観察眼まで一流か…。分かったそうさせてもらおう」

ガトウは武の言葉を聞いて顔をニヤリとするとその場から少し下がりフウと短く息を吐く。

「右手に魔力」、左手に氣”……合成!!」

「感卦法か…。（原作知っているから分かってたけど…すごいな。俺が使う感卦法なんかよりずっとうまく使えている。年季ってやつなんだろうな。）ならば、こっちも…”右手に魔力”、左手に氣”……合成!!」

ガトウが感卦法を使うと、武もそれに習うかのように感卦法を発動させる。それを見たガトウは驚くがすぐに氣を取り直してタケルを睨みつける。

「まさか感卦法まで出来るとはな。…コレでも究極闘法とか呼ばれていて身につけるのはかなり難しいはずなんだが…」

「ガトウさんの感卦法に比べるとまだまだ粗が目立ちますけどね。じゃ行きますよ!!」

そう言ってガトウに向かって突進する武。ガトウはそれを見て適度に距離を取ろうとバックステップをして迎撃できる態勢をとる。

「豪殺居合い拳”!!」

ガトウからまるでレーザーのような一発が飛んでくると武はそれをよけずに真正面から撃ち砕く。

「リボルバーマグナム」！！」

体を回転させながら三発当てて、やっと相殺するとその勢いのままガトウの懷に飛び込む。ガトウもそう簡単に入れさせないと居合い拳を放ってくるが、体を回転させながら懷に入ってくるためなかなか良い所に当てる事が出来ず、そのまま懷に入れてしまう。

「くっ！！」

「残り三発！まとめてくらえええ！！」

ガアン！ガアン！ガアン！

金属音のような音が響き渡ると、二人はさっきまでいた場所から少しはなれて対峙しており方膝を付いていた。

「えっ！いったい何がどうなったんですか！？」

何があつたかまったく見えなかったタカミチが近くにいたほかの人に聞く。

「二人ともさすがだな…。いいかいタカミチ？さきほどの大きな居合い拳をタケルが相殺し、その勢いのままガトウの懷に飛び込んだ。…ここまではいいかい？」

詠春がそう言っているとタカミチは黙って頷く。

「その後タケルはガトウに対して攻撃を仕掛けようとしたんだが、ガトウは更にタケルに接近してその攻撃を潰そうとしたんだ。しかも気を込めた拳のおまけつきでね。タケルもガトウの考えが読めたんだろ、すぐさま拳ではなく肘の攻撃に変えてそれを迎え撃った。結果急所には当たらなかったけどタケルの攻撃はガトウに三発あたり、タケルの方もガトウの気の込めた拳をまともにくらってそのまま距離を取ったんだよ。…わかったかな？」

そう詠春には説明されタカミチは愕然とした。

（あんな一瞬でこんな攻防があつたなんて…僕もいつか師匠のように戦ってみたいと思つていたけど今の僕じゃ師匠の背中さえ拝ませてもらえない。ましてや才能なんてない僕なんて…）

そんな事考えながら顔を下に向けていると横にいた龍牙がタカミチの気持ちに気がついてか声をかける。

「タカミチ。大体何考えとるんかは想像できるけどな、勘違いしたらあかんよ？」

「えっ？」

「確かにタケヤンもガトウも強い。でもそれは今まで血のにじむような鍛錬をしてきたからや。それはここにいる皆かてそうやで？確かに才能ちゅーもんはあるやろうけど、そんなもん戦いの場では絶対的な有利になんかならし、役に立つかも微妙な所や。なあ詠春はん？」

「そうだね。才能っていうものは言ってみれば人よりも早くうまく

なれるだけだからね。それイコール強さとは何の関係も無い。むしろ遠回りした人の方が強くなる場合だってある。そもそも武術と言うのは”努力が才能を陵駕するためにつくられたモノ”と言う言葉は誰が言ったのか忘れたけど、私はその通りだと思うよ？100の努力で勝てなければ100の努力をすればいい。簡単な事だよ。」

「10でなければ100の努力…」

「それにな。タケやんの強さを才能って言う言葉だけで片付けられるのは許せんよ。ワイはタケやんといっしょにおったから分かるけど、毎回ぶっ倒れるまで鍛錬してやっとあそこまでの強さを手に入れたんや。確かに魔法球はつこうたけど結局はやらんければ意味は無い。それをやり続けた努力は決して才能なんかやない。タカミチはまだそこまでやってないやろ？」

龍牙の言葉は深くタカミチに突き刺さる。

今までの自分は、ちっとも上達しない事に対して才能が無いからと決め付けていたのではないか？

たとえ無いとしても勝手に自分で限界を決めて倒れるまで努力をしたことがあるだろうか？

そう考えた瞬間タカミチは今まで自分がやってきた事を恥じる。

そしてあまりにも情けなさに涙があふれてくる。

「タカミチ。君はまだ若い。…いや若すぎるといつてもいいだろう。これからいくらでも取り戻せるさ。でも今流している悔し涙は忘れないようにね。それさえ忘れなければきっと君は強くなれるよ。」

「…あゝい」

「ま、今はタケやん達の戦いをしっかり見ることやな。お？そろそ

「動きそうじゃ？」

龍牙の言葉にごしごしと乱暴に涙を拭くと武たちの戦いをジッと見つめる。

その目はいつかあの場所に立ちたいという戦う男の目をしていた。

「なんか隣でとても青臭いことやってますが…フツッ嫌いじゃないですよそういうの」

「俺様もだな。漢は悔し涙の数だけ強くなるってかあ？」

「お？ ラカンにしてはいい事いうじゃねえか。まっ俺様にはカンケ
ーねーけどな。」

「はあ……ナギの馬鹿は少しぐらいタカミチを見習つて欲しいのう。」

[illegible]

ナギたちがそんな事を言っている中、ガトウと武は互いに方膝を付
きながらこれからのことについて考えていた。

（何とか急所は外れているけど、それでもこの威力か……。まったく恐れ入るよ。 ”銃神” とはよくいったものだ。まさに銃弾の拳。いや食らったのは肘か……。それにまだタケルは手の内をすべて見せてい

ない。もし”炎帝”の異名とされる技なんて使われたら…考えただけで嫌になるな。)

表情に出す事はけしてしないが、内心冷や汗びっしよりのガトウ。しかしタケルもそれは同じだった。

(普通あんな場面でそんな事考え付くか!? やっぱり経験の差つてやつなんだろうけど…しかも正確性だけで言ったらたぶんここにいる誰よりも上だろうな。きつちりとダメージが残る場所へ当ててきやがった。こっちは全弾撃った反動が来て頭がくらくらしてるって言つのに…はあ。どうしよか)

そうして二人してにらみ合いながら考えていると、お互い考えている事が一緒なのが分かったのか。ニヤリと笑い合ってその場で立ち上がる。

「ガトウさん。たぶん考えている事は一緒だと思いますけど、そろそろ感卦法もきれますし最後の一発になりますかね?」

「そうだな。年寄りにはそろそろきつくなってきたから終わらせた所だ。」

……………それじゃいくか!!

二人が同時にそう言葉を発するとガトウは突撃しながら、片手で普通の居合い拳を出しながら牽制をする。対する武は右腕をハンマーコックし、それを可能な限りよけながらガトウに接近して行く。そしてガトウは武を十分に引き付けると、残っていた力をすべて使っていない右手に集中し先ほどよりも特大な居合い拳を撃つ。

武はそれを見て相殺するのは無理と判断し体を捻りながらそれを交わそうとした。

しかし、特大の”豪殺居合い拳”の前では避けきれず体をかすってしまう。

かすただけでもその威力は絶大で後ろに吹っ飛ばされそうになるが、それを体を回転させる事で何とかやり過ごしガトウの懐に入った。

「これは…俺の負けだな。」

「いつけえええ！！44マグナム！！」

ガコオオオオン！！

大きい音が当たりに響き渡り、他の人達は勝負がついたと思い二人によっていく。

するとそこには背中にマグナムがあたった証拠の弾痕が残っているガトウと、倒れそうなガトウを抱えている武の姿があった。

「この勝負タケルの勝ちだな。」

そうナギがしめるとタケルはその場でしりもちをついて肩で息をきる。

「何とか勝てた…ガトウさん強いわ。」

「おいおい…お前にはまだ”炎帝”があるのに何とかって…」

近くに寄ってきたラカンが呆れた顔をしながら話しかけて来る。そのそばでは詠春がガトウの状態を確認している。

「ラカン。”炎帝”出した所で変わらないさ。魔力を使うか気を使うかの違いでしかないし、それに単純な能力アップじゃ感卦法の方がいいんだぞ？」

「まあそうじゃろうな。確かに魔法を取り込むことによるほぼ無敵状態になるのは魅力じゃが、単純な力でいったら感卦法の方が上じや。何せ魔法と氣の融合じゃからな。」

「そんなもんか？なら何で戦闘で感卦法をあまり使わないんだ？」

ラカンの当然ともいえる質問にアルが答える。

「簡単な事ですよラカン。タケルが使う銃闘技は相手を行動不能に出来ますが、あくまで肉弾戦。個人との戦闘に適していますが、集団にはむかない。たとえ強化してもです。だけど”炎帝”など”闇の魔法”は魔法が付加されることで広範囲にわたって攻撃ができるんですよ。例えば炎とかね。」

「なるほど。なっとくだぜ。じゃあ何で俺様と戦う時はそれを使っただ？」

「あの時はまだろくに感卦法も使えていなかったし、”炎帝”がどれほど使えるか試したかったんだよ。」

「へー」

「ま、そういうこっちゃ。それで詠春はん。ガトウはどないや？」

「ふむ。まあ2〜3日安静と言ったところだろう。命に別状はない

さ。」

詠春の言葉にタカミチがほつと息を吐く。そしてしばらくガトウを見ていたと思うとキッ！つと表情を引き締めて武の前まで来る。

「武さんお願いがあります！！」

「へっ！？お…おう。何？」

「僕に銃闘技を教えてください！」

「……………マジで言ってる？」

タカミチの突然のお願いにあっけにとられる武。

ナギたちも同じようにあっけにとられている。

あ、でもラカンは何故かニヤニヤしてる。…ちよとっつとっしいな。

「マジです！」

「何でまた？銃闘技なんかよりラカンからもっと実践的なこと教わったほうがためになると思うぞ？」

「俺に教わりたのなら金を用意しな（キラッ）」

「ラカン空気よめや。」

ラカンの言葉に皆あっけにとられていると近くにいた龍牙がラカンの言葉に龍牙が突っ込みを入れる。

「……………まあラカンは後からシバくとして、そうじゃなくてもガトウ

さんからいろいろ教わってるんだろ？それじゃだめなのか？」

「いえダメじゃないです。でも僕は銃闘技を学びたい。…憧れなんです。最初は才能がないから無理だと勝手に自分であきらめてました。でも龍牙さんや詠春さんにいろいろ言われて決めたんです。憧れを憧れで済ますんじゃないくて、自分の物にするって。…だからお願いします。」

そう言つて土下座をしながらお願いをするタカミチ。

その姿を見て武はしばらく目をつぶつて考えるとタカミチに向かって問いかける。

「タカミチ…。銃闘技を覚えたいという熱意は伝わった。けどそれは生半可な鍛錬じゃすまないぞ？」

「覚悟してます。僕には才能なんてたぶん無いけど、努力すれば身に付けられないものなんてないですから！」

「……………わかった。教えるよ。」

「……！ホントですか？」

「ただし！！ガトウとの鍛錬もしつかりやる事が条件だ。…いいか？あくまで俺が教えられるのは銃闘技の基礎だけだ。今使っている銃闘技はその基礎の上に俺が使えるものと組み合わせでつくりあげたまったくの別物。それは俺にしか使えないものでもある。それを見に付ける事は不可能だろう。」

武がそう言つとタカミチは泣きそうな顔になる。

憧れである銃闘技は自分には使えないといわれているのだから当然

だろう。

しかし、武が言った次の一言でその顔は一変した。

「何泣きそんな顔してんだよ。言っただろ？あくまで俺が使っているものは…だ。だからお前はお前だけの銃闘技を作り上げてみる。ガトウとの鍛錬をしつかりやるって言うのもそれが理由だ。ガトウの技と銃闘技を組み合わせる事で、俺にも出来ない銃闘技が生まれるだろ？それが出来るのはお前だけだ。基礎は俺が叩き込んでやる。そこには銃闘技のすべてがある。それじゃ不満か？」

その言葉にタカミチは一生懸命首を横にふる。

「よし。…まず特別な筋トレとかが必要だけどそれはまあ明日からでもいい。でもその前に一つ課題を出したいと思う。」

「課題…ですか？」

「そうだ。課題といってもすぐに答えられるものじゃないけどな。銃闘技…いや戦うという事に対してとても大切な事だ。…タカミチお前はその拳に何を込めて戦う？」

「何を込めて…」

「そうだ。覚悟…信念といってもいいか。それをしつかりと持っている限り銃闘技は完全には扱えない。なぜならそこが銃闘技の強さの源だからだ。何のために戦い。何のために拳を振るのか…それを考える事だ。これは多分すぐには見つからないだろうからとにかく考え続ける。いろんなものを見ていろんな人の考えを聞いて考え続ける。その答えはいつか俺達に迫るぐらいまで強くなった時に聞くからな。ちゃんと覚えておけよ？」

「はい！」

こうしてガトウと武の勝負は幕を下ろした。

その勝負を見て自分の進むべき道を見つけたタカミチ。

ひよっとしたらタカミチにそれを教えるために二人は戦ったのかも知れない。

ただ言えることが一つだけある。

それはここにまた一人英雄の卵が生まれた

ただそれだけである。

小話2：戦い…そして決意（後書き）

次回からはまた本編へと戻ります。

ここからは結構早足になるのかあ…原作もそう深く書いているわけじゃないし…。

あゝはやくエヴァとか出したい。

次回も楽しみにしててください。

第十話：発覚・思い・出会い（前書き）

お疲れ様です。

小話も終りまた本編へと戻ります。

今回はいろいろと動きます。

中にはえゝゝゝとか思う場面があるかもしれませんが、そこは大目に見てください。

ではどうぞ！

第十話：発覚・思い・出会い

ガトウとの戦いの後、俺達は魔法球の中で一週間ほど休み、外へと出る事になった。

魔法球の中で一週間と言うことはまだ現実の世界では一日も経過していない。

皆その事にとっても驚き、改めて魔法球の便利さ…と言うよりもチートさに呆れたようだった。

ちなみにタカミチの修行についてだが、あの後目が覚めたガトウにも事情を説明した所

「そうか…。二つとも疎かにしないのであれば俺からは何も言う事はない。…頑張れよ」

と言われ、タカミチは感極まったのかガトウに抱きついて泣いていた。

それからはガトウが一日修行をつけ、次の日は俺が修行をつける。

一日休息と自修練の日を挟んでまたガトウの修行…といったサイクルで鍛錬が続けている。

かなり大変そうなのだが、タカミチは何処か嬉しそうに鍛錬をしていた。

きつと目指すものがしつかりと見定まったのかも知れない。

これからのタカミチに乞うご期待といった所だろう。

さて話は最初に戻るが、魔法球の外に出た俺達はガトウがいろいろ調べてくるといってその場から立ち去った後、皆思い思いに過ごしていた。

といってもナギやラカンは探索に出かけたり騒いだりといつもと変

わらない日々をすごし、他の面子といえば、タカミチは修行。俺と龍ちゃんはアルたちに魔法の授業を受けていた。

たまにガトウが帰ってきたり連絡が来て戦場に出たりしたのだが、別段特にコレといった進展は無く、ただただ時間が過ぎていった。

そんなある日の事…ガトウが皆を集めて話したいことがあるというので、もうおなじみとなっている酒場でお酒を飲みながら集まっていた。

ちなみに酒場で話す理由は下手に隠れようとする逆と怪しまれる可能性があるから、普段から騒がしい所で話した方が安全だということらしい。

「皆集まってもらったのは他でもない。ちょっと緊急の話があつてな。」

「なんだよいきなり。何かあつたのか？」

「ナギの言う通りですね。いったいどうしたのです？」

「……実はこの戦争には裏があつたんだ。」

「そんなもの今更じやろ？政治やらなんやらいろんなことがあるのが普通じゃ。」

「いや…確かにいろいろ裏があるのは当たり前なんだが…これはそんな生易しい話なんかじゃない。」

「ガトウ回りくどい事言うのはよそうぜ？ぱぱって言ってくれや」

ラカンがそうちゃちゃを入れるとガトウは酒を一気に煽るとみんな

の目を見て話し出した。

「結論から言おう。この戦争はわざと引き起こされたものだ。しかも必要に戦争を長引かせて戦火を拡大させている。ある一つの組織によってな。」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「……ちよつとまでよ。じゃあ俺達は一体何のために戦ってたんだよ。平和を勝ち取るためじゃないのか!? 戦争を終わらせるために戦ってたんじゃないのかよ!!!!!!」

ドン!と机を叩き、ガトウの言葉にナギが反応する。

「そのはずだった。…だが実際は違っていた。帝国も連合もその組織の連中たちに言いように動かされて戦争を続けているだけだ。目的なんかは分かんが、トップ近くの連中までがその組織の一員らしい。」

ガトウの言葉に皆言葉が出なかった。

俺達”紅き翼”は戦争を早く終わらせるために精一杯戦ってきた。それはきつと両国の兵士達も同じだろう。皆先にある平和を目指して戦っていたはずだったのに、ガトウの一言でそれが無駄だったといわれているのと同じ聞こえた。

重い空気がメンバーの中に漂っている中、ガトウは話を続ける。

「とりあえずわかっている事は、そいつら組織の名前は”完全なる世界”というらしい。それ以外のことは現在調査中だ。そしてここからが本題なんだが…その組織を潰すためにそのためにあるお方が

力を貸して欲しいと要請をうけた。」

「確かにそれだけの事やれる組織なら並大抵のことでは齒が立たないだろうが…ガトウその人は信用できる人なんだろうな？」

「ああ。それは大丈夫だ。もともとあのお方がおかしいと感じて調べて気付いた事だからな…それでどうする？」

「きまつてるぜ。とりあえず今の状況じゃ俺達に選べる選択肢ないんで無いようなもんだ。だったらまずその人にあつてこれからのことを考えようじゃねーか。…むやみに戦争を長引かせようとしたやつら絶対に許してはおけねー!!」

『じゃな・だな・ですね・やな・』

「わかった。さすがに今日はもう遅いから明日逢うことにしよう。」

そうガトウがしめてこの場はお開きとなった。

その後、俺と龍ちゃんは部屋へと戻り明日の準備をすることにした。部屋に戻ると先ほどから黙って何かを考えていた龍ちゃんが、何処か真剣な顔をしてが話しかけてきた。

「タケやんどうしたんや？さっきの話を聞いている時からまったく喋らんようになったけど…」

「……いや別に何でもないよ」

「うそやな」

即答でそう返す龍ちゃんに少し驚きながらも動揺を見せないように

淡々と答える。

「うそって…なんでだよ。」

「簡単な事や。あんな話聞かされてタケやんが頭にきてないわけが無い。あの場でナギたちと同じように叫ぶぐらいは普段のタケやんならしとる。…何を考えとるんや？いや何かしつとるんか？」

「いや、あの組織のこと考えてただけだよ。」

「……タケやんワイは信用できんか？」

「いきなりなんだよ」

そう言つて龍ちゃんの顔を見るとそこには今まで見たことのないくらい悲痛な顔と、今にも泣き出しそうな目をした龍ちゃんがそこにいた。

「前々からおもつたんやけど、タケやんいろいろ隠し事しとるやろ？それはワイにも話せんことなんか？ワイはタケやんのパートナーやなかつたんか！？ワイか勝手におもつとっただけなんか！？」

「龍ちゃん…それは…」

「違うとでもいうんか？なら…なら…ワイに隠し事なんてやめてえな。タケやんがそこまで隠し取ることなんやかなりやばい事なんやと思う。でも…ワイはそれを一緒に悩みたい。タケやんはワイの一番の”親友”やからな。こんなこと言うの卑怯やとは思ふ。でもそれくらい心配なんや。タケやんが一人で無茶しそつで…」

いつの間にか龍ちゃんは泣いていた。大きな目にいっぱい涙を浮かべて…

龍ちゃんもきつといういろいろ考えてくれたんだと思う。それも自分の気持ちを押し殺して俺のことばかり…

「……………わかったよ。でもお願いだからこのことは誰にも言わないで欲しい。頼む。」

「もちろんや」

そして俺は俺自身の事をすべて龍ちゃんに話すのだった。

[illegible]

「…タケちゃん確認のために聞いとくけど…この話はホントのことな
んやな？」

「……信じれないのは無理ないけど……」

「アホ！ そうやない。……は？ タケやんのことやからかなりやばい事隠しとるとはおもったけど……コレは相当やな。」

⌈
⋮
⌋

「何おちこんどんねん。ワイは怒ってない。というよりもなんでもっとはよう聞かんかったかって自分にイラつくわ。」

⌈
^
?
⌋

「よう今まで我慢しとったな。えらいわ。…ほんまえらい。こんな事一人で抱え込むなんて…でも大丈夫やこれからはワイと一緒に背おつたる。ワイとタケさんは一心同体や」

その言葉に思わず龍ちゃんを抱え泣き出す俺。

誰にも言えなかった。言えるはずなかった…頭がおかしくなつたといわれても仕方が無い事。

でもやっと話せる相手が出来た。それが何よりもうれしい。

苦しかった。救えるすべがあるのに行動できない自分に…

悲しかった。知識を持っていたとしても守れなかった命に…

イラついた。力の無い自分に…

そんな気持ちを分かってくれているのか、龍ちゃんはただ俺に抱かれながら頬をこすりつけてくれていた。

「…泣き止んだか？」

「ああ、ありがとう。…はは。かつこ悪いところ見せたね」

「なんや今更。タケちゃんのかつこ悪いところなんていっぱいみとるつちゅーねん」

「ひどっ！！」

大げさにリアクションをとって二人で笑いあう。コレはきっと龍ちゃんの優しさなんだろう。

明るい雰囲気にしてジメジメした空気を払拭してくれた。

「はは。まあええ。…んでいろいろききたいんやけど、原作つちゅーたか？ともかくタケヤンは大体の事をしっとるって言うたな。」

「まあね。でも知っているとんでもこんな事が起こるとか、こんな人物がいるとか…詳しくまでは知らないし、それに本当にあっているのかも確証が無いよ。」

「どういうことや？」

「いまいち要領を得ないのか龍ちゃんが聞いてくる。」

「例えば、こんな事があると分かっているとしても、それが何時起こるとか、敵がどれだけ強いとかそんな事は分からないって事。実際に俺が知っているのでは俺も龍ちゃんもいないわけだし。知識として知ってても経験で知っているわけじゃないから意味無いんだよ。」

「ほ…つまり答えをしっとってもそれに辿り着くための道はしらんちゅー訳やな？」

「そういうこと。ラカンのことにしたってもそうなんだよ。ラカンと行動していけばナギたちにもあえるだろうし、この戦争の黒幕である”完全なる世界”にも関われるだろうって思ったからだし。」

「まあ実際は神からそういわれたんだけど、それ以外原作に介入する方法なんて思いつかなかったのも事実だ。」

「…役に立つのか立たんのか分からん知識やな」

「本当にその通りだと思うよ」

「でもや。その”完全なる世界”のアジトとかは知らんのか？どうせやったらそこを強襲すればすぐにでも戦争が終わると思うんやけど？」

「ん〜どうだろう。多分あそこで間違いないと思うんだけど…でも知ってても意味無いよ。大体今戦った所で勝ち目ないんでないもん。戦力が違いすぎるし…。原作でもいろいろ協力を取り付けて戦力を増強し、更にいろんな拠点を潰して相手の戦力を削っていったから勝てたんだと思うし…」

そこなんだよね。神がいうにはハッピーエンドを目指せば何やってもいいと言われているけど、実際そんなうまくいくわけじゃない。いくら俺たちが強くてもやっぱり数には勝てない。

どっかの弟も言ってたけど”戦いは数”なんだよね。はあ…

「そっか…ならしゃーないわな。しばらくは流れに身を任せんといかんというわけやな？」

「そうだね。それまでに助けられる命は極力助けたいし、あと黒幕の一員である爺たちの思い通りにはいかない様に手をうつ必要があるし…問題は山済みだよ。」

「めんどい…というか、なんというか。…にしてもその元老院っていったか？そいつらうざいな。」

「ああ。大体俺は悪とか正義とかどうでもいいんだよね。でも人の命をもてあそぶ奴等は大嫌いなんだよ！ぜってーひどい目見せてやる。」

「ワイも手伝うわ。というかワイにもやらせてや。人の権力争いとかワイは興味ないけど、自分の事に関係無い人を巻き込むのは許せんわ。」

「ありがと。……まあとりあえずは明日だね。」

「明日か…たしかどつかの姫に逢うんやつけ？」

「そ。ともかく明日に備えて寝よつか？」

「そうやな。」

そう言つて二人で寢床に言つて寝ることにした。

明日…

とうとう逢えるのか、ナギの嫁にしてウィスペルタティア王国の姫。

アリカ・アナルキア・エンテオフィシア殿下に…

はあ…どう考えても面倒な事になりそうだよ。

さてさて、龍ちゃんとの話も終り一夜明け、俺達は本国首都へと出向いていた。

まあ原作知っている身だとそこまで疑問を抱く事無いはずなんだけど、知らない人からしたらきつと疑問でいっぱいなんだろうな…
とそんな事を考えながら皆と一緒にまっていた。

ちなみに他の面子は何故こんな所に連れてこられたのか分からずあつけにとられているようだった。

しばらくして、こちらに向かつてくる人影を見つけ皆それに注目する。

そしてそれが誰だかわかると驚いたように声を上げる。

『マ、マクギル元老院議員！？』『…誰？』

…つてああこの人がマクギル元老院議員か。原作で名前くらいは聞いた事あつたけど、それぐらいにしか記憶に無い。顔なんてもちろん覚えていない。まあつまり印象が薄いつて事はそこまで必要な人物じゃないんだと思うけど…まあいちお顔と名前くらいは一致させておこう。

そんな事を考えている間も話は進んでいるようだった。

「いや…ワシちゃう。主賓はあのお方じゃ」

そんな事を言つて後ろについてきた人を紹介する。
さて…いよいよご対面か。

「ウイスペルタティア王国…アリカ姫」

「へへアレがいつとつたアリカ姫か…性格きつそうやけどべっぴんさんやな～そう思わんタケやん？…つてタケやん！？」

………はっ一瞬言葉を失つてた。

うわ～まさか見惚れるとは俺らしくねー！！！！

そりゃ確かに原作でもきれーだなーとかは思つてたけど現物見るとマジ綺麗だわ。

これはナギが一目ぼれするのも分かるわ。

「タケちゃん!!!!」

「!!!!ん?何龍ちゃん?」

「何やあらへんがな。どうしたんや?いきなりボーっとしてからに?」

「いや本物にあえたからちよつと感動してただけだよ。」

「……ふゝんまあええわ。ともかくそろそろ真面目に話し聞かんといかんのやないか?」

「わかってるよ。」

そう言つて俺は話し合いに参加する事にした。

そこで話し合われた事をまとめるところということらしい。

アリカ姫はなんでもこの戦争を止めるための調停役だったらしいのだが、いろいろ妨害や邪魔が入り、力及ばずダメだったらしい。それでも何とか成功させたいらしく俺たちを頼ってきたそうだ。

また”完全なる世界”についてもその妨害や邪魔をした相手を特定するためにいろいろ調べさせた所その組織が浮かび上がってきたという事だ。

そしてこれからが重要なのだが、現状組織の中心人物や構成、目的などがまったくいいほど分かっていないらしく、大手を振って行動する事が出来ないらしい。

なのでしばらくは本当に信頼できる人達だけでこの組織のことを調

べ、少しずつ事態を好転させて行くしかないという結論に至った。

まあ正直目的とか何とかは俺にはわかってるんだけど、言えないよな。元老院がやっている事を知ってるとしても名前まで知ってるわけじゃないし、知っているとしたらアルウェンクスぐらいしか覚えてないから意味ないし。

まああいつらがやってることはわかってるんだから、それを元にする調べればうまくいけば早くに証拠つかめるかも知れない。

まあ今俺にできる事といえばそれぐらいか…もどかしいな。

「…やるしかないか。」

「ん？どうしたんや？」

「いや…この状況を好転させるためにも今はやれる事をやらないとなと思っただけだよ。」

「せやな。まずはやれる事やろうや」

龍ちゃんと決意を新たにした所で話し合いは終了となった。

俺、龍ちゃん、ガトウ、アル、ゼクト、詠春などで情報集め、そして統括をして、他の面子はおもに護衛や戦闘をする事に決まった。さっそくアリカ姫はナギに罵倒を浴びせながらも顎で使っているっぽい。

まあコレは原作通りかな？

でもなんだろ？ナギとアリカ姫が話している所を見るとちょっとズキッとするんだけど…おかしいな？

原作とかでも綺麗だとは思っていても好きとは思ってなかったから、恋とは別だとは思っけど…

一体どうしたんだろう？

まあともかく今は情報集めが先か。

さあ気合入れて頑張ろうか！！

第十話：発覚・思い・出会い（後書き）

さていかがだったでしょうか？

実を言いますと、龍ちゃんに打ち明けるかどうかは最初から決めていました。

タケルをあくまで人として書きたかったのが理由です。

普通人がこんな目にあつたらいろいろな事に押しつぶされてしまうのではないかと？

そう思います。だからその悩みとかを打ち明けることが出来る人物をつくりたかったのです。（実際は人ではありませんが…）

なので龍ちゃんにその役目になつてもらいました。

男の同士の友情…これもまたいい作品の大事な要素だと私は思います！

次回も結構早めに投稿できると思います。

では次回また読んでくれる事を楽しみにしています。

第十一話：英雄↓反逆者（前書き）

お疲れ様です。

また早めに更新する事が出来ました。
今回はタイトルの通りです。

それではどうぞ

第十一話：英雄↓反逆者

アリカ姫との対談から数ヶ月が経とうとしていた。

その間俺たち”紅き翼”の面々は表立っては連合のために戦闘をおこなっていたが、裏では”完全なる世界”の情報を必死になつて集めていた。

こうしている間にも戦火は広がり、たくさんの命が奪われていく。そんな現実を見つめ今にも怒り狂いそうな気持ちをぐつと堪え今できることをしていく。

少しでも早くこの大戦が終わるように…そう願いながら。

そんなある日、俺達の元に有力な情報が入ったという報告を受け、それを聞いた俺達はガトウの元へと急いでいた。

そしてガトウが仕事をしている部屋へと入ると、そこには頭を抱えながら唸っているガトウがいた。

「ガトウ！有力な情報が見つかったと言うのはホントなのか？」

「ああ詠春。確かに奴等の真相に迫るファイルを見つけることには成功したんだが…」

「ガトウ。どうしたのですか？」

「いや…確かに情報のソースから言つてかなり信憑性の高い情報であることは間違いないんだがな…」

「……ガトウさん。はつきり言つたらいいんじゃないかな？一人で悩んでいても仕方がないことだと俺は思うんだけど…」

そう俺がガトウの後押しをする。

するとガトウはタバコに火をつけてふうつと煙を吐くと皆の顔を見て覚悟を決めたのか話し出す。

「…実はこの男にも”完全なる世界”との関与の疑いが出てきた。…信じたくないぐらいの大物だよ」

そう言つて一枚の写真を俺達に見せる。

そしてそこに映っている人物を見てみんな啞然とする。

「これは…」

「オイオイオイ…マジかよ」

「現執務官!？」

「……ちよつとまってや。たしかコイツは…」

「ああ。メガロメセンブリアのNo2さ」

やつと出てきたか。

俺はそう心の中で呟く。

まったくなかなか尻尾をつかませてもらえなかったから結構時間が掛かったけど、ようやく捕まえる事が出来た。さてここからが本番だな。

龍ちゃんも俺に視線を送りコクリと首を縦にふる。

どうやら龍ちゃんも同じ気持ちらしい…。

「ただ皆に言っておくが、確かに信憑性は高いが確証があるわけじゃない。だからここだけの話にしてくれ。」

「それはもちろんじゃが…。どうやってその証拠を掴むつもりじゃ？」

「……直接聞くしかないだろう。」

「直接聞くって…そんな簡単に口を開く訳ないだろうが。」

「まあ確かにな…だがこの情報を掴むだけでもかなりの時間を費やしたんだ。そんな悠長な時間はもう取れそうにない。それにやり方はあるさ…」

そう言つてニヤリと笑うガトウ。

まあそこら辺はガトウに任せるしかないだろうな。俺たちじゃうまく割らせる事なんて出来そうにないし…
そんな事を考えていると急に外から爆発音が鳴り響き一気に騒がしくなる。

ズズン！！！！

『！！！！？』

「なんだ！？」

「外から聞こえましたね…」

急いで窓へと向かい状況を確認する。
すると市街地の方で爆発があつたみたいだ。

「！！！！（思い出した。確かナギとアリカ姫が襲われるんだっけ！

「？）」

「くそっ！ここからじゃ何があったか分からない。武、龍牙一緒に来てくれるか？」

『わかった』

そう言っただけで俺達と詠春は部屋からでてその場へ直行する。

「俺たちはここで情報を集めてみる。…たしか今はナギ達も町に行っているはずだ。うまく協力をしてくれ！！」

後ろからガトウがそう告げると、俺達は後ろを振り返り頷き爆発があったであろう現場へと向かうのだった。

現場に着いた俺達がまず行った事はこの爆発でひどい怪我を負った人がいないか確認する事だった。

「武！そっちはどうだ？」

「こっちは特にひどい怪我をした人はいないみたいだ。そっちはどうですか？」

「こっちも大丈夫みたいだよ。…それにしても一体何があったんだ…」

そう言っただけで爆発の中心を見つめる詠春。

そこにはたぶん魔法で出来たであろう大きなクレーターが出来ていた。

その余波に当てられたのか近くの建物何かにも罅が入っており、かなり強い魔法を使った事が予想される。

「まさかとは思うけど、コレナギがやったんやないやろうな？」

「ハハッ…まさか……否定できないな。」

「龍ちゃんいくらナギがバカでもそれはいくらなんでも…」

「何でもなんや？」

「…………ごめん。」

そう言つて三人の間になんともいえない空気で支配されていると、何か思い立ったのか近くにいた龍ちゃんが足元までやってきておもむろにすそを引っ張る。

「ん？どうしたの龍ちゃん？」

「それで？コレはどういうことなんや？」

詠春に聞こえないように注意しながら小声で話しかけてくる。

まあ話す内容が内容なので、当然といえば当然だといえよう。

そして俺の方も詠春の視線を気にしながら龍ちゃんに話しかける。

「原作だと、ナギとアリカ姫が”完全なる世界”の奴等に襲われるのが真相なんだけど、この爆発事態は誰が起こしたもののかは覚えてないよ。」

「そうか。…これからどうするつもりや？」

「そうだね…。その後はナギとアリ力姫が敵の拠点に乗り込んで潰すんだけど、その拠点がどこにあるかなんて分からないし、できることは殆どないよ」

「ならじゃーないな。」

しよせん原作を知っているからってやれる事なんて少ない。

いくら答えを知っていてもその道筋をちゃんと分かってないとこんなもんだと改めて思う。

龍ちゃんと二人で”ん”と唸りながらどうするか考えていると、さっきまで黙っていた詠春が声をかけてくる。

「二人ともこれからのことなんだけど…」

「そうですね…。とりあえずは、どうしますか？」

「出来ればこの町の何処かにいるナギ達を探したい。それとコレの原因も可能な限り情報を集めた方が言いと私は思っているんだが、どうだろう?」

「俺も賛成ですよ。ならとりあえずは近くにいた人からいろいろ話を聞いて見ませんか?この爆発に対してナギ達が気付いていないはずはないから、もしかしたらあつちはあつちでいろいろ動いているのかもしれない。うまくいけばその情報も手に入るかも?」

「せやな。それにナギの奴は厄介ごとに関わるの好きやからな。と言うよりも厄介ごとに巻き込まれやすいんか?まあともかくここにいないって事はもう行動しとる可能性は高いと思うで?それにあのアリ力姫もな…ナギと同じような匂いがするわ?」

「いやまさか…いくらアリカ姫でも……龍牙、ちなみにその匂いつて奴はどれぐらいあたりそうだ？」

「ほぼ100%やと思うで」

「……………武」

「はあ…わかってますよ。全力で探します」

「たのむ…はあ。」

そう言つて二手に分かれて情報を集める事となつた。

何かアリカ姫が来てから詠春さんのため息が一気に増えたような気がするのには気のせいだろうか？あの人も後の事を考えずどんどん自分で動いていく人だからな。

……今度からはあの二人にはお目付け役みたいな人が必要なのかも知れん。

じゃないと詠春さんとかガトウさんが多分ストレスがマツハで胃がテレッテーみたいになくと思う。

「タケやんどうしたん？」

「いや…詠春さんやガトウさんの心境を考えるとね……」

「あ…あいつ等戦闘で死んでもナギ達に殺されるんとかやうやろうか？」

「そうならないように、少しは手伝ってあげようよ。」

「そうやな。」

「はあゝまさかここでこんな難題にあたるなんて…まさか思わなかったな。」

「まあアレや」英雄詠春・ガトウお腹を抱え謎の死！！」って見出し出されんようにがんばろうや。」

「そうしよつか？」

そう言つて二人は情報を集めるために奔走するのだった。
おもにナギ達の心配ではなく、詠春達のお腹の心配のために…

その後ある程度時間がたつた所で詠春と合流してみたのだが、結果は思わしくなくそれっぽい人を見かけたという情報は手に入ったのだが、それ以外は何も分からずナギ達も見つけることが出来なかったのとおりあえずは拠点に戻る事になった。

詠春は”もしかしたら戻っているかもしれない”

そう言っていたがまあ答えを知っている俺たちからしたらそんな事はまずありえないだろうと思ひ、詠春の胃が爆発しない事を祈りながら帰るのであった。

そしてその事件から一夜明けた所で、何事もなかったかのようにナギ達が帰ってきた。

アリカ姫の方は、”疲れた”とか言つて部屋へと戻つていき、それに便乗するかのようにナギも部屋から出て行こうとしたが、まあ…
…当然のごとく詠春につかまつた。

そして今ナギはと言うと……絶賛俺達の前で正座中。
主に詠春からのお叱りを受けているのであった。

「…で？お前はアリカ王女殿下を一昼夜連れまわしたあげく、敵の拠点を潰してきたとか…どうやってたらそんなレベルの夜遊びをすることになるんだ！-」

「いや…まあ…あるだろその場のノリって奴がさ？それにある程度潰したら後は警察に任せてきたしよ…」

ノリって…いやまあわかんなくはないんだけどさ。

せめてもうすこしまともな言い訳はできないもんかね？

いくらなんでも中学生の夜遊びのような理由で、拠点を潰されても…
どうなのよそれって。

「ノリですむ問題かー！！！！大体お前も理解してるだろうが！敵の下部組織潰した所でたいした意味はないんだ。だからこうやって秘密裏に情報を集めているんだろうが！大体アリカ王女殿下に怪我でもあつたらどう責任を取るつもりなんだ！？」

「いやゝ最初は俺もそう思ってたアリカ姫だけでも返そうとしたんだぜ？でもよー何かあの姫様ついてくって言って聞かなくてさ。それに戦闘になつたらなつたで俺以上にノリノリだしよ。まあ怪我しないように注意はしてたけどな。」

「普通はそのついでとか言われた時点でこっちに帰って来い！そうじゃなくても連絡ぐらいしろよ！！-」

「あ！……あはははっ…わりい！でもまあそのおかげでこうして敵さんの証拠も見つけてきたんだからそれでいいだろ？」

そう言っただけは懐から一枚の手紙を取り出す。

それを受け取ったガトウが確認すると、どうやら執務官の物と思われる手紙らしい。

にしてもさすが主人公。なんてタイミングのいい事なんだ。

コレってどんなチートよりもひどいチートだと思うのは俺だけなのか？ そうなのか？

まあそんな心の叫びはおいといて、とりあえずはナギに感謝しとくか。

「ナギ！ お前最高！」

「かつこええな〜さすがワイらのリーダーや！」

「だろ？」

「だろ？ じゃない！！ 武達もあまりナギを調子づかせるな！！ …

… ああ頭が痛くなってきた。」

あ、詠春を助けるとか言ってたくせにダメージ与えちまった。

ある程度時間が取れたらまた魔法球の中にも招待しよう。そこで少しでもストレスを緩和してあげないと…

その後、ナギが見つけた証拠と今まで集めていた証拠をあわせガトウがマクギル元老院議員へ連絡をいれるとその証拠をナギに持たせてこっちに来て欲しいという話となり、ナギだけだと心配だと言う事で、ラカンとガトウ、そして俺達も一緒について行くことになった。

一方アリカ姫はというと、その前に帝国第三皇女と話をしにくことが決定し、俺達より早くに出発する事になった。

ただ出発する前にアリカ姫とナギが何か話しており、それを眺めていたら思いつきりひっぱたかれていた。

たしかにあの人もすぐ手が出る人だとは思っけどさ…なんでこうすぐひっぱたかれるのかねえ？

俺も少しだけ話した事あるけどさ、そんな事無かったと思うんだけどなあ。

ま、あくまで報告だけだったし？”用が済んだら帰れ”みたいな雰囲気だったけどね？

ただ疑問に思っただんだけど、その後龍ちゃんとかラカンが”どうだった？”見たいな事をしつこく聞いてきたんだよね。あれって一体なんだっただんだろうか？

さてさてそんな事があっただけど、とりあえず特に何事もなくマクギル議員の所についた。

確かマクギル議員はもう亡くなってるんだよな。それを防ごうと考えただけですぐ別の場所に行っちゃったから何にも出来なかった。あの人いい感じの人だったからどうにかして助けたかったんだけど…。

……後悔しても今更どうしようもない。とにかく今はこの後おこることを乗り越えないと。さあご対面といきますか。

「マクギル元老院議員」

「ご苦労だった。証拠品の方はもちろんオリジナルだろうね？」

「ハッ…法務官殿はどうしたのですか？まだいらっしやらないみたいですが？」

「……法務官はこられぬ事になった。」

「え？」

「…あれからいろいろ考えたんだが、せつかくの勝ち戦なんだ…
ここで慌てて水を差すのは悪いと思ってね」

「ハア…そうですか。」

そう答えるナギは何処か納得できてない顔をしていた。
勘って奴なんだろうけど、やっぱりナギはすげーと思うよ。
でも…なあ…。

たとえ答えを知らなくてもあきらかにおかしいでしょ？
考え方が180度違うし、喋り方もびみょーに違うしね。
もう少しどうにかできなかったのかなあ…。

「（あ、あーナギ、ナギ？聞こえますか？）」

「（ん？タケルか？どうした？）」

「（いや～あきらかにあのマクギル元老院議員怪しくないか？）」

「（お！？お前もそう思うか？俺もそう感じてるんだよ）」

「（じゃやつちやいますか？）」

「（おう。）」

そんな事をナギと念話で話していると、近くにいた龍ちゃんからも
念話が入る。

「（タケやん、タケやん？聞こえてるか？）」

「（ういっい。どうぞー）」

「（あれ。偽もんやで？匂いがまったく違う。）」

「（さすがだね。正解だよ。）」

「（…なるほど。コレわかつとったわけやな？）」

「（まあそうじゃなくても怪しいと思ったけどね。…今ナギとも連絡してたけどこれからそれ暴くので一緒にやるぞ！）」

「（了解や！）」

そう龍ちゃんとも打ち合わせをし、その時に備える。

「まちな！」

「？」

「お前マクギル議員じゃねーな！正体を現しやがれ！！」

その言葉を合図に、ナギと龍ちゃんが炎で相手を燃やし、俺はハンマーコックした拳を相手のお腹めがけて打ち込む。

『なっ…』

「ちょーーーーー！！ナギ…おまっ…何やってんだよ。タケルも龍牙もだ！」

「元老院議員の頭燃やして…しかもマグナム思いつきり食らわして

どういっつもりだ!？」

「二人ともよく見てくれ!」

『何っ!?!』

俺の言葉で二人はマクギル議員の方を向く。

するとそこにはマクギル議員の姿はどこにもなく、燃えている炎の中から出てきたのは丁度ナギや俺と同じぐらいの少年。少しお腹を押さえているがそれ以外はまるで何もなかったかのように悠然とそこに立っていた。

「…良く分かったね。千の呪文の男…それに銃神と獣王。…まさかこんな簡単に見破られるとは思わなかった。もう少し研究が必要かな?」

「ん…研究っていうか演技力?喋り方とか雰囲気違いすぎるし、それにいくらなんでも言っている事が180度変わりすぎだろ?」

「せやな…あといくらうまく化けたとしてもワイの鼻はごまかせへんで」

「…なるほど。勉強になったよ。それにしても銃神の拳は一体何なのかな?確か障壁で守られていたと思うんだけど、ダメージがしつかりのこってる…」

「ん?それは企業秘密だな。それを君に教えるほど仲良くないし…ね。」

「それは残念だね。じゃあ今度仲良くなったら教えてもらおうかな。」

」

「まっそんな機会多分ないと思うけどね。」

「やるぞタケル！」

「おう！」

そう言つて二人で突つ込む。

しかしそれは二つの影によつて足止めを食らう。

「通しませんよ！」

「くらえ！！！」

「ちっ！！！」

ああコレが原作にあつた仲間達か、確かに強いわ。マジでやってギリギリ勝てるかどうかで所かな。まあ然を使えばすぐにでも倒せるんだろうけど、アレは切り札だから使えないしな。そんな事を思いながら敵がはなつた魔法を防ぐ。

「強えぞやつら！！！」

「ハッハ！だが生身の敵だ！政治家だ何だとガチで勝負できない敵にくらべりゃ…万倍！！戦いやすいぜツ！」

「さすがはバカンやな。…でも同感や。一気にいくでえ！！！」

二人とも任せるとばかりに突つ込み。俺もその勢いに乗じて相手に

向かって攻撃を仕掛けようとするが、二人に阻まれてうまく本丸を撃つ事が出来ない。

そうしているうちにマクギル議員に化けていた奴が声を真似て応援を呼んだ。

「わしだ！マクギル議員だ。スプリングフィールド・ダテとそのペット・ラカン・ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている！軍に連絡をッ……！！」

「げっ……！！」

「やられたな。」

「君達は少しやりすぎだよ。悪いが退場してもらおう。」

「ハッ！その前にテメエの人生の幕引きが先だろ！！」

そう叫びながらラカンとナギが突っ込むが、結局倒しきる事が出来ず、その後軍が部屋に乱入してきて、首都、そして連合から追われる事になってしまった。

「タカミチたちはだいじょうぶかな？」

「心配せんでもなんとかなるやろ？」

「にしてもこれからどうすればいいか……」

「ガハハッ。傑作だぜ。退屈しねえ人生ってのは最高だな。」

皆思い思いの事を逃げながら喋っていると一人真剣な表情でいたナ

ギがボソツと呟く。

「姫さんがやべえな……」

「今の俺達じゃ下手に動くと余計に状況は悪くなるだけだと思う。
だから今は……」

「ああ。とりあえず他の仲間と連絡が取れるようならとって隠れ家
へ向かおう。」

「何かあったら隠れ家へ向かうという事は前から決めていた事だからあいつ等もきつと向かっているはずだろう。」

「だな。とりあえずは追っ手をまかないとな。」

そうラカンが締め、追っ手の軍から少しでも距離をとるように逃げるスピードを上げる俺達。

その後辺境を転々と移動しながら追っ手をまいていき、隠れ家へと向かうのだった。

第十一話：英雄↓反逆者（後書き）

いかがでしたか？

この世界の雰囲気を変えず原作沿いにしてみたのですが、うまくいっていたでしょうか？

感想などありましたら、ぜひ書いてください。

さて、ここで少し説明を…

作品の中でなぜタケルの拳が障壁を無視できたのか？

その疑問についてお答えしたいと思います。

まず知っておいてほしいのが、銃闘技のマグナムの最大の特徴です。マグナムの特徴とはずばり防御不能。ガードをしても衝撃が体を突き抜けると言うところです。

じゃあそれをネギまの世界でやってみるとどうなるか…考えたんですけど障壁突き抜けちゃうんじゃないかなって思ったんです。

グレートブリッジの時は幾重にも障壁が張り巡らされていたためそういったことが出来ませんでした、人の…それも一枚ぐらい障壁では関係無しに本体にダメージを与える事が出来ます。

ただし、あくまでマグナムだけです。他の銃闘技の技は障壁に阻まれてしまいます。絶対破壊攻撃であるマグナム系のみ与えられた付属です。

以上で説明を終わりたいと思います。

さて次回ですが、実はもう9割方で来ていて後は見直しか付け足したりするだけなのですが、ちょっとストックを増やしたいのでもしかしたら遅れるかも知れません。

何とか二日に一本のペースを保ちたいと思っていますが…

少なくとも今週中には投稿したいと思っていますので、次回も読んで

くださると嬉しいです。

それではまた次回よろしくお願いします。

第十二話：騎士誕生（前書き）

おつかれさまです。

遅くなりました。

えー実はネット代金払い忘れてまして…今日までつながりませんでした。

書けたと思って投稿しようとしたらつながらないんですから、一瞬またMYPICが壊れたのかと思いました。

うつゝ…これからは気をつけます。

さてそれではどうぞ！

第十二話：騎士誕生

首都から追われ、一気に連合が敵になった俺達。

多分こっついのを波乱万丈とか言うんだと思うけど、あんまいこ
と無いなと改めて実感していた。

将来自記伝みたいのを書くとしたらこっ書くと思う。

” 平凡な日常こそ最高の幸せ ”

とまあ戯言みたいな事はおいといて…

俺達は何とか連合の追っ手を振り切り、隠れ家があるルシス大陸極
西部オリンポス山に辿り着く事が出来た。

隠れ家に入ってみるともうそこには他の面子がそろっており、何が
あったかをいろいろと聞かれ、説明し、皆顔色を暗くしながら納得
していた。

「?…どうしたんだよ。確かに良くないニュースだけどよ。そこま
で暗くなる必要はないんじゃないか?」

ナギがそう話すと、先に来ていた面々の中を代表してアルが俺達に
事情を説明する。

「実はナギ達がこっちにつくまで私達も可能な限り情報を集めてい
たのですが…帝国側に接触を試みていたアリカ姫が捕まったらしい
のです。」

『……………』

アルの言葉に俺達は息を呑む。

今の状況を簡単にまとめてみると・・・

・ ”完全なる世界” によつて ”紅き翼” は賞金首になり連合に追われている。

・ 戦争を早く終わらせるためにアリカ姫が帝国の皇女と会っていたがそれはほぼ失敗といつていい状態

・ 連合に対して発言力を持っていたアリカ姫が捕まり投獄されている。(原作通りならこっちの味方であろう帝国の皇女も同じく投獄されている)

うん。…これはやばいというよりもほぼムリゲーって感じだな。

力でこの戦争が終わらせられるならとつくの昔に俺達が終わらせていると思う。

それが出来なかったのは政治的なものが関係してうまく動けなかったからだ。しかもそれを担っていたアリカ姫が投獄され、こっちでうまく動けそうなのはガトウだけ。

そのガトウも連合から敵扱いされているから今までみたいに動けるわけではない。

オイオイ…コレがゲームなら俺はもう既に電源を切っているレベルだな。

「なあなあ…タケやん。これからどうなるん？」

「どうなるもこうなるも…やる事は一つしかないよ。」

「やっぱりそうなんか…。大変そうやな」

「軽いね龍ちゃん…。まあいいや。とりあえずは…」

「せやな。考えるよりも行動やな！」

そう俺達が内緒話をしている中他の面々はこれからどうするか話し合っていた。

皆たぶん考えている事は同じなんだろうけど、その危険性から発言できないみたいだ。

なら…ここは俺が一石を投じる事にしますか。

「皆…今俺達ができる事なんて一つしかないと思うんだけど？」

「タケル…いやしかしだな…」

「ガトウさん。確かに危険性は大きいし失敗したら終わりだと思うけど、それ以外できることがないと思うし、やらないと先に進めないと思う。」

「……タケルの言う通りだな。ここで必死になって考えても何も変わらない。ならやるしかねーだろ…！」

『…よし。やるか！』

「おう！……アリカ姫を助けるぞ！」

そこからの行動はかなり早かった。

情報収集能力が高い面々がアリカ姫がどこに投獄されているかを掴み、戦闘能力が高い面々で強襲、奪還と言う形になった。

そして決行の日。

正直こんなにうまくいったのか？と思うくらいに割りとおつさり成功してしまった。

まあもともと戦闘に特化している連中がいきなり強襲をかけるんだから、せめてあつちに俺達と同じぐらい戦えるやつがいないと防ぐ事なんてできないだろうし。俺達のこと忘れていたのか、それとも油断していたのかは知らないけど、ザルと言っている警備だったしま、ともかくアリカ姫の奪還はすなりと成功するのだった。

ちなみにアリカ姫とナギの掛け合いは見れなかった。

外で龍ちゃん達と暴れていたから仕方がないんだけど、それでも原作イベント見逃すのはちょっと勿体無かったかな〜とか思ったりしていた。

さてさて、そんな訳でアリカ姫とついでにテオドラ皇女の奪還に成功した俺達は隠れ家へと帰ってきた。

「何だ！これが噂の”紅き翼”の秘密基地か！どんな所と思えば…ただの掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだよ。このジャリは…」

「でも秘密基地ってこんなもんじゃないの？大体こんな所にそんなすごい建物つくったら秘密所が目立ちまくりでかなりあやしいですよ？」

「タケやんの言う通りやな。目立たんでナンボやるこんなもん。最低限休めて、あまり周りを気にせんと話し合いができればいいだけやと思うし」

これらテオドラ皇女…。

確か正式な名前は……長すぎて忘れた。まあテオドラ姫でいいや。

んゝ印象はやっぱりおてんば姫って感じだよな。仮にアリカ姫が綺麗ならテオドラ姫はかわいいが当てはまりそう。…性格についてはノーコメントだな。

「何だ貴様！無礼であろう！それに秘密基地と言っただからもつと期待してもいいではないか！？」

「へっへん生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね。」

そう言っただけでラカンが逃走した。

……逃走？って！おい俺に丸なげするつもりか！？

「はあ…もうどうでもいいか。それと期待についてはお話の見すぎですから。」

「…主の名は？」

「申し送れました。タケル・ダテといいます。こっちの虎は龍牙です。」

「なんと！？お主等があのかの”銃神”と”獣王”だということか！？」

「そうやけど？」

「ううむ。聞いていた話と全然違うではないか…」銃神”は髪が紅く鋭い目つきをしておると聞いておるし、”獣王”にいたっては体のサイズがまるで違う…それに…」

あー確かに戦場で”炎帝”使えばそんな感じになるけど、それを鵜

呑みにするのはどうなのよ？

大体俺普段はこっちの姿の方が多いと思うんだけどな…戦闘以外。

「……のうタケルよ。」

「なんですか？」

「……その龍牙なんじゃが…」

「龍ちゃん？それがどうかしましたか？」

「……妾に抱かせてはくれないかの？」

は？

「……だめかや？」

「……はあゝ。龍ちゃんどう？」

「まあ抱かせるくらいならええけど…」

と龍ちゃんがテオドラ姫に近づいた瞬間。

俺でも見失いそうなぐらいのスピードで一瞬にして龍ちゃんを抱きかかえて頬擦りをしている。

「ふおおおお…。このモフモフのフワフワ感。この抱き心地最高じやー！！！」

「ちょ…やめ…やめてーな。あ、そこはあかん。あかんて…あ…あ…あはははははっ！！！！」

おお。龍ちゃんがモテとる。

確かに普通に見れば、かわいいぬいぐるみが喋って、しかも動いているんだもんな。かわいいものの好きにはたまらない光景なんだろう。いつも一緒だったから忘れてたわ。

「よかったな龍ちゃん！モテて」

「よくないわ！頼む…ほんま頼むからたすけてや…！！！」

「むふふふ…。どうじゃ龍ちゃん妾のペットにならぬか？一緒に暮らそうではないか。」

「なるかボケー！！ええからもう離さんかい！！」

「嫌じゃー！！もう絶対離すわけないじゃろーがー！！」

「ふう…。龍ちゃんにも春がきたのか。」

「そんな台詞いまいらんのじゃ！ええからはよ助けんかい！！このままやと…ワイ…ワイ…お嫁にいけんようになってまう！！」

「アホか。もともといけんだろつが。お前は雄だ」

「大丈夫じゃ。妾が娶るから心配するな。」

「ええかげんにせんかい！！！！」

龍ちゃん体使つてまで俺たちを笑わせてくれるなんて…くっ…さすがだよ。

とまあそんな事がありまして、俺達は今隠れ家の中に集合。

今の今までテオドラ姫に弄ばれていた龍ちゃん俺の肩でぐったりしている。

時折”もうお嫁にいけへん…”とか呟いているが、それは聞かなかったことにしておきたい。

デオドラ姫はと言うところをジッと見ながら指をくわえていた。さすがにこれ以上は龍ちゃんが持たないのでやめて欲しい…龍ちゃんもとんでもない人に好かれたもんだ。

そんな中ナギがアリカ姫に向かって話しかける。

「さーて姫さん。助けてやったはいいいけどこっからは大変だぜ？連合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオステシアも似たような状況で…最新の調査ではオステシアの上層部が最も【黒い】…という可能性まで上がっています。」

「やはりそうか…」

アリカ姫を奪還して少しは状況が好転したといえはしたけど、それでもやっぱり厳しい状況なのはかわらないか。

まあそんなんであきらめる奴なんてきつとこの中ではないんだろうけどね。

俺ももう覚悟決めてるし。

「我が騎士よ」

「だあから。その”我が騎士”ってのは何だよ姫さん。クラスでい

「つたら魔法使いだぜ？しかも恥かしーしよー。」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主はもはや私の物じゃ」

「なっ…！！」

「オイオイ…物はねーだろ物は。言っている事は…まあ良いとしても、言い方ってもんがあると思うけどな。」

「帝国に連合…そして我がオスティア世界のすべてが我らの敵というわけじゃな」

「じゃが…主と主の”紅き翼”は無敵なのじゃろ？」

「世界すべてが敵——良いではないか！こちらの兵は8人と1匹…じゃが最強の8人と1匹じゃー！！」

「おお！なんかアリカ姫が輝いて見える！これがカリスマって奴か。始めて見たけどなんかやれそうな気持ちになるのは何でだろうな。ナギもそれもってるっぽいけど、普段が普段だけにあまりそれほど感じないしな。」

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり剣となれ。」

「……へっやれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。…いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

「め…名場面キターー！！！！」

「やっぱここはかっこいいな。なんか心臓ドキドキしてるし、体も震

えてきた。

武者震いなんて二度目の経験だよ。

さあこの戦いのフィナーレまでラストスパート開始って感じたな。

そんな事を考えていると肩に乗っていた龍ちゃんがボソリと呟く。

「熱くなってきたな…」

「…だね。なんか体中がうずうずしてきたよ。」

「ワイもや。…血が滾ってきたわ」

「最後まで付き合ってくれるよね龍ちゃん？」

「あほ。あたりまえや。最後の最後まで一緒やで？…ちゅーかコレ終わっても一緒やけどな。」

そんな事言ってくれる龍ちゃんの頭を俺はやさしく撫ぜる。

それが気持ちいいのか目を細めて嬉しそうに撫ぜられている龍ちゃん。

初めて会った時はこうなるなんて思わなかったけど、本当に龍ちゃんにあえてよかったと思うよ。

「のう…」

「ん？どうかしましたか？テオドラ姫？」

「まず敬語はやめよ。それに姫もいらん」

「はあ…別にいいで…いいけど。それでどうかした？」

「いや… なんだか震えておるようじゃったのでな？」

「えっ…？ ああこれの事？ 心配ないよ。これは武者震いって言うて怖くて震えているわけじゃないから。」

「そうかの。 なら良いのじゃが…」

まあ他から見たら震えているように見えるのは仕方がないことなのかな？

武者震いって日本人特有らしいし。… まあホントかどうかはわからないけどね。

でもまさかテオドラが心配してくれるとは思わなかったな。

それとも俺達じゃなくて龍ちゃんの心配か？

だとしたらちよつとだけへこむな。

「ああ… それとじゃな。 先ほどラカンからいろいろ話を聞いていたのじゃが、お主かなり強いらしいの。」

「まあラカンとかナギとかと一緒にされても困るけど、それなりに強いのは自覚しているよ。」

「それなり… それなりのう。 お主がそういう割にはラカンは今まであつた中で一番強いとか言うつたがの。… ということじゃろうか？」

俺にもわかりません。

普通に考えて、力で強いのはラカン。

魔法で強いのはナギ。

技で強いのは詠春… っとそれぞれ突き抜けているもんがこの”紅き

翼”に集まっているんだけど…

俺は全部中途半端でしょ？

多分あれだと思う…器用貧乏って奴。

「ラカンが適当に言ったただけだろ多分？俺が一番なんかじゃないよ。」

「いや。間違いなく俺様が闘った中で一番つえーよ、タケルはな。」

俺がそうテオドラに話していると会話を聞いていたのかラカンがこっちにやってきて会話に参加してくる。

「はあ？何言ってたよ。俺なんて…」

「ばーか。誰が単純な力の話をした。オメーが一番つえーのはココだろ。」

そう言つて拳を俺の心臓に当てる。

「確かに単純な戦闘力とかそんなもんは一番じゃねーかもしれねえ。あ、然は抜いてな？だが戦いつて言うのはそれだけで決まるもんじやねーだろ。どんな状況においても潰れねえ、折れねえ、なくならねえ、ココの強さつてもんも大事なもんだ。それはお前が一番つえー。戦った事のある俺様が言うんだ。間違いねえさ。…そしてそれはここぞつて言う時に俺達以上の力を出してくれるもんだ。あのグレート＝ブリッジの時のようによ！」

「なるほどのう。ココの強さか…それなら妾はお主に期待しよう。」

「はっ？」

「アリカ姫の騎士がナギであるように、妾の騎士はお主じゃタケル。妾のために…そしてこの世界に住む者たちのために戦ってくれ。期待しておるぞ我が騎士よ。」

あれ…？なんでこんな事になってるの？

俺そんな柄じゃないんだけど…

「タケやん返事せんとあかんで？」

「龍ちゃんいくらなんでも俺は…」

「む…だめかや？」

あ…！！…そんな泣きそうな顔をするなよ！

それに何この空気！？やらないといけない空気？

ラカンとかアルとかナギがニヤニヤこつちを見てるしよ…

う…あ…もう…！！

「…ったよ。わかったよ。俺の力あんたに預けるよ。目の前に塞がる敵すべて撃ち貫いてやるよ。この拳でな…！！」

「うむ！たのむぞ！」

は…なんでこうなった！？

……あと騎士っていうのはこの戦いだけの話だよね！？

ずっととか嫌だから俺は…！！！！！！

第十二話：騎士誕生（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想や質問などあれば気軽に送ってください。

さてこの展開なんですけど、連載当初から決めていました。特に龍ちゃんとデオドラのくだりは絶対はずせない！！！！じゃなきゃわざわざサイズを小さくしたりしてません。

…こほん。すみません取り乱しました。

で、次回なのですが、また小話を挟みます。

タカミチ修行の様子を書いたものです。

挟むかどうか正直迷いましたが、ここを外すとまたしばらく出せませんし原作でも半年とか結構時間がたっているので丁度いいかな？って思います。

なので次回は小話です。

それではまた次回よろしく願います。

小話3：修行風景・男達の願い（前書き）

お疲れ様です。

ぽっかりと時間が空いたので今のうちに投稿しました。

今回は前回予告した通り、タカミチの修行風景です。

あくまで小話的な話で、内容は進んではいませんが、楽しんでもらえると思います。

小話3：修行風景・男達の願い

あまりの急展開さによく状況が理解できてないが、どうやら俺はテオドラの騎士になつたらしい。

アリカ姫のことがうらやましくなったのか、それともただ騎士が欲しかったのかそれは俺にはわからないが、テオドラが本気で俺のことを騎士にしたかったということは良く分かった。

なぜならあれから事あるごとに俺を連れまわし…もとい護衛としてそばに置き。

俺が用事で出かけると、よっぱどの危険がない限りは一緒に行動するようになった。

まあそのつど甘えたり、龍ちゃんにちょっかいをかけているのは可愛嬌なのだろう。

でもこうして俺に甘えたりする事については最近は良かったと思っている。

いくらテオドラが偉い立場の人物だとしても、やっぱり歳を考えるといろんなことに興味を持ったりと、遊びたい盛りの年齢なのだ。きっと帝国に帰ってしまえば、また皇女としての仮面をかぶりそれっぽく振舞わないといけなくなる。

ならその時がくるまではこうしてわがままいったり、やんちゃしたりしていてもいいと思う。

やっぱり子供は笑顔が一番だと思うから…。

ただし…言うておくが俺はロリコンじゃない！！

アルと一緒にして欲しくないのでコレだけは声を大にして言いたいと思う。

……こほん。

少し取り乱してしまつたが話を進めたいと思う。

ナギ&俺の宣誓が終わつてから俺達は”完全なる世界”に対して反撃を始めた。

ガトウを中心とした情報収集、そして作戦発案組みは、敵の拠点や陰謀に加担しているものを暴きそれを潰すための作戦を立案。

ナギ・ラカンなど行動組みは、それに従いながら敵を強襲・迎撃をする。

ちなみに俺は主に行動組みなのだが、時と場合によってアル達の組で行動している。

俺達自身にできる事はそう多くない。でも全員で頭を捻り行動していけばきつと光が見える！それを信じて今は必死になってできることをしていた。

そんなある日。

次の作戦まで何日か暇な時間が出来たため、弟子のタカミチと一緒に魔法球に入ることになった。

タカミチが弟子になってから、殆どを筋トレや、的に向かつての打ち込みをさせており、それを見るにそろそろ次のステップ…技の段階に入つていいだろうと思つたのが理由だ。

なぜか当然のようにナギ・ラカン・テオドラそして詠春と一緒に魔法球に入ってきているのだが、そこは突っ込まない方向でいきたいと思う。

「さて…これから技の修練に行きたいと思うけど、覚悟はいいか？」

「はい！」

「ん。いい返事だ。ならまずコレを渡しておこう」

そう言つて俺はタカミチに指輪を渡す。

「これ…一体なんですか？」

「それはこの魔法球に入つても歳をとらなくするための指輪だ。技の修練にはそれなりに時間が掛かる。ある程度形になれば外で修練していけばいいけど、それまではココで修練する事になると思うかな。…嫌だろ？現実世界に戻つた時に老け顔になつてゐるの」

「それは…その……はい。」

苦笑いしながら返事をするタカミチ。

まあ原作を見てると強さの引き換えとはいえあそこまで老け顔になるのは正直かわいそうだと思う。

ももとの歳でそうなるのだつたら仕方ないけど、魔法球に入り浸つたせいでそうなるのぐらひは変えてあげたい。

まあ…優しさつて奴だな。

「よし。じゃあ始めるか！」

「よろしくお願いします！」

指輪をちゃんとはめて律儀に頭を下げるタカミチ。

さて…一体何から教えようかな…。

「いいよなーあの指輪。俺にもくれねえかな」

「本当だぜ。そうすれば気軽にこの魔法球の中に入って戦えるのに
よう…」

「うん。銃闘技は血液の流れを利用した格闘技なのさ。独自の鍛錬によって作り上げられた筋肉と心肺機能。それによって生み出される強力な血流を操作してあそまでの威力スピードを生み出しているというわけ。」

「たしかに…筋トレについても的撃ちについても聞いたことがないものばかりでしたけど…」

「だよね。だけどその鍛錬をしっかりとこなさないと使えないんだよ。だからこれからもあの筋トレと的撃ちは続けておこなうように技の修練に入ったからといっても、体作りが終わったわけじゃないからね。」

「はい！」

「よし！じゃ…まずなじみが深そうな近距離系の技から入ろうか。」

まだ話しておかなくちゃいけない事は沢山あるけど、いきなり一片に話しても多分頭の中が整理できないだろうから、ここで一度話を打ち切って技の修練に入る。

近距離系から始めたのは居合い拳を撃つための格好と似ているし、やっている事もさほど変わりがないからうまくいけばコツがつかめるだろうと思ったからだ。

「いいかい？まず教えるのはマシンガン、俺も良く使う技の一つだよ。この技はとにかくスピードが命だ。相手に反撃を許さないぐらいに数を撃たないという意味がない。スピードを突き詰めるために威力・正確性を犠牲にしているからね。」

「マシンガン…それってやっぱり銃火器のマシンガンをイメージす

ればいいんですか？」

「正解。っというか銃闘技って言うてるぐらいだからね。ほぼ名前と同じ銃火器をイメージすればどういった技なのか想像できると思うよ。」

「分かりました。」

「じゃ一回手本見せるからその後に真似してやってみて。」

「はい！」

こうしてタカミチ強化の修行が本格的に始まった。技の修練のやり方は大体こうだ。

まず最初にどういった技か説明し、目の前で実戦。

その後タカミチが同じようにやってみる。

それから直すべき所を指摘して、またタカミチがやる。

これの繰り返しである。

なんにせよイメージと、とにかく数をやらせる事が一番大切だと思う。

イメージについては簡単。目指すべき物がはっきりした方がどんな前に進む事が出来るから。

数については自分でコツを掴むしか方法がないから。

俺とタカミチではきつと体の感覚とかが違ってくるから、こればかりは数をこなさせるしかない。

もちろんある程度形になってきたら、俺が掴んだコツなんかも言っていくつもりだけどそれはあくまで参考。

自分の物にするには自分でコツを掴み完成へと導いていくしか方法がない。

それが銃闘技を見につけた俺の結論だった。

今は手探りで、しかもなかなか思うようにいかなくて苦しいだろうけどそこを乗り越えないと銃闘技は使えない。

俺から言えることは”頑張れ”の一言だけ。

あの時俺に向けた目と言葉が本当だったら乗り越えられると思う。

だから頑張れ！

[illegible]

「よし今日はいいまで。」

日も傾き、辺りが暗くなり始めたところで今日の鍛錬の終了を告げる。

「はあ……はあ……あ……ありがとうございました。」

苦しそうな顔をしてその場に倒れこむタカミチ。

きつと今体が重くて動けないんだろうな……。うんうん。俺も経験したよ。

「タカミチそのままでもいいからちよつと話を聞きな。」

「はい」

「今、体中が重くてしかも目の前がチカチカしてるだろ？違うか？」

「してます」

「それが銃闘技の弱点だ。」

「へ…？」

「たとえば話をしよう。本来銃というのは弾を火薬で打ち出す兵器だ。そのため弾や火薬が無くなれば兵器としては役に立たない。そしてそれは銃闘技も同じ。銃闘技にとって弾とは血。火薬とは心肺機能…いやスタミナだな。そのことを言う。つまりどういうことかわかる？」

「えつと…血が無くなれば使えなくなるってことですか？」

「まあ概ね正解。実際は血が無くなるなんてことはまず無いから、血が通っている血管。特に腕の血管を傷つけられたりするとうまく使えなくなる。スタミナについてはそのまま、数を撃つために他の格闘技とは桁違いのスタミナが必要となってくる。それと同時にマシンガンのような連射技は突き詰めて行くと無呼吸運動になりすぐに酸欠になってしまうんだよ。」

「なるほど。」

「タカミチの今の状態はね、酸素不足が大体の原因。うまく酸素が頭に行き渡ってないため目の前がチカチカしてるんだよ。これは銃闘技を使っていく限り避けられない事だから良く覚えておくように。もちろん鍛錬をしていけば、鍛えられてそう簡単にこうなる事はなくなるけど。…まあ弾数が増えるって言えばいいのかなあ…。だから

ら日々自分の限界を超えるのを目標に鍛錬に励むこと。わかったか？」

「はい！」

「よし。じゃさすがにここで寝るのはどうかと思うから、家に言って柔軟して風呂に入って寝な。」

「はい。」

そう言って体を動かそうとするが、思うように体が動かないのか立てないみたいだ。

「龍ちゃん。」

「了解や。…ほらタカミチ。ワイの背に乗り」

近くで見守っていた龍ちゃんが、本来の姿に戻りタカミチを背に乗つける。

「ありがとうございます。龍牙さん」

「ええて。…それとワイに敬語はいらん。呼び方も龍ちゃんでええで？」

「ありがとうございます。龍ちゃん」

「そっちの方がしっくりくるわ。…なら落ちんように気いつけや」
タカミチを背に乗せた龍ちゃんが明かりが見える家へとゆっくり、

なるべく揺らさないように移動して行く。きっとテオドラやナギがメシを食べているだろう。さっきアルとかゼクトもこっちに来てたから誰かご飯ぐらい作れるだろうしな。

「お疲れさん。」

「酒とつまみ、後メシもってきたぜ」

「ついでにタオルももってきてやったぞ。」

タカミチを見送って一息つくと、ご飯と酒をもって詠春とラカン、そしてガトウがこっちにやってきた。

「ありがとう。それにしてもガトウさんは何時こっちに？」

「ああ。結構前にな。お前たちの鍛錬の邪魔にならないように声はかけなかったけど、少し見せてもらったよ。お前の強さになったくしたよ。あれほどハードな鍛錬をすれば強くない方が嘘だ。」

「ははっ。俺はもうなれましたけどね。まだ最初のうちは体がうまく使えなくて辛いでしょうが、慣れていけばそこまで辛くは無くなりますよ。」

「なるほどな。…それでタカミチの奴はどうだ？」

お酒を俺に渡しながらガトウが聞いてくる。

きつとそれが聞いたかったのだろう。詠春もラカンもこっちに顔を向けてくる。

「…下地は順調に出来上がっています。技については今日始めたばかりだから正直まだわかりません。ただやる気と意気込みがすご

いので、もしかしたらすぐにでも形はできるかもしれないですね」

「そうか…」

どこかうれしそうな顔をしながら呟くガトウ。

そばで聞いていたラカンや詠春も同じように何処か嬉しそうだった。

「あいつは他の奴らからいつも才能がないといわれ続けていた。…生まれながら魔法が使えないせいだな。魔法なんて選択肢の一つではないって言うのに、この世界じゃそれしか評価するものがないと言わんばかりだ。」

「まあそれは…なんとなく分かりますよ。」

俺も正直そこがよく分からなかった。

確かに生まれた時から魔法と言うものが身近に存在していて、それが使えないとなるとどういうことになるか安易に想像がつく。

現に”サムライマスター”と呼ばれ英雄扱いされている詠春でさえ、ごく一部の人間からはあまりいい印象をもたれていない。

俺から言わせてもらえば、詠春の力と技こそ真に評されるものだと思うんだけどな。

「だから俺はタカミチに居合い拳を教えた。魔法なんか頼らなくても強くなれる。そう思っただけでな…。だからあいつが必死になっただけで強くなっていくのを見るとうれしいんだ。」

「私も同感かな。才能だの、魔法だの…たかがそんなものに胡坐をかいて偉そうにしている奴らよりタカミチの方が何倍も素晴らしいと思うし、尊敬できる」

「ハツ…そんなの当たり前だろ詠春。魔法を習ってそれが使えた…
それだけで強くなったと勘違いしている奴らと今のタカミチを一緒
するなんざタカミチに失礼してもんだぜ。本当の強さってのは数え
切れないほどの鍛錬と経験、そして意志の強さって決まってるんだよ
」

「へえ…ラカン言うじゃないか。でも俺も賛成だよ。あいつはきつ
と強くなる。それはけして才能と言う言葉だけで片付けられるモノじ
ゃない。」

そう言ってみんなで顔を見合わせてニヤリと笑う。

何の因果か知らないが、ここにいる全員魔法というものにあまり頼
っていない。

全員が全員己の肉体と鍛え上げた技で戦っている。

…まあ俺は魔法も使ってはいるがあくまでそれは技の威力をあげる
為のもので普段の戦闘では殆どといっていいほど使ってははいない。

「…まあ俺もここまでいろいろと魔法を認めないような感じで喋っ
ているが、別に魔法が嫌いって訳じゃないからな？」

何を思ったかガトウがそう皆に言うと、一瞬あつけにとられそのま
ま大爆笑する。

「それぐらい分かっているさ。…それよりも」

一通り笑い終わった後、詠春がそう話、酒を注いだ杯を上を持ち上
げる。

それを見て俺たちも杯を上を持ち上げ、詠春の言葉を待つ。

「タカミチのこれからの成長を」

詠春がそう言い

「タカミチの修行の成功を」

ガトウがそう続け

「タカミチが俺様達に追いつけるように」

ラカンもそれにあわせるかのように話

「タカミチがタカミチだけの強さを手に入れますように」

俺が最後に締める。

そして全員タイミングを計ったかのように叫ぶ。

『『乾杯!!』』

タカミチのこれからの成長に期待し、男達は酒を飲む。

いつかこの場所にタカミチが入って同じように酒を飲めるように…
そんな事を願いながら…

小話3：修行風景・男達の願い（後書き）

いかがだったでしょうか？

修行とかもつと戦闘っぽくど派手な感じでやった方が良かったですかね？

とは言ってみたもののどうしても修行は地味になりやすいのでそこはご勘弁を…

さてまた次回からは話が進みとうとう”完全なる世界”と対決します。

うまく魅せれるように頑張りますのでこれからも応援よろしくお願いします。

あ、感想とかもいつでも募集しますので気軽にどうぞ！
ありがたく思いながら返信させてもらいます！

お知らせ

この小説を読んでくれている皆様。
いつもいつもありがとうございます。

そして感想をいつもくれている方々には感謝の言葉もありません。

さて、この作品も最初のラストステージへと突入しました。

他の皆様の作品をいろいろ拝見させていただくとけっこうすっきり
終わらせていたり、違う視点から戦いを眺めていたりといういろいろあ
りますが、私はちよつとだけ詳しく書きたいと思います。

といつても武をかつこよく魅せる為だと思つてください。
今日にも最新作を投稿予定ですので楽しみにしてくださる方は楽し
みにしてください。

予定としてはPM5：00を予定としてます。

それと、活動報告にも書きましたが皆様に少しアンケートを取りた
いと思います。

ずばりヒロインについてです。

メインとかサブはもう決まっています、活動報告には名前を書きまし
た。

ただここでアンケートを取りたいのは私の中でどうするか迷つてい
る面子のことです。

アスナ・木乃香・千雨

今悩んでいるのはこの三人となります。他にも刹那とかも入れて欲
しいとも言われたのでそれも考えている所ですが、とりあえずはこ
の三人をどうするか決めたいのです。

特にアスナですね、実はこの戦いの後アスナをヒロイン枠に入れる

かどうかでプロットが変わっていきます。

二通り考えてみたんですがどちらがいいか私自身迷ってます。

IFシリーズは書く自信ないです…

と言うわけで皆様の意見を募集したいと思っています。

沢山の意見お待ちしております。

ちなみに、アスナがヒロイン枠に入った場合、ネギsideには最初
に委員長が入る予定となっております。

これからも武ともどもよろしくお願いします。

第十三話：決戦・前（前書き）

お疲れ様です。

予告通り投稿させてもらいました。

さっそくアンケート答えてもらって嬉しいです。

三人ともヒロインにしてほしいとかでもかまわないのでどしどし書き込んでください。

それではラストステージ前編どうぞ！！

第十三話：決戦・前

魔法球の中でタカミチの修行をつけている間にも周囲の状況は刻々と変化していった。

連合と帝国が大々的な戦闘をおっぱじめれば、両軍を止めるために俺達は戦い、その間に”完全なる世界”の拠点を一つ一つ確実に潰していった。

もちろん自分達の敵は帝国や連合ではなく、それを操っている”完全なる世界”だということを説明するのも忘れない。

その説得のおかげなのか、犯罪者として狙われていた俺達にも少しずつ味方が増えていき早くこの戦争を終わらせるために多くの人達が力を逢わせて戦っていった。

そして半年後：とうとう俺達は”完全なる世界”の親玉がいる拠点を見つけることに成功したのだった。

.....

昔見ていた二次小説の中で書いてあった長編映画になるっていうやつが良く分かった。

これは確かにそういわれても仕方がない。

俺が思うに映画にもなった某物語を現実で再現されているような感覚に陥る。

実際現実に行くと夢も希望もないのだけど...

さてその物語にたとえるなら映画で言う三作目。

とうとう最後の締めの部分までやってきた。

そう...”完全なる世界”が根城にしている世界最古の都・王都オスティア空中王宮最奥部。

——墓守人の宮殿へと…

「あ…あの！ナギ殿！」

「ん？なんだ？」

「ササ…サイン！お願いできないでしょうか！？」

「お？おお…いいぜ？」

辺りがピーンと張り詰めている緊張感の中、セラス総長がナギにサインをねだっていた。

なんというかこの場面でそれが言えるセラス総長は肝が据わっているというか、空気読めていないとも言えるのか…いやはやなんとも言えない感じがする。

すると微妙な表情を見ていたのか肩に乗っている龍ちゃんが声をかけてくる。

「なんや？うらやましいんか？」

「い…いや！？そんな事はないけどさ…ただ最終決戦のはずなのになんでこんな変な空気になっているのかな？って思ってたね」

「あ…まあええんとちゃう？下手に緊張するよりましやろ？」

「まあそうだけどね」

そう言って二人で笑い合う。

ちなみに前俺達にファンクラブが出来たと言ったと思うが、何故が俺のファンクラブには女性が少ない。まったくいないわけじゃないのだが、なんだかちょっと悲しくなってくる。

なんでも俺のファンの殆どはタカミチぐらいの子供とか若い男性が中心で、俺自身の強さと言うよりは銃闘技に憧れている人が殆どらしい。

その人達曰く……”銃をもしてつくられた銃闘技……イカス!”とか”コレに燃えなきゃ男じゃねえだろ!?”とかそんな意見ばかりである。

まあ確かに本家の漫画でも男人気が凄かったらしいけど……やっぱり男として生まれたからには女の人にちやほやされてみたいという願いはあるわけで……うん。考えると涙が出そうだからもう考えるのはよそう。

でもやっぱり……主人公つてのはもてるのが当たり前なんだね。たしかこの物語の中では俺が主人公のはずんだけどな……

「タケヤん何考えとるんかわからんけど……とりあえず涙拭き?」

「な……泣いてなんかいないんだからね!?!」

「なんやそのキャラきつもいわ」

龍ちゃんはこの戦いが終わった後じつくりと拳で語り合つとしよう。コイツのファンクラブも女性多いからな。

”カッコイイのに、カワイイ♪”とか”私の肩にも乗って”とか……親友って思っているけどそれとこれは話が別だ!!

「しっかしよく不気味なぐらい静かだな奴等」

「なめてんだろ? 悪の組織なんてそんなもんだ」

「ラカン。油断するな！相手は強敵ばかりだぞ！？」

「へいへいわーってるよ詠春。」

「ともかくあの少年達のことだから何かあるんだろ？警戒しつつも早く準備を整えようぜ？」

俺がそう締めると皆頷き道具の点検をしたり体を少し動かしてこれから起こる戦いに備える。

するとさっきまでナギにサインをねだっていたセラス総長が真剣な顔つきでこちらにやってきた。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混合部隊準備が整いました！」

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入出来る。頼んだぜ！」

「ハッ！おまかせください。」

俺達の前で敬礼をすると、準備が完了している部隊に指示を出すためにこの場を後にする。

さっきまでのセラス総長はどこにいったのだろうか？

なんてバカな疑問を考えつつも戦場を見渡し気持ちを戦闘状態まで持っていく。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国に行っているタカミチと皇女も同じだろう。決戦を遅らせる事はできないか？」

ガトウが通信でそう言うてくる。できる事なら俺達だって遅らせた

い…でも…

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ…。彼はもう始めています”世界を無に返す儀式”を…。なぜなら世界の鍵”黄昏の姫御子”は今彼等の手の中にあるのですから」

「ああ」

「……そうか。こつちも少しでも早くそちらに向かえるよう力を尽くす。…皆死ぬなよ。」

『おう！』

「じゃあヤロウども……いくぜ！…！」

ナギの掛け声で俺達は大勢の敵へと突撃を開始した。
心は不安でいっぱいだ。

ただど勝ちたい…いや勝たなくてはいけないんだ！
ハッピーエンド目指すって決めてるんだから。

さあ戦闘開始だ！！
オープンコンバット

「道を開けな！！」千の雷”」

ドゴオオオン！！！！

「オラオラオラァー！！！！俺様達を止めようなんざ1000年はえーんだよ！！！」

ドドドドドドドドオオオン

ナギとラカンが持ち前の魔力と力を使って敵を混乱させ、本丸へと続く道を作っていく。

俺達といえばナギ達の撃ち残しを倒しながら被害を広げ、この後戦うであろう混合部隊の為に少しでも敵を減らして行く。

ここであまり体力や力を使いすぎないようにナギ達と交代しながら進んでいき敵の本丸へと入っていった。

「オラァ！！！」

「邪魔すんなや！！！」

予想はしていたのだが、やっぱり敵の本拠地と言う事はあるそこら中にトラップや敵がうじゃうじゃいる。敵はまあ外にいるやつ等よりは強かったと思うけど、所詮はモブで名前もないザコキャラ…俺達の敵じゃないな。

それにトラップとか最初見つけたときは避けるとか解除しなくちゃいけないからめんどくさいっておもったんだけど、目の前にそんなのかんけーねーっと言わんばかりに力づくで壊していつている奴らがいるんだから…やっぱりバグと呼ばれている人達は違うな。それにしても…

「…んーあいつ等は何のためにトラップ何か仕掛けたんだろうな？」

「ん〜？大方あれちゃう？足止めできればいいとか考えとったんやろ？」

「だろうな。だが…まあ…無駄だな」

「無駄ですね」

「無駄じゃな」

「ハッハー！！なんだこんなもんで俺様を止められるとも思っただのか！？」

「邪魔なんだよ！！」

はい。皆様お気づきの通りナギとラカンが手当たり次第ぶっ壊しています。

しかも中心に行けばいいとかきつと考えているのでしょうか。

目の前に壁があつたらそれをぶっ壊して直進しているんです。

確かに最短距離を進んでいけばそれだけ早くつくんだろっけどさ…さすがに壁壊しても直進するとか、それってどうなんだろう？

「……宮殿残るかな？」

「武。答えが分かってていうもんじゃないぞ？それにいいじゃないか…」

「え？…詠春さん？」

「フフフフ…今更どんだけ壊しても頭を下げる必要はない。それこそ宮殿壊してもな。最近ストレスが溜まりに溜まっていたんだ。」

丁度いい」

いや…あの…詠春さん？目が反転してるんですけど？
 どれだけストレス溜まってたんですかー！！！！
 黒い…黒いよ詠春さん！！

「…アルはん。これが終わったら詠春の為にクスリでもつくっても
らえへんか？」

「：そうですね。そうしましょう。彼が壊れてしまったらいろいろとダメになりますから。」

「詠春も疲れとったんじゃないの?」。すこしでも優しくせんとあかな

「フハハハハハハハ……邪魔者はすべて切り捨てる……!!」

これが修羅って奴か……

ああは絶対なりたくないな。

[illegible]

「うらあ
あ
あ
あ
！！！！」

ドゴォォン!!!!!!

「お！？なんだか広い所に出たぜ？」

「どうやらこの先がこの宮殿の中心部分みたいですね。」

「…まったく。まさか壁を壊しながらこっちにくるなんて、乱暴にもほどがあるよ」

ラカンが壁を壊し皆あたりを警戒しながらそこにはいると、丁度その中心には忘れもしないあの少年が佇んでいた。

「あ！テメーは…」

「久しぶりだね千の呪文の男…。まった君達のおかげでここまでやってきた事がすべて水の泡だよ。」

「ハッそいつは良かったぜ。テメーらがやっている事は気にいらねえ…。だからぶっ飛ばす」

「あいかわらず直線的だね。…だけど僕もその意見には賛成さ………
…君達はやり過ぎたよ。ここで死んでもらう」

そう少年が言うと今までどこに隠れていたのか、急に人影が現れ俺達一人一人に向かって突撃し、その場から遠ざける。
そして気付いたらこの場所には俺とあの少年の二人になっていた。

「…で、俺の相手はお前って事か？」

原作だとコイツはナギが相手することになってたんだけど、これは俺が介入した事によって変わった所なんだろうな。

てつきり適当な相手が俺に来ると思ってたんだけど、あてが外れた。

「そうだよ。本当なら僕の相手はナギだったんだけどね。…どうし

てもあの時の借りを反したくねて無理を言ってお願ひしたのさ。」

「借り？…おいおい借りがあるのはこっちのほうだろ？」

「まあそつちも借りはあると思うけど、こっちにはこっちで借りがあるのさ。」

そう言う少年は少し笑い体を動かし始めた。

「僕は魔法に結構自信があつてね。障壁も、そんじよそこらの魔法使い何かじゃ破れもしないぐらい強力なはずんだけどさ…それを破るのではなく突き抜けさせた。それがちよつと悔しくてね。だからこつして君と対峙してるってわけさ。」

「なるほどな。…にしても冷静そうに見えて実は結構熱血タイプなのか？」

「自分でもこんな気持ちになるのは驚いているさ。…でも悪くないね」

「そうか…。ははっなんだか俺お前のことちよつと好きになつたよ。」

「お？それはうれしいよ。まあ僕も君の事は嫌いじゃないけどね…」

俺達は和やかに会話をしながら、コツコツと中心に向かって歩いていきその間に少年と俺は魔力を高めながらすぐにも動けるように準備をしていく。

そしてある程度近づいた所で俺達はそこに立ち止まりすぐにも戦闘がおこなえるように構える。

「…そういえばあの時はいろいろあつて名前聞きそびれたけど、なんていうんだ？」

「そういえばそうだったね。本来僕には名前なんてもんはないし、呼ばれている名前も気に入ってないからね…僕の事を呼ぶならフェイト…フェイト・アーウェルンクスって呼んでくれないか？」

この名前を聞いて俺は愕然とした。

なんだって！？なんでここでもうフェイトが出てくるんだ？

たしかここに来るのは確か一番目…フェイトじゃなかったはずなのに。

フェイトの話聞いてる限りだと、元老院議員に化けていたのもどうやらこいつらしいし…

いろいろ変わっちまったみたいだけど、それはそれでいいか。それに丁度いいのかもしれない。

フェイト…コイツは間違いなく俺達と同レベル。

今まで稽古として詠春やナギ、ラカン達と戦ってきたけどそれはあくまで稽古。

同レベルの人物と真剣に戦ったのは詠春と戦った時以来になる。

あれから俺がどれだけ強くなれたのか確かめるチャンスだろ。

あれ？俺、戦闘狂じゃなかったはずなんだけどな…もしかしたら銃闘技を扱っているせいで、剛打銃のようにスリルを楽しむようになったのかな？

ははっ…俺も龍ちゃんやラカンのこともう言えないな…

「わかったフェイトだな。」

「君の名前知ってはいるんだけど、君から教えてもらえるかい？」

「俺の名前はタケル・ダテだ。好きに呼んでいいよ。」

「じゃあタケやんと…」

「タケルと呼べ、タケルと！」

「冗談だよ。」

そう言つてクスクス笑い出す。

性格原作と違つてねえか？まあこっちの方がとっつきやすいし、親しみも沸くんだけどさ。

何か調子くるうな。

「さて、君と話すのはとても楽しいんだけどそろそろ始めないとね。」

「…そうしようか。」

「じゃあ」「それじゃ」

『始めようか！！！！』

第十三話：決戦・前（後書き）

いかがだったでしょうか？

この展開を読んでいた人は果たして何人いるのだろうか…

次回はフェイトとの本格的な戦闘となります。

今書いたものを修正中ではありますが、それなりにうまくかけているのかな？

自分では結構やりきった感があったりしてます。

ヒロインも公開してはやく武たちと絡ませていきたいので頑張ります！！

ではまた次回楽しみにしていってください。

P S… アンケートの結果は活動報告で報告させてもらいます。
予定としては十三話が終わった頃になると思いますのでそれまではアンケート続行となります。気が変わったり、やっぱりあのキャラも追加して欲しいと思ったらいつでも感想に書いてください。

第十四話：決戦・中編（前書き）

お疲れ様です。

寒い夜には熱い二次小説を：

みたいな感じでお送りしたいと思います。

原作フェイトが好きな人には正直ん？っと思う所が何度かあるかも知れませんがその辺はご了承ください。

それではどうぞ！

第十四話：決戦・中編

【Onther・Side】

ビシッ…

どこからともなく音が聞こえてくる。

それは戦いの始まりであった。

先ほど、戦いを決意しそれを言葉によって表明した二人だったが、その後はまったくといっていいほど動かず…いや動けず、その場でじっと動き出す切欠をまっていた。

そしてそれは起こった。

…二人は敵を互いの得意な距離に置こうと動き出す。

最初に仕掛けたのは、武からだった。

「オン・フイスト・ガン・ペンスリット

” 契約に従い我に従え炎の霸王” ” 来たれ浄化の炎” ” 燃え盛る大剣”

” ほとばしれよ” ” ソドムを焼きし火と硫黄” ” 罪ありし物を死の塵に”

” 燃える天空” …… ” 固定” ” 掌握” ” 術式兵装” …… ” 赤熱の騎士” ……

「いきなり” 闇の魔法” かい？これは評価されていると思っていいのかな？」

「ああ。最初から出し惜しみなんてしてたらすぐにでも負けそうなんだな。…それに勝負は楽しみたいが時間がないのも事実。だから

早く決着をつけたいと思ってね」

「つれないねえ……。だけどその技はたしか”炎帝”って名前じゃなかったけ？」

「”炎帝”の名にもつと相応しい技を習得したからね。これには改めて名前をつけさせてもらったのさ。」

「なるほど……。じゃあまずはその”炎帝”を引っ張り出さないといけないかな？」

「この”赤熱の騎士”もなめないで欲しいな。フェイトたちが調べていた時よりも数段威力共に上がってるんだから……」

武がそう言い放ちフェイトに向かって炎を纏ったガンブレットを撃つ。

その威力は武が言った様に、今までとは比べものにならないくらい強力。

言ってみれば”豪殺居合い拳”に炎が螺旋を巻くようにまとわりついている感じだ。

それを見たフェイトは最初受け止めようと構えたが、背中にゾクリと冷たいものがはしりその場から回避する。

ドゴオオオオンー！！

すると先ほどまでフェイトがいたであろう場所には大きなクレーターが、そして地面は所々黒くこげていた。
しかも中心には拳の痕がくつきりと残り、その拳の威力の凄さをまざまざと見せ付けているようだった。

「…なるほど。確かに。さっき言った言葉は訂正させてもらうよ。本当に君の拳は危険だね。」

「ま、これでも”銃神”とかたいそうな名前をつけられているんだ。これくらいは出来ないとか名前負けするだろ？」

「ふう…」銃神”ね。いままでも十分名前負けしてなかったと思うけど…。やはり君は”紅き翼”の中で最も注意すべき相手だと思うよ。」

「嬉しい事言ってくれているけど、”紅き翼”の中じゃ強い方だとは思ってないんだ。注意するべき奴は他にもいるさ…」

「やれやれ…：自覚していないのがもつと腹立たしいね。…そして何よりも恐ろしい。」

「言ってる。オラア！！どんどん行くぜ！！」

強制的に会話を終わらせると、先ほど撃ったガンブレットをフェイトに向かって連射する。

その多さにフェイトも顔を歪めながらも致命傷を避けつつよけて行くが、その眼光は鋭く、わずかな隙も見逃さないように相手を睨みつけ、そしていつでも魔法が撃てるように準備をしているようだった。

一方武の方と言えばこちらもまた、ガンブレットを連射しながらもフェイトが魔法を撃つタイミングを計っていることを重々承知しており、撃たれるにしてもなるべくこちらがいい状態で次につなげられるように注意しながら相手を追い詰めて行く。もちろんこのまま終わって決めの一発を食らわせれるならそれに越した事はないと思っ
てはいるが、相手は少なくとも俺よりは下の実力者ではないフェ

イト。

そう簡単にいくとは思えなかった。

「くっ…隙探そうにもこう威力のあるものを連射されたら隙なんて見つかりそうにないね。……ならここは少し強引でもちよっとおとなしくしてもらおうか!」

フェイトがそう呟くと、ガンブレットをギリギリまで引き付けて避け、相手が次を撃つ前に無詠唱魔法を繰り出す。

「千波黒耀剣!」

するとフェイトの周りに無数の石の剣が出現し、武に向かって突っ込んでいく。

それを見た武はガンブレットを撃つのをやめ、ガンマンポジションに構えを返るとすべて撃ち落す。

「これくらいなんてことない!」

「そんな事分かっているよ。でもこれで少しは時間が稼げた。今度は僕からいかせてもらうよ!」

「”障壁突破””石の槍”!」

フェイトがそう唱えると、武の足元から急に上がった石が武のお腹を目指して伸びてくる。

「チッ!」

それをバックステップでよけ、すぐにフェイトに向かって攻撃を仕

掛けようとするが、目の前にはフェイトの次の攻撃が迫っていた。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

”おお…” 地の底に眠る死者の宮殿よ” 我らの下に姿を現せ”

”冥府の石柱”！！”

「まだだよ。『二重詠唱』

ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

”おお…” 地の底に眠る使者の宮殿よ” 我らの下に姿を現せ”

”冥府の石柱” 連続投下”！！”

あつという間に武の前には大きな一枚岩が次々と投下され、武を潰さんと迫ってくる。

「くそ…。同じタイミングで落としてくれればそれなりに楽なのに、わざと遅らせて撃つとか…性格悪いぞ。フェイト！！”

「それは心外だよ。それに君のガンブレットに比べればこんなの全然ましだろ！？そらどんどんいくよ！！”

武にそう言われ、心底心外だといわんばかりに呆れた顔をしながら次の魔法を唱え始める。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

”小さき王” 八つ足の蜥蜴” 邪眼の主よ”

”その光” 我手に宿し” 災いなる眼差しで射よ”

”石化の邪眼”！！”

するとフェイトの手から光線が発射され、それを見た武は聞こえてきた呪文と背中に感じた寒気を信じすぐさま、その場から離れる。

そしてそれは正解だった。

先ほどまで武がいた場所では不気味な石のオブジェができていたのだから……

大方、フェイトと武の戦いを影でこっそりと見て隙あらば武をしとめようとしていた、フェイト側の人物であろう……今にも後ろから殴りかかるうとしていた所を”石化の邪眼”によって石像となっていた。

「……あつぶね。にしても味方まで巻き添えかよ……。」

「味方？……せつかくの決闘を邪魔しようなんてやからなんて味方じゃないさ。それにしても……さすがの”闇の魔法”でもその様子だと石化は防げないみたいだね。」

「それを承知で使ったんだろどうせ……。」

「確証はなかったさ……でもこれで君に有効な攻撃方法が分かったよ」

「ふっ……だからと言ってそう簡単に使わせるかよ。」

武は突撃形態 アサルト・ポジション をとると、宙に浮かんでいるフェイトめがけて突っ込む。

しかも足の方に魔力を集中したおかげか、まるでロケット噴射をしたように炎の道を空に描きながら突っ込んでいく。

「くっ……旧世界で見たことがあるミサイルみたいだよ。まあ……威力もスピードも桁違いだろうけどね。」

「お褒めいただき光荣だ……お礼に一発くらっていきな！」

「それはごめんこうむるよ！」

「えんりようすんな…よ！！！」

武の突っ込んでくるスピードに魔法は撃つ暇がないし、逃げるのにも無理があると判断したのか、その場で魔力を集中させて武の拳を防ごうと突き出した手で向かってくる拳を払おうとする。

フェイトの考えでは銃弾と同じく側面から衝撃を与えれば武の拳は方向を変えて防げると思ったのだろうがそれは甘い考えだと思いきらされる。

「ぐっ…！！！」

払おうとした手をはじかれてそのまま武の拳は吸い込まれるようにフェイトの体に突き刺さっていた。

「続けていくぜ！！セカンド！サード…！」

一度懐に入ったらもう武は止まらない。

体を回転させてながらハンマーコックをしていき、二発・三発とフェイトにマグナムを撃ちつけていく。

その間フェイトも何とかしてこの間合いから脱却しようと後ろに向かってバックステップをするのだが、リボルバーマグナムの特徴の一つがそれを許さない。

リボルバーマグナムは回転しながら次のショットに繋げていく為、セカンド・ショット―サード・ショットと続けると遠心力によりどんどん撃つスピードが上がっていく。しかも回転は相手の懐に飛び込む役目もしており、一度マグナムからリボルバーへと繋げられると回避するのが難しくあつという間に最高弾数である6発を無防備に打ち込まれてしまうのである。

ドン！ドン！ドン！ドン！

「おっしやああーラストショット！」

五発撃ち終り最後の一発をフェイトの体ど真ん中に標準を定める
しかしその瞬間、フェイトも口から血を流しながらこっちを睨みつ
ける。

「あんまり……調子にのるなああ……！」

「いつけええええ……！」

ズガシヤアアアン！！！！……ズズン！

二人がぶつかり合った瞬間、一瞬その場が真っ白になり次の瞬間大
きな爆発音と衝撃波が巻き起こった。その衝撃の強さをものわたる
かのように、周りの壁のあちこちには罅が入り、ひどい所では崩れ
落ち外が見えている所もあった。

爆発の中心はと言うと、地上で戦っていたわけでもないのにその場
所はクレーターのように入こんでおり、沢山あったはずの瓦礫とか
は跡形もなくなっていた。

そして二人はというと……

ガラッ……

「ゴホッ……ペッ……ハアハア……（まさかあそこでこっちを殴るだけ
の余力を残していたなんてな。しかもご丁寧にカウンターにしゃが
つて……おかげでブラックアウトに加えてそのダメージで体が思うよ

うにうごかねえじゃねえか。ちっ…はやく動けよ俺の体！！あいつがこんなチャンスのがす訳がねえ。すぐに追撃がくるぞ！！」

武は必死にうまく動かない体を無理やり動かすが、体は動いてくれず片膝を付いたままだった。

それも仕方がないことだろう。マグナムをフルショットした後遺症のブラックアウトに加え、スピードが乗った所にカウンターであわされてしまえば、どんなにタフな奴でもすぐに体が動くわけない。武はかすむ視界の中せめてフェイトの姿でも見えればと、必死になつて探すが目の前にはフェイトの姿などどこにもなかった。

なせならフェイトも同じ状況に陥っていたからだ。

「グフツ…ハアハア…クツ…（最初から無傷で勝てるなんて考えてはいなかったし、タケルのことも要注意人物として油断してなかったつもりんだけど…このダメージはさすがに予想外すぎるね。この体は打撃とかにはかなりの耐性があるはずなんだけどな…。恐るべきは銃闘技…いやタケル本人かな？さてこの後どうするか…体が動くまでまだ少し時間が掛かる。それまでタケルがまってくれてくれるはずないし、これはかなりやばいね。」

フェイトも武と同じように体を無理やり動かそうとしていたが、まったく動けない。

ならばと意味は殆どないだろうが、気休めにと魔法障壁をはりはやく体が動けるように回復に努める。

もちろんあたりを見渡しながら警戒するのも忘れない。

こうして二人は互いに警戒し合いながらも体力の回復に努めこの後どうするのか考えるのであった。

[illegible]

100

体力が回復し、ようやく立ち上がる事が出来た二人は互いに見つめあい無言。

そしてしばらくそうやって見詰め合っていると互いに顔を歪め笑い出す。

クククツアーハツハツハ……

「なんだフェイトもぼろぼろだったのか」

「それはこっちの台詞だよ。おかげで余計な心配してしまったじゃないか。」

「自業自得だろ？」

「だろっね。にしてもなぜかな？」

ん?

「君に出会ってから驚く事ばかりだ。今までにない気持ちになり、言葉遣いも少し感情的になったり生まれて初めての体験だよ」

「でも悪くないんじゃないか？」

「ふっ…そうかもしれないね。」

その時フェイトはかすかにだが笑みをこぼした。
その表情に少し驚く武。

それは原作で知っている人形のようなフェイトではなく。
人そのものに見えたからだ。

ズズウウン…！

「おっと…タケルとこうして話している時間もそろそろ終わりみたいだ。名残惜しいけど決着をつけないとね。」

「みたいだな。さっき聞こえた音からして他の所も決着がつく頃だろうし…」

ザザッ………

「楽しかったよタケル。タケルを殺すのはなんだか勿体無い気がするけど、仕方がないね。これも世界のため…ここで終りにしよう。」

「俺も同じ気持ちだよ。さよならフェイト……お前は俺がここで撃ち殺す。」

二人とも互いに必殺を口にし構える。

もう両者とも戦っていられる時間は少ない。

だからこそ今もてる最高の一撃を撃たんと集中する。

ドオオオオン…！

ダッ…！

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト…」秘匿されし天上人」今こそその名を呼ばん」

”その者死を予期する者なり””その者すべてを視る瞳なり””その者すべての終りを示すものなり””その名の下に我に逆らいし者に永久の別れを告げよ”…”運命のダブルレット”！！」

フェイトがそう唱えると、フェイトの右腕に魔力が集まり姿を変えていく。

それは動いているものさえ止めてしまいそうなくらい美しい天使の翼だった。

その翼が羽を広げたかと思うと、まるで翼が意思を持っているかのようにタケルに向かって伸びていった。

「これが俺の最凶の一撃だ！…紅蓮の拳に貫かれな。エクスプロード・キャノン！！」

天使の翼が迫ってくる中、武も己の最凶の一撃を放たと力をためていた。

最強ではなく最凶…これは武がただピンチになろうと使うのをためらっていた銃闘技の奥義であった。

最凶の一撃の元の名前は44マグナム・キャノン。

相手に衝撃を貫通させる事が出来る44マグナムとは違い、これは相手の体ごと貫通させる事が出来る。つまり本物の銃と変わらない一撃を出す技である。

もちろん奥義と呼ばれるだけありそう簡単に撃てるものではない。

このマグナム・キャノンを撃つ為には相手を殺すという意志…つまり”殺意”が必要なのだ。

武にとって”殺意”を持つ事は正直難しい事ではなかった。

今は戦争をやっているのだ。”殺意”を抱かせる理由なんてそこら

じゅうにあるのだから。

実際戦争に参戦してからすぐにこのマグナムを使う事が出来たくらいなのだ。

だけど今まで使うことはなかった。いや使う気も起こらなかったがきつと正しいのだろう。

それは人を殺すのが怖いわけではなく、自分が”殺意”に飲まれることが怖かったから。

そして人を殺しても罪悪感を持たなくなってしまう事を恐れたからだった。

だから使わない。

そう決めていたはずなのに……

武はこの場面で迷わずそれを使うことにした。

別にフェイトをそこまで憎んでいるわけではないのに、何故か”今使うべき”そう思った。

それはきつと……

ドゴオオオオオオン！！！！！！

大きな爆発音と閃光が武たちが戦っていた部屋を包み込む。

その衝撃波で部屋の壁は殆どはじけとび外が丸見えになっていた。そして二人はその中心にいた。

一人はたっているものの左手から左肩にかけて石になっていた。

そしてもう一人は上半身だけの姿になってその場に倒れていた。

「ゴフツ……見事だよ……タケル。僕の負けだ」

「ほんの少しの差だったけどな」

そう言っただけは石化された左腕を左手でさする。

「フフ…どこがほんの少しなのかな…。」

そう言っただけはあの瞬間を思い出す。

あの時フェイトは自分の勝利を確信していた。

（いくら力をためる必要があるとはいえ、いくらなんでもタケルの行動が遅すぎる。あの状態からじゃもう避けることもできない。もしかしたらこの魔法ごと迎撃を考えているのかもしれないけど、それは甘い。これは僕が創り上げた石化の最大呪文。その翼に触れるすべても物を石化させる。いくらその拳が強くてもこの魔法は撃ち破れるわけではない）

しかし、次の瞬間武が起こした行動にフェイトは驚くのであった。武はフェイトの攻撃がまじかに迫った所で、ハンマーコックしていない左手をわざと魔法の中に突き入れ、その魔法の根元であるフェイトの腕を外側にはじく。

いくら石化魔法といえど一瞬にして石化する訳ではなく、ほんのわずかではあるが自由に動かせる時間はある。ただどまさか左手を犠牲にするとは思っても見なく、フェイトはなすがまま手をはじかれてしまった。

そして武はあいたスペースにもぐりこむとフェイトに向かってエクスプロード・キャノンを放ったのだった。

「まさか左腕を犠牲にするなんて思わなかったよ…でもそれ以上に驚いたのが最後の技。アレは一体なんなんだい？」

「言っただろ？最凶の一撃だつてさ」

「最凶……フフツツ…確かに最凶だね。僕をこんな姿にするんだから……でも疑問が残る。何故この技を今まで使わなかったんだ？」

「……この技は封印してたんだよ。あまりにも威力が強すぎる……それこそ死ぬまで使う気なんてなかったよ」

「……だつたらなぜ？」

当然のように聞くフェイトに対してタケルは何処か遠くを見つめるように呟く。

「さて……正直自分でも良く分かってない……ただ、フェイトにこれを使う事は礼儀だと思った。そうとしか今の俺には言えないよ。」

「そっか……」

その答えに何処か満足したような顔をしてフェイトは、壊れた壁から除かせている空を見上げた。

「……はやくナギ達に合流したほうがいい。」

「えっ？」

「僕達が真の黒幕じゃないってこそさ……真の黒幕は別にいる。そしてそのお方はきっとナギを狙ってくると思うよ」

「……なんでそれを俺に？」

「……………君と同じ礼儀だよ。命を懸けて僕と戦ってくれたね」

「……………ありがとう。」

「礼なんていらないよ。ふう……………でも最後に銃神の腕を潰せたのはいい思い出になったかな」

「……………わるいな」

そうフェイトに謝ると、武は右手に意識を集中させる。

するとその手には白っぽい何かが集まり、武はそれを石化している左腕に当てる。

すると石化した左手はあつという間にもとの腕に治っていた。

「……………クククツ……………君は本当に面白いね。まさかそんな事まで出来るなんて……………」

「俺だけにしか出来ない裏技だよ。……………龍ちゃん以外でこれを知っているのはフェイトだけだからないしょにしてくれよ?」

「さて……………それはどうしようかな?」

二人はそう言い合いながら笑い出す。

「じゃ……………行くわ」

「……………またいつか逢おう。今度逢う時までにもっと強くなっておくから……………」

「……そんな時はまた返り討ちにしてやるよ。」

ニヤリとした顔でフェイトにそう言つと武はその場を後にした。
フェイトといえば武がその場を立ち去るのを見届けた後、満足そうに笑みを浮かべながら目を閉じていく…。

その顔は決して敗者がするような顔ではなかった。

武VSフェイト……………勝者・武。

第十四話：決戦・中編（後書き）

技説明&裏話

”運命のダブレット”

この元ネタは、天使図鑑のある天使からとったものです。

名前もそこからいただきました。

なんでも天使は人が死ぬ間際に現れるといわれている天使で、その翼には生きているものすべての目があるとか…

天使なのに死神みたいなのはどうなんだろう？とか最初読んだ時思いました。

最初は土系の最大魔法でもいいかと思っていたんですが、私の中で土に火ってどうなのよ？って思い石化の最大呪文を作りました。

フエイト君石化好きですからね（笑

エクスプロード・キャノン

作品中にも説明があった通り44マグナム・キャノンの炎バージョンです。

名前についてはイメージしてこんな感じだろうとつけました。

イメージとしては通常キャノンは相手の体に銃と同じように穴をあけるものなのですが、炎を纏った場合そこに”爆発”という力が働くのではないかと考えました。その結果少々残酷ではありますが、体がぶっ飛びます。

本当なら使う予定はなかった技なんですよね。”殺意”をどうやって持たせるかとかどんな場面で使えばいいのかとかいろいろ考えてもいまいちピンと来なかったんです。ただこれを書いている時にフエイトにだったら使えるかな？と思いました。

命を懸けて戦う時の礼儀としてこれを使ったんだと思ってくれれば嬉しいです。

ただやっぱり私としてはあまり使いたくない技なのでもう出ないかもしれません。

さて今回はいかがだったでしょうか？

現時点で私が書ける最高の戦闘シーンを書いたつもりです。

もちろんではまだまだ満足はできていませんが、それでも読んでくださる方に戦闘の熱さとかドキドキが伝わってくれたらいいな
〜って思っています。

皆様の感想や意見を踏まえてもっと精進していきたいと思います。

感想や意見はいつでもお待ちしております。

”おもしろかった”だけでも嬉しいです。私のテンションがかなり
上がります。

アンケートの方もまだまだ募集中です。

そちらもよろしく願います。

では次回またよろしくです。

寒い日が続くので体にお気をつけて…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3392v/>

我拳は銃なりて

2011年11月25日20時55分発行